

マンガ大賞

Cartoon grand prize

2009

マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

あなたが選ぶマンガはなんですか？



マンガ大賞決定！

ノミネート 10 作品を含む、全投票作品の

選考員コメント掲載！



マンガ大賞 2009 大賞受賞作品

Be・Love / 講談社

「ちはやふる」 末次由紀

選考員コメント

一次選考

- 作家さんの情熱がひしひしと伝わってきます。3人がとても生き活きと描かれていて、これからの3人の成長がとても読んでいて気になります。ストーリーもテンポも良いので一気に世界観に引きずり込まれました。そして、作者からのメッセージがいっぱい詰まった作品に心揺らされました!!!

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 文化系コミックが人気となった昨年、新しい文化系コミックとして、競技かるたを題材にしたこの作品。本格的にかるたをし、そのかるたを通して、成長していく主人公達がまっすぐで、健気で純粋で、とても元気になるコミックです。今後の展開が気になる作品です。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- か、感動しました！少女マンガでスポ根もの、しかもかるた競技の団体戦とは！ひとりの天才の物語というわけではなく、皆で努力して一つの目標に向かっていく、その頑張りに打たれました。キャラも絵も物語も、すべてが素晴らしい。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- 競技かるたはある意味スポーツ。真剣に取り組む事の楽しさ、かるたを通して培われていく思い。胸を熱くさせます。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- まっすぐな主人公が『百人一首』『かるた』という、一見地味ながらも熱く激しいスポーツさながらの競技に自分の居場所を見つけ成長していくストーリーで、美しい絵柄と巧みな構成、繊細な人物描写に釘付けになります。そして、勝負のドキドキや恋心のドキドキにとにかく胸が高鳴ります。少女漫画の王道。この漫画家さんがまた戻ってきてくれたことに、感謝。

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- 競技かるたを題材にした、少女漫画と少年漫画的スポ根の幸せな結婚。主人公の真っ直ぐな想いがさわやか。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 聴力、記憶力、反射神経がものを言う熱いスポーツ(?)、百人一首競技かるたを題材にした青春ストーリー。かるたを通じて「一生懸命になること」「仲間と一緒にがんばること」「勝利をつかむこと」の気持ちよさに目覚めていく3人の様子は、読んでいるこちらまでドキドキして、惹きこまれてしまいます。2巻からは高校生に成長し、友情だけでなく3人の関係が描写され、どんどん物語が広く深くなってきます。面白いです！

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- 「自分のことでないと夢にしたらあかん。のっかったら駄目や」「賭けてから言いなさい」涙腺殺し文句満載。

コミックナタリー編集長 / 唐木 元

- 正統派少年漫画顔負けの純粋熱血バカ主人公。その主人公のかるたに対する情熱と豊かな喜怒哀楽に引き込まれ、読み出したなら止まらない。競技かるたが実は100枚の札のうち50枚しか使わないなど、自然と競技かるたのルールや戦略に詳しくなっていく構成もうまい。主役級キャラ3人のみ突出して尋常じゃない美形に描かれていて、そこは正統派少女漫画の流れを感じる。

書店員 / 小磯 洋

- 競技カルタという題材が新鮮です。絵もキャラも構成も文句なく、自然に引き込まれます。素直に面白いです。次が楽しみ。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

-
- 最初は、百人一首なんてよくわからないから面白いのかな？なんて思って手にとって見たが、すぐに惹き込まれてしまった。とにかく熱い！カルタの事がまったくわからない自分でも「やってみたら面白そう」だと思わせてくれた。ちはやの直向な気持ちを読者さえも同じ世界に連れて行ってしまふ。ただ一つの事にまっすぐ向かって行くちはやの行動になにか胸を熱くされました。今年一番の勇気や元気をくれるマンガです。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

- 昨年読んだマンガの中で一番、心が震えた。1巻を読んで、思わず会心のガッツポーズを決めたほど。以前の著作はほぼ未読、だから食指が進まずだったが、表紙のインパクトに惹かれて手に取ったのが当たりでした。1巻の、子供時代を描いたあたりが大好きです。まっすぐに打ち込むことができる、ある意味子供時代のの特権のようなきらきらした時間が、そこには確かに存在しています…！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

二次選考

- ある方との出会いから、かなり早い時期から「プッシュ」しつづけてきた作品です。全くの部外者ではあるのですが、勝手連的な意識でもってマンガ大賞での二次選考ノミネート、感無量です。末次先生の復活、心よりお喜び申し上げます。

本と文具 ツモリ / 津守 晋祐

- 熱い作品だと感じます。「とめはねっ！」に感じるものと共通するかも知れませんが、百人一首に若々しさを感じてしまう、というのは失礼でしょうか。単調にならなければ今後も注目の作品だと思います。

会社員 / 林 礼春

- おもしろい。頑張ってる描写に、ちょっと、はげまされたりした。気づき、恥ずかしかったが、おもしろい、なあ。

ミドリギターと歌 / 後藤 まりこ

- まっすぐな主人公が『百人一首』『かるた』という、一見地味ながらも熱く激しいスポーツさながらの競技に自分の居場所を見つけ成長していくストーリーで、美しい絵柄と巧みな構成、張り詰めた空気感、繊細な人物描写に釘付けになります。そして、勝負のドキドキや恋心のドキドキとにかく胸が高鳴ります。年齢性別関係なくハマれるコミックだと思います。

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- 「競技かるた」ってすげー！！と思わされた作品。百人一首すらろくに覚えていない私でも、すんなりこの世界観に入っていました。かるたのことにしても、主人公たちの関係性にしても、すごく丁寧に描かれていて、なおかつスポーツ漫画特有の「疾走感」もすばらしく、攻走守とバランスのとれた万能型の選手とでも申しましょか、とにかくものすごくはまっている作品のひとつです。何回読み直しても泣けるものは泣ける！男子にもぜひよんでいただきたい、王道少女マンガだと思います。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- 少女漫画というカテゴリーには入っているものの、むしろそんな枠関係無しに誰もが読める久々の大型少女漫画現る！って言うのが正直な感想です。これは今後どんどん露出していけば、ナナ並、それ以上のヒット作になるのではと思います。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 1巻の小学生編のエピソードだけでもすでに名作なのに、それを下敷きにした驚がくの展開と熱いハートに脱帽。友人知人に「今面白いマンガって何？」と聞かれたら迷わずこれを挙げる。いや、実際挙げている。また、ややもすると二度とペンを握れなかったかもしれない作者を丁寧に再生させた担当編集さんにも拍手を送りたい。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- 競技カルタと言う、知っていそうで実は知らない分野を題材にして、それに熱中する人たちの頑張りぶりを描いていて、勉強になるし刺激も受ける。自分には何もないのかも、なんて思っていないで何でもいから熱中できるものを見つけようよとさしてくれる。絵柄も好み。

書評家 / タニグチリウイチ

- とにかく熱くて、とにかくひたむきで、笑えて泣けて喜べるマンガ。ページをめくるたびに「これを読めること」に嬉しくてしかたがなくなります。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

- 作品から発せられるパワーは本当強烈で、グイグイ作品の中に吸い込まれていく術は、凄いの一言です！題材にしても、漫画としては難しいと思われるものを選んだ所も、色々な人に漫画の面白さや凄さを知ってもらえる作品だと思います。子どもの微妙な気持ちの変化も繊細に描かれており、大人になった私たちの心にグサッとささったりさせられる所も魅力の一つです色々な意味で、作家さんの力を再認識させられました！

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 1位は絶対コレって決めてました！いやもう号泣しながら読みました。この天才肌の主人公はもちろん、皆で一つの目標に向かって頑張るとか、スポ根ものの王道。なのにちゃんと少女マンガであるところが素晴らしい。ものすごくものすごく感動しました。絵もきれいだし、キャラもみんな抜群。心からオススメです。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- このまんがは、スラムダンク大好き女子で、担当した作品を言えば、あ、あれを！とみんな知っている名作を作り上げた優秀な編集者で、もちろん勤めている会社も「ちはやふる」の出版社とはぜんぜん違うところに勤めていて、末次さんともまったく面識にない M 嬢に薦められました。年末にメールをやりとりしてそれぞれのベストを書きあったのですが、、、 M 嬢のメールを以下、抜粋……個人的には「ちはやふる」は今一番おもしろい少女マンガだと思っています。末次さんは少し前に問題になったかたですけど、その前からマンガ力あるなーと思っていたので、編集部のかたもきつと頑張っ支えていらして、ご本人もふんばってたどり着いたんだらう「ちはやふる」のおもしろさがすごくうれしいです。入魂して、「おもしろいって思っで欲しい」と願っで丁寧な真摯に描いてらっしゃるなと思うので、このまま大事に描いて欲しい！と思っます。そんでもって、変は先入観抜きで皆さんに読んで欲しい！……とありました。で、遅ればせながら、もちろん心を狭くして、避けていた私ですが、M 嬢のメールの文面に心を打たれて、「ちはやふる」を読んでみました。スラムダンクがらみでいろいろあった作者ですが、誰にも挽回の機会はあるはず。例えば、「三井」のように。これは末次版「先生、まんがが描きたいです」。すごくおもしろい。

料理研究家 / 福田 里香

- 出来過ぎ！ と叫ばば叫べ。王道で、なんの悪いことがありましようや。アツアツのストーリーとセリフを、ペン画の極みに達した絵で読む！！それでいいじゃないか！！競技かるた、っていうマイナー競技にも、メジャーな、普遍的なたましいがやどる。マイナーな分、純粹だと感じちゃうのは、無邪気すぎますか？さらに、額に入れずとも、どんな画家の展覧会よりも美しい絵！ちはやちゃん、今のマンガ界美少女 No.1 だと思います。「無駄美人」ってワードまで用意して、観客の、読者の我々にだけサービス全開。と、ヒョロくんのような自分は、リアルタイムでこの作品に出会えた、その臨場感が、たまりません！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 女性誌連載なのに、少女マンガ、いやむしろ、少年マンガ。千早のキャラがかかるたや仲間との『絆』優先でヒーロー体質。しかしきちんと見た目は女性誌であるかぎり付いて回る『好ビジュアル』をきちんと守り、それを逆手に取って『ムダ』と表現したりしているところもよい。(普通はここでイケメンがやっている＝かかるたステキかも！になってしまうもの……) 王道さもあるのになんかワクワクさせる新しさもあり、今後の展開も気になる。また、作者がマンガを描くということ、それを読者に読まれ楽しみ合うことに真摯になって作っているのをヒシヒシと感じる。久々に『絵かき』ではなく『漫画家』の描いたマンガを読んだ気がした。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

- 実のところノミネートされるまでなかなか手が出ないでいた作品。これを気に読んでみたところはまっってしまった。競技かるたをここまで熱く描けるなんて・・それとも競技かるたは知らなかっただけでかなり熱い競技なのか・・どちらにしろ情熱と勢いがすごく伝わってきて楽しく読めた。

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

- この情熱を放っておくことなどできなかつた！男女年齢関係なくお勧めできる稀有なマンガです。とにかく読んで欲しい！

啓文堂書店吉祥寺店 / 山川 美香

- 散々選ぶのに迷いましたが、今年出会った新鮮な喜びが強かつたので1位。周りの誰に進めても面白かつたよ、のひと言が期待できそうです。ひねくれ者のオトナも、競技カルタという題材をキーに入っているとあります。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

- まず画力が高いこと。少女マンガと少年マンガのいいとこ取りのような(笑) 試合のときの迫力のある構成や繊細な描写がよかつたこと。そして、かつてない百人一首を舞台にはしているが、キャラクターがしっかりとしていれば舞台はどこでも成立する、ということを改めて納得した。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- 試合シーンの凜とした緊張感にドキドキし、主人公たち3人の成長や心の揺れにワクワクした。やっぱり末次由紀は面白い。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

-
- 「3月のライオン」とは逆に、少年マンガの根性を少女マンガに導入しているのが面白い。こうやって少年マンガと少女マンガの垣根は消失していくのか、と思わせる。どん底から這い上がってきた著者の根性にもエールを送りたい。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

- 聴力、記憶力、反射神経がものを言う熱いスポーツ(?)、百人一首競技かるたを題材にした青春ストーリー。かるたを通じて「一生懸命になること」「仲間と一緒にがんばること」「勝利をつかむこと」の気持ちよさに目覚めていく3人の様子は、読んでいるこちらまでときどきして、惹きこまれてしまいます。2巻からは高校生に成長し、友情だけでなく3人の関係が描写され、どんどん物語が広く深くなってきます。面白いです!

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- 競技かるたはある意味スポーツ。真剣に取り組む事の楽しさ、かるたを通して培われていく思い。胸を熱くさせる物語。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- 小倉百人一首は小学生の時に暗記の授業があり、楽しく遊んで好きになつつもりでしたがぬるかった・・・このマンガをよむまで競技として全然見ていなかったのです。友人同士お互い励ましあって、より高みに行こうとするさまはまるで少年スポーツマンガのよう。しかしこれから主人公は、「モノ」だった札に書かれている歌の意味、文字のならびに込められた先人の恋心を知る。少女マンガのキモである「恋心で成長する女の子」が、競技かるたと絡めてどんなふうに描かれるのかがとても楽しみです。「努力」「友情」「勝利」そして「恋」。アツい展開がから目が離せません!

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- きっと誰にお勧めしても面白いと言ってくれるマンガだろうと思います。カルタってのがこんなに奥深いものなんて知らなかった。これを読めばいやらしいイジメはなくなるような気がしました。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 候補 10 作品を並べてみた時、いくつかの「カテゴリー」に分類できることに気づく。例えば「文系熱血マンガ」。「3月のライオン」「ちはやふる」「とめはねっ!」(←コメディーとも取れるが、私的には熱血)の3作。面白さでは甲乙つけがたい。ここで「ちはやふる」に軍配を上げたいのは、古き良き少年マンガの熱き血潮が、もっともよく受け継がれている作品であるからだ。しかしこの作品はれっきとした少女(女性)マンガで掲載誌は「BE・L O V E」。これはもう、ブラジルで演歌や柔術が純粋進化したみたいなきらびだ。「3月のライオン」もたいへん捨てがたいが、将棋マンガには長い伝統と歴史があるのに対し、「競技かるたマンガ」の歴史は(皆無ではないが)ほとんどない。つまり、どのシーンも既視感がなく「初めて見る」驚きと新鮮さにあふれているのである。ストーリーのうまさも人物の出し入れも、ちょっと文句のつけようがない。見事な力作です。一度読めばめろめろになります。

新聞記者 / 石田 汗太

- 2次選考でこの作品がエントリーされていなければ、まだ読んでなかったかも。カルタという題材に恋の三角関係を足したらこんなにおもしろくなるとは!甘く見えました、カルタ!スポーツだったのかよ、カルタ!三角関係がベタだよ!といいながら手に汗にぎり真剣に読んでいた自分がいます・・・。読む機会をくれたマンガ大賞に感謝!続きが気になりすぎるマンガがまた増えてしまいました・・・。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- 競技かるたというジャンルの新しいコミックを連載し、その魅力が良く伝わってきました。少女コミックの枠を超えて、どの世代にも、また男女共に楽しめるコミックと感じました。書店員として応援し、もっと多くの人に読んでもらいたく今回1位に選ばせて頂きました。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 「競技かるた」を舞台として少し変わった青春を爽やかに且つ熱く魅せてくれる(スポ根?)作品。個人的には、かるた団体戦シーンの爽快感は「スラムダンク山王戦」以来の感覚でした。久しぶりに鳥肌の立つ作品にめぐり合えました。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

-
- 競技かるたに熱中する少年少女の熱い想いをさわやかに描く。華やかな作画で熱いストーリーという少女漫画と少年漫画のいいところ。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- アツくて面白かった。アツいだけでなく、キレイなのもいいです。熱血けどちゃんと少女漫画してる。

ライター / 芝田 隆広

- 静と動。誰も見たことがない魅力溢れる競技かるたシーンを描ければ、誰も文句のつけようがありません。

フリーライター / 会田 洋

- 二次選考で初めて読みましたがとてもおもしろかったです。話もまだまだ序盤だし、これからどんどん展開していくのが楽しみです。これを読んで競技かるたをはじめのコがもういるんだろうし、おもしろいマンガの影響力がすごいなと、つくづく思いました。

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

- 少女マンガって女子が読むものだと思ってました だってオレ男子だし、これまで読んだ事ことなかったしでもそんなおバカな自分ともしやうなら「ちはやふる」このマンガは僕ら体育会系男子の期待を良い意味で裏切ってくれます「小倉百人一首競技かるた」に記憶力・思考力・集中力・体力・さらにはリズム感・素早さが必要であると予想だにできなかった これはある意味立派な格闘技であるストーリー展開も程よくスピーディで決して読者を飽きさせない続きが読みたくて読みたくて仕方がないマンガ＝「ちはやふる」あ〜仕事が手につかない・・・

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- 「お試し版」を書店で手に取ったとき、大会シーンの出だしから、周囲がどうしてもよくなりぎーっと作品のなかに取り込まれてしまいました。熱意と技術と、どちらもたっぷりないと描けない作品だと思う。「かるた」というのが新しくはあるけれど、普遍的な作品。人が何かに真剣に取り組む姿は、美しい！

ライター / 門倉 紫麻

- なにか新しいことをはじめるときって、毎日世界が広がってゆく感覚を味わったことないですか？毎日が発見にあふれていて、退屈なんて無縁な感覚。多分子供の頃はだれでもそうだったと思うのですが、成長するにつれてそういう感覚はなくなってしまうのだと思います。この作品は競技カルタにのめりこんでゆく主人公を通じて、そんななにか新しいことをはじめるときのきらめきと、楽しさがみずしく描かれています。読んでみると、その頃を思い出して心が若返るような気がします。新学期や、新しいことをはじめるときに読みたい漫画だと思います。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- かるたが大好きながんばる女の子、千早がキラキラしてて力強い瞳に釘付けになります。競技かるたっておもしろい！自分では百人一首ってほとんどまともにしたことなく、やらなかったのがすごくもったいない気分。千早みたいなコがおもしろさを教えてくれてたらよかったに！今後、新が登場して来たらどんなふうになるのか気になる～。

主婦 / 紺野 泉

- マンガを読んで、揺さぶられる瞬間が好きだ。そしてこの作品は、昨年、間違いなく私を全力で揺さぶった！1巻が好きです。何度読んでも、子供のまっすぐさに打たれてしまう。全力が出せる時間と仲間に逢えることは、なんと素晴らしいことか。多くの人に読まれることを願います。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- まだ序盤ですが、密度の濃さは息苦しさを覚えるほど濃密です。題材は競技カルタと目新しいものの、何も取り柄がない（と思いついでいる）主人公の少女が夢中になるものに出会い、才能を開花させながら邁進してゆく・・・「エースをねらえ！」や「ガラスの仮面」等から続く王道中の王道路線の少女漫画。続きが楽しみです。

書店員 / 小磯 洋

-
- 努力・友情・勝利そしてキラキラ！！私たちはおと나다から、間違えることもあれば、やり直すこともできるし許すこともできる。このサイズの少女漫画にしては珍しく、1巻から何度も読んでしまった。面白いです。

POP 作家 / 久保 朝美

- 末次さん、おかえりなさい。一言で言うと、文化系スポ根漫画。少女漫画と言うには甘すぎず、少年漫画というには繊細で、とっても末次さんらしいピュアな作品。地味な印象のカルタだけど、こんなにアツくなれて、激しいスポーツだなんて！今後の展開も楽しみ。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

- なんといっても、ちはやのキャラクターがたっています。カルタというテーマがとても面白かった。この内容は、担当編集の方がカルタという競技で全国クラスの腕の持ち主であったからでこそ描けた内容ではないかと思いました。楽しそうにカルタをするちはやを見ているとカルタをやってみたいと思いました。まっすぐに、カルタという競技に向かっていくちはやの姿になんとも目を奪われてしまいます。読者にマンガを読ませて何かをやってみたい！と思わせてくれるマンガはとても素敵だと思います。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

- 読んでいて時折、息をするのを忘れていた時があります。千早の熱に巻き込まれたり、周囲の仲間たちの思いに巻き込まれて、心臓をどきどきいわせながらページをめくります。競技カルタのあの緊張感がうまく物語に合っていて、こちらも息をつめて読んでしまいます。

「ぱふ」編集者・ライター / 山本 文子

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

モーニング / 講談社

「宇宙兄弟」 小山宙哉

選考員コメント

一次選考

- エコとか環境とか、科学が現実的に思えて来たのは大人になったからなのではないでしょうか？ 21 世紀！宇宙！ってもっと夢のある話だと思っていたのに。この作品の主人公も、お勧めしたい人も、そんな大人が対象です。宇宙兄弟の主人公、南波六太は 1993 年生まれ。小さな頃は誰もが夢見た空の向こう。六太少年も同様でした。彼は大人になり、現実の中で失いかけていた「宇宙飛行士への夢」を、ふとしたきっかけで追いかける事になります。2025 年というそう遠くない未来を現実的に描きながら、「行動の原動力としての夢」をきちんと描いた作品。人生に迷っている友達にお勧めしたい一作です。

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- 間違いなく 2008 年マイベスト！自分の中にある『夢』というものを再確認しながら読んでいて自分を発見します。夢を見ること、持ち続けることの大切さに気づくんです。ただ、それが自分だけの力だけではないこと。運であったり。周りの家族であったり友であったり。そういったつながりの大切さにも気づける 1 作です。

BOOKS 昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- 現代に近い宇宙を目指す漫画で、読んでいて身近に感じやすい。ストーリー展開やキャラクターなど、読み手に飽きさせない面白さがあります。オール世代で楽しめるコミックとしてお勧めしたいコミックです。毎週、毎週、週刊モーニングを楽しみにして読んでいて作品なのでもっと多くの人に知ってもらって読んでもらいたい作品です。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 宇宙には全然興味がないのにハマってしまった。幼いころから宇宙に行きたかった兄弟。弟は実現し、兄は普通におつとめ。ひょんなことから兄も宇宙飛行士になるべく、再始動。しかしその道筋は茨の道で…。弟との約束どおり宇宙飛行士になれるのか。現在は宇宙飛行士になるための試験に挑んでいる段階。先が気になって仕方ないです！

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

- 二人の兄弟の宇宙への夢を軸に宇宙飛行士を目指す視線で描かれていることがあまりにも目新しかったので、読んでみたらもう止まらない！モーニングの発売までもが、待ち遠しくなるくらいむっちゃんを中心にまわりのキャラクターがいきいきとしていて面白い！！く～APO が飼いたい☆

アニメイト / 鈴木 寛子

- 宇宙を夢見る、ごくありきたりな中年のお話。才能と、葛藤と、常識と、夢と、現実と、。普遍的な日常の中で感じることを当たり前のように感じながらも、才能と強運を開花させてゆく、リアル(?) 中年サクセス(?) ストーリー。

デザイナー / 佐藤 優

- 「ハルジャン」「GGG」まだまだ続きが読みたいのにい〜〜〜っと思たのは私だけでしょうか？この絵・センスそしてストーリーどれをとっても「小山宙哉」の作品は私のストライクゾーンにビシビシと投げ込んでくる。ちょっぴり未来が舞台ですが、決して遠い話ではありません。そして何故か主人公「ムッタ」を昔から知っているかのような錯覚さえしてしまいます。何ともキャラクターの「心理描写」が秀逸であることに間違えないです。

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- 宇宙飛行士の傑作マンガです。未読の方、是非読んでください。三巻の「三次元アリ」にその意味が書いてある。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

■ 『ジジィ』の時からファンだが正直ここまで売れるとは思わなかった。うれしいはずなんだけどどこかちょっと寂しい気もする。

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ 兄弟で宇宙へ！宇宙飛行士というテーマがこれまたワクワクしますね。主人公、六太をはじめキャラクターもいやつが多くて根っからの悪人もいなくてそこも気持ち良く楽しめるポイントでしょうか。友情、兄弟の絆、恋愛、いろんな要素を詰め込んでぜひ兄弟揃って火星に到達するまでを見届けたい。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

■ 真逆のようでいて実は似ている兄弟の表現が秀逸！日常では垣間見ることのできない宇宙飛行士という壮大な道のりがリアルに描かれており、思わずワクワクしてしまいます。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

二次選考

- ちょっぴり見栄っ張りなお兄ちゃん。決して君は馬鹿じゃない！！

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- 各キャラクターの心理描写が魅力的。ヒロイン・せりかさんの日記をはじめ、全員が人間臭い！宇宙飛行士を目指してめっちゃ勉強した優等生でも、中身はやっぱり戸惑ったり、悩んだりする人間。この作品を読んでいる間はずっとみんなにニヤニヤさせられっぱなしでした。そして JAXA の宇宙飛行士選考試験。一つ一つの課題がユニークで、物事の本質をついていると思います。このコミックを読んだあと、自分の仕事に置き換えて「ムツタならどう対処する？」と思いを巡らすと、日々つまらなく感じていた作業も楽しくなります。読むとモチベーションがあがります！

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- なんとなく気にはなっていたのですが、ノミネートされて初めて読み、気がついたら全巻一気に読みました。『宇宙飛行士』というロマン溢れるテーマ、引き込まれるストーリー、人間味あふれるキャラクターたち、ちょっとした笑い、熱い台詞、魅力がいっぱい詰まっています。これからの展開にかなり期待です。

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- とにかく先が気になって気になって仕方がない。主人公が全く「ヒーロー」じゃないところに親近感。それゆえの、自分もなんとかすれば宇宙飛行士になれるのではなからうかという錯覚さえ起こしそうになるほど（実際そんなわけではないんですが）。宇宙飛行士に一番必要なものは、実は地上で暮らしている私たちが必要としているものとそんなに変わらないんじゃないかなーと思わせてくれる、夢と浪漫にあふれる素敵な作品です。宇宙が身近になりつつある今だからこそ是非！！

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- やはり全作品中で私の中ではベスト、でした！『夢』を持ち続けることがどれだけ人を大きくするのだろうか…そしてその過程は常にひとりでは成しえないということを感じさせてくれる1作でした。日々の私を支えてくれている周囲の全ての人にココロから『ありがとう』と言いたくなりました。

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- 夢に向かって突き進む兄弟の熱さ重視の物語かと思いきや、それだけじゃない。弟が先に夢を叶えてしまったという兄としては、すごく苦しい悔しいだろうけど、その葛藤しながらも弟を信頼しそして弟も兄を尊敬しているのが伝わり、心が温くなる。そして「今からでも遅くない」を思わせてくれる漫画。押し付ける熱さはなく、兄の楽天的なキャラクターが素敵だ。

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 宇宙を目指す。その一点に目標を定めてるような、そうでないような。目標に向かうとき、いろいろな迷いが生じますが、主人公の設定が絶妙で、その迷いの描かれ方が秀逸です。

医師 / 岸本 倫太郎

- デビューした時から、ずーっと気にして追いかけてきた作家さんなんで、逆に厳しい目になり、3位になってしまいました。たしかに最近注目されてきて、作品も面白いと思います。でも、まだ「度胸星」は超えられていない気がしますし、それを超えられる作家さんだと思います。来年に期待する意味も込めて、今年は3位です。

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 主人公は兄ちゃんの方です。葛藤したり絶望したり一足先に宇宙飛行士になる夢を叶えた弟に対して悶々したりと当然イロイロ起りますが、夢を掴む際に直面する色んなことにブチあたったりしてもこの兄ちゃんのキャラのせいか不思議と胸が痛くなったり心配したりはしません。むしろ、そういう考え方も有りなんだなあって目の前がパァッと明るくなる気がしました。それは宇宙飛行士になるための試験で特に発揮されています。今年ぜひ読んでもらいたい作品です。

All Japan Goith/TA-SHI

■ 子供の頃を思い出しました。

BUGY CRAXONE ドラム / モンチ

■ 『ちょっとしたこと』で人生はおおしく変わる。宇宙飛行士もニートも紙一重。これが、子供の頃思ってたことと、実際に大人になってから感じた、最大の違いかも。ムッタはニートになるのか、それとも宇宙飛行士になれるのか。そして、そのときには気づけない幸運に出会っても、極限の不幸に出会っても、オトナは、だまってほほえむのだ、日々人のように。ブライアン・ジェイのように。オトナのほうが、人生楽しいです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

■ なんといっても六太が好きです。女性は男性のギャップに弱いと言いますが、一見ダメそうなのに英語ペラペラだったり、実は超デキル男、六太。運の良さも多少あるみたいだけど、それ以上に人も良さそうだし…。でも顔は日々人のタイプですけどね。やはり宇宙を目指す男にはロマンがある分ステキなんでしょうか…ホント、よい兄弟です。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

■ 一次選考に入れた中で唯一の残った作品。とにかく個々のキャラ設定がしっかりしててわかりやすい『ジジィ』のころからファンだっただけにうれしいようなさびしいよな…。でも今年とにかく大ブレイクしてほしい！！

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ とても日常離れた話のはずなのに、ものすごく普通人たちの、読んでいてついあこがれてしまう漫画。

デザイナー / 佐藤 優

■ 小山さんのマンガが好きで宇宙兄弟の連載が始まったときはドキドキしながら読みました。！どのマンガにも共通してる主人公のまっすぐさが凄く大好き。ムッチャンと日々人のなんだかんだで兄弟の絆も安心して読める。はたしてムッチャンは宇宙にいけるの？めっちゃ気になる。教えて小山さん！

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

■ このマンガを読んで、昔、スペースシャトルが日本上空を飛んでいく瞬間をリアルタイムで見たときのことを思い出しました。あとね、人間って凄いなあって思います。続きが気になってしょうがないマンガNo.1として選ばせていただきました。

啓文堂書店吉祥寺店 / 山川 美香

■ シビアなサバイバルテストを扱いつつ、適度なく緩さ > を通じてリアルな空気感を生み出すセンスが秀逸。

レビュアー / 福井 健太

■ 夢がある。マンガは夢を与えられる良質の媒体であると考える私にとっては、これは驚愕の「熱い」夢マンガだ。宇宙飛行士を目指す設定でダメ兄貴とイケてる弟が助け合う様は、妙に無機質、不明瞭なテーマ＝宇宙と対比的にエネルギーを感じざるを得ない。

マンガを愛するダンサー・コラムニスト / 新井 文月

■ 社会に出て挫折を味わった主人公が一念発起というかわダウダ迷いながらというかで宇宙飛行士を目指すのが人間らしく面白いです(まあバカさは桁外れですが)。他のエリート候補生を巻き込んでなんだかんだありながらも良い方向に導きながら共に成長していく様子が気持ち良いです。

信長書店四条河原町店 / 中村 誠亨

■ 宇宙飛行士モノの永遠の命題は、何が「ライトスタッフ」であり、それをどう描くか？ であるわけだが、出来の良い弟と普通の兄という兄弟モノもうまくはめこんでいる。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 登場人物が魅力的。主人公ムッタの出たところ勝負の行動が結果的には全ていい方向に繋がり、読んでいて次はどうなるかとワクワクする。宇宙への憧れをととても身近に感じさせてくれる。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

-
- とにかく主人公のキャラが良い！ちょっとアホで器小さい感じがたまりません・・・！彼を含めた宇宙飛行士のタマゴたちが、試練を乗り越えて命をあずけるチームになっていくさまにグッときました。一生懸命夢に向かって努力している人の姿を描いたものには、とても励まされるし元気をもらえます。このマンガもそういうマンガです。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- 宇宙飛行士の傑作マンガです。未読の方、読んでください。三巻の「三次元アリ」にその意味が書いてある。
オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 二人の兄弟の宇宙への夢を軸に宇宙飛行士を目指す視線で描かれていることがあまりにも目新しかったので、読んでみたらもう止まらない！モーニングの発売までもが、待ち遠しくなるくらいむっちゃんを中心にまわりのキャラクターがいきいきとしていて面白い！！APO が飼いたい☆

アニメイト / 鈴木 寛子

- 兄、六太のアホなのか、すごいのか未完の大器を感じさせるキャラクターに始まりどの登場人物も、ねっからの悪人が登場せず、ちょっとガンコなヤツもいるけど基本、良いヤツばかりで限られた宇宙飛行士の枠にどのキャラクターも入れてあげたくても誰がなるんだろう？と推理しながら読んでいます。宇宙に行く前にこんなに面白くて宇宙に行ったらどうなるんだろう・・・。この先がすごく楽しみです。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- ストーリーと、展開、キャラクター、そして間。全てにおいて読み手を引き付けてくれる作品です。いち個人としてはまってしまっているコミックですが、まだこれから、もっと面白くなりそうな展開を期待しているので、あえて今回は2位に選ばせて頂きました。宇宙を、宇宙飛行士をこんなに身近に感じれるコミックは今までなかったと思います。主人公がどんな風に成長し、周りを引き付けて、そして最終的に宇宙に行くのか、楽しみでなりません。おすすめです。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 真逆のようであるが実は似ている兄弟の表現が秀逸！日常では垣間見ることのできない宇宙飛行士という壮大な道のりがとってもリアルで、思わずワクワクしてしまいます。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- 弟を追って宇宙飛行士を目指す兄貴の物語。とぼけた風だが、思わぬところで懐の深さを見せる主人公と作品そのものへの印象がシンクロして、読み進むごとに好印象。エピソードで人物像を浮かび上がらせるのが巧みです。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 正直、今の巻数で評価して良いのか？と思ったんですが、今後の期待も含めて入れました。テーマとしてはありふれている「宇宙」モノなんですが、アツク読ませる作品です。続きが気になりまくります。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

- 世界は狭くなった。それに比例して宇宙も少しずつではあるが近づいてきている。25年くらい前だと、僕が触れることのできる宇宙は SF であり、ファンタジーであり、想像の世界だった。宇宙自体が物語の中心だった。宇宙は今でも選ばれた人のみが行けるところだけど、このマンガには宇宙を目指す人たちの人間模様が詰まっている。弟に先を越された兄の屈辱、兄が自分を追ってこないことに苛立つ弟、そんな2人を中心に、濃い人たちの群像劇がこちらを飽きさせない。

米子高校 司書 / 野間 勤

- まだまだ小山宙哉作品の続きが読みたいのにい〜〜〜っと思ったのは私だけでしょうか？この絵・センスそしてストーリーどれも「小山宙哉」の作品は私のストライクゾーンにビシビシと投げ込んでくる。ちょっぴり未来が舞台ですが、決して遠い話ではありません。そして何故か主人公「ムッタ」を昔から知っているかのような錯覚さえしてしまいます。何ともキャラクターの「心理描写」が秀逸であることに間違えありません。

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- 子供の頃に夢みたNASAの宇宙飛行士を目指す、そして先に宇宙飛行士になった弟(国民的有名人)を持った、主人公の兄・南波六太の性格設定と、時おりかますハッターが絶品。息詰まる展開に似つかわしくないひょうひょうとした「味」になっていい感じ。オトコ向けマンガの主人公らしく天性の勘と運を持っているんだけど、いい加減だったりだらしなかったり、スケベだったり、読むと笑えて元気になれる3枚目的なキャラクター造形が現代風(2025年の舞台設定だけ)のヒーロー像で読ませます。天バーだしなあ。人気作品らしい風格と潔さがあると思います。既刊4巻の時点ではまだJAXAの宇宙飛行士選抜試験のただ中だけど、ライバルでありおそらく今後固い絆で結ばれることになるだろう候補生たちのキャラ立ちぶりにも拍手です。それにしても、15年後の近未来という設定なのでSF的にどんなエピソードでも描けるわけだけど、宇宙飛行士としての適性を試す選抜試験のシリアスかつ意表をつく内容の数々は、これはもしかして事実なのか、と思いたくなるリアリティー。これがハッターだとしても気持ちよく騙されていた。そんなマンガらしい醍醐味を味わえてとても好きです。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- 宇宙飛行士を目指してがんばるお兄ちゃん、ムッタ。二枚目ではないけれど、挫折しそうになりながらも前へ進む姿はカッコいい！現在選抜試験、第3次審査。どんな展開が待っているのか待ち遠しい。

主婦 / 紺野 泉

- 過去の自分に見せてあげたいような、夢と希望、そして兄弟の素晴らしさを信じたい漫画でした。現在の年齢に近い主人公というのかなり感情移入できた要因でした。同年代の人たちには是非読んでもらって、夢を思いだして走り出してもらいたいです。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 宇宙飛行士モノであるが人間ドラマに重点が置かれており、理系的な知識が無くてもすんわりと入っている。また、取材に基づいた内容と思われる宇宙関連事業の描写も興味深く、一つの“職業モノ”としても十分に楽しめる。マニアックなテーマを一般人に向けて幅広く読めるような漫画にするというのは漫画界での最近の流れの一つだが、その好例。

Webサイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

- 2巻までは正直読むのが辛かった。でも、3巻以降からは先が読みたくて止められなかった。たぶん、二次選考に残っていなかったら、読むのが辛くなったところでページを閉じていたと思う。マンガ大賞に推薦してくれた他の選考員の方々に、このマンガを読ませてくれてありがとう！の気持ちを込めて。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- 「これ、大賞とるんじゃないか!？」と思う位面白かったけど、敢えて3位にしておきます(笑)。宇宙飛行士ネタっていうのが、もう最高。私は宇宙やら星やらは大好きだけど、宇宙飛行士に関しては全くの無知だったので、より興味を持つキッカケになりました。こういう専門的な漫画はやっぱりハマりやすい。すっごく面白かった。宇宙飛行士って、私にとっては物凄く未知で、物凄く遠いというか…そんな感じ?夢のまた夢というか。本当になれる人、居るの?って位。いや、居るけどさ(笑)。この作品を通して結構身近に感じました。だからと言って実際に「宇宙飛行士になってやる!」なんて思わないけど(笑)。宇宙飛行士になる為の試験って本当にあんな感じなんじゃないでしょうか?実際には大変なんでもんじゃ無い位大変なんだろうけど、試験内容面白いなーと思った。面接は嫌だけど、体験はしてみたい!って思うだけ、思ってみたり(笑)。訓練も面白そう。思うだけ…思うだけ(笑)。そーいえば、主人公のムッタは、スラムダunksの桜木タイプですね。こういう専門的な漫画の主人公っていうのは楽観的で前向きなムードメーカーみたいなタイプが多い気がする。この作品の主人公がそういうタイプで良かったと思う。だから、ハラハラドキドキワクワク出来る。でも私は弟のヒビトが好き(笑)。スラムダunksで例えれば流川タイプ…というよりポジション的に?…なんだかどうでも良い事を書いてしまった。とにかく私は早く続きが読みたい!!!気になる、気になるっ!!!今後期待大な作品です。これを読みながら脳内宇宙旅行をしたい。

ソロシガー / 山野 千佳

- 心地よいリズム、絶妙な抜けのセンス、まっすぐに育ってほしいと私が一番に願っていた作者の会心の一作。読んでいやな気持ちになる人がはたしているんでしょうか。誰に薦めても恥ずかしくない快作です!

POP 作家 / 久保 朝美

-
- 「夢を実現する」と言うこと。それに向かって努力すること。逃げたくなる気持ち。全部大人になったいまだから分かること。戦う主人公に自分を重ねて、応援したくなる。先が気になって気になって仕方ない。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

- 初めて読んだ時、とても夢を感じるマンガだった。宇宙というテーマは誰しも少年の頃憧れるテーマの一つであったと思う。次第に大人になっていく過程で少しずつ忘れていってしまう中で、また大人になった時に宇宙飛行士にチャレンジする姿が私の胸を熱くさせてくれました。かなり限られた人しかねない夢ですが、誰しもがなりたいと思える夢でもあります。ムッタの葛藤がまたなんとも人間臭い所がいい。あの姿が逆に愛着のもてるキャラクターとなっているのかも知れないですね。この後の波乱の展開に期待大！

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

- 登場人物が皆、すごくいい味だしてます。テーマは‘宇宙’を通して家族・挫折・勇気などいろんなテーマがあり、この先がとっても気になる。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

- がむしゃらに宇宙を目指す人を描くのではなくて、宇宙のロマンを描くのではなくて、こんな宇宙もの（？）の描き方があるんだな、面白いな、と素直に思えるので。宇宙飛行士ものがツボだというのがもっとも大きな気もしますが。ムッタがどんなふうに宇宙から地球を見るのかが見たいのです。

「ぱふ」編集者・ライター / 山本 文子

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

ヤングアニマル / 白泉社

「3月のライオン」 羽海野チカ

選考員コメント

一次選考

- 出てくる言葉が、重いけれど、でも自分に言われているような気になる場面が多い。そんな中出てくる暖かい人達が余計暖かく感じる人間味ある作品です。あ、2巻で出てくる将棋がわからない人用の絵本。あれ実際に欲しい！すごい！

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 愛する人を亡くした人、重い病を抱える人、親からの愛情を受けられない子供、厳しい勝負の世界に身を置く人…登場人物は皆、痛みを抱えています。この作品では、痛みを抱えた者同士が向き合ったとき、暖かみが生れます。苦しいからこそ人に優しくできる。このことに再び気付かせてくれて、まだその心がこの世にあることにホッとさせてくれます。

医師 / 岸本 倫太郎

- 面白い漫画を書く人は、何を題材にしても面白い。絵本のようなタッチの世界の中で、今後どのように主人公が孤独と戦い、戦士（将棋士）として純度を増していくか楽しみ。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- 熱血な野球少年に、背中が哀しいオヤジ、「おお、そんな手を打つてくるとは！」と驚かされた。作品の世界が大きく広がり、持ち味の切なさも倍増し。特にオヤジ方面を攻められるとメロメロになってしまいそう。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

- 前の作品よりこっちのが好きです。将棋やりたくなる。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 零君が細い黒い糸の上を一生懸命歩き続けているような感じがして何とも胸の奥をキュウキュウとしてくれるマンガで凄く良かった。零君の感情で静かなものが突然爆発する様がバクンバクンときた。今まで自分にとって未知の世界だった将棋のプロの世界も少しわかったりニャー達をつかっただけの将棋の説明はわかりやすく素敵すぎっす。できたらニャー達のマンガも描いてほしいっす。早く続きが読みたくてたまらないのです。

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

- 一昨年「ハチワンダイバー」が席卷した将棋マンガ界に羽海野チカが「参戦」したことに最初はびっくりしたが、2巻でもう傑作感に揺るぎなし。「みんなオレのせいだよ！？／ふざけんなよ／弱いのが悪いんじゃないか／弱いから負けんだよっ」……しびれます。すごいです。掲載誌が「ヤングアニマル」というのも素敵です。

新聞記者 / 石田 汗太

- 天才棋士の物語なら過去にもあったし今もある。けれどもそのどれとも違ったキュートなキャラで、どれよりもシビアに棋士の孤独をうかがわせた物語が「3月のライオン」ではないか。中学生棋士を騒がれ、期待と嫉みを浴び、家を出て暮らし始めた何もないマンション。もしも3姉妹が近所にいなかったら。熱すぎるライバルが存在しなかったら。姉妹もライバルもそれぞれに苦しみを抱えていて、けれども前向きに生きている。そんな人々に触れることで主人公も変わっていった。欠けたところを持った人々がつながりあって、補い合って生きていける素晴らしさを噛みしめられる傑作だ。

書評家 / タニグチリウイチ

- よし、読むぞ！と心構えがいる作品です。それこそ棋士が勝負に挑む時のような。画面から、主人公を通して作者の気迫が伝わってくるから心体が弱ってる時にはオススメできないです。(笑) それだけ心揺さぶられます。

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- ライバルや先輩もじょじょに出揃いつつあり、とても読み頃に。じいさんたちや中年が、ものっっそ、いい。零くんが色っぽいです。去年の例の世紀の対戦は、まじでリアルライオンでしたね。「3月のライオン」の主人公・桐山零は、東京の下町でひとり暮らしをする、17歳のプロ将棋の棋士。幼い頃、事故で家族を失った零くん。彼の前に現れた3姉妹との心の交流や、将棋界の頂点を目指す一癖も二癖もあるライバルたちとの戦いで、零はどう変わっていくのか？ 心の傷は癒えるのか？ そして、プロ棋士界の頂点を極めることができるのか？……という物語です。このマンガの舞台である将棋の世界は、一般女子には、かなり馴染みのないジャンルではありますが、これが、読むと、おもしろい。いいマンガというのは、ぜんぜん知らない勝負の世界を、まるで自分が昔からその世界の住人であるかのように、追体験させてくれるものです。例えば「頭文字D」（峠の走り屋まんが）とか、「スラムダンク」（高校バスケットまんが）とか。運転免許すら持っていないし、高校の体育の授業以来、バスケットボールに触ったところがない、生まれてこのかた、骨の髄まで、文化系気質のこんな私でも、このふたつのマンガには、心底燃えました。もちろん、萌えてもしましたが。「3月のライオン」も、確実にそんなマンガのひとつです。なにより、すばらしいのは、あの、メガネを描かせたら当代一の羽海野さんが、なんと、主人公に、こんどこそ、「黒縁めがね、黒髪」の風貌を与えてくれたのです。もちろん、「ハチクロ」も血中メガネ度の高いマンガではありました。数えたら20人以上メガネキャラが登場しましたから。でも、惜しむらくは、はぐちゃん、竹本くん、森田先輩、修ちゃん先生という、主人公クラスのキャラは、誰ひとりとして、メガネではなかったという。しかし、この「3月のライオン」は、主人公が真っ向メガネ。わー——マンガの神様（手塚治虫？）、ありがとう！私は、これが読みたかったです。いいじゃないですか、零くん、将棋を一生懸命指した末に、目が悪くなったんですね？ きっと。そういう、意味あるメガネこそが素敵なんです、伊達ではいけません。しかも、零くん、黒い学生ズボンに白いカッターシャツがイン、ですよ？ 繰り返します、ズボンにシャツがイン。黒縁めがね、黒髪で、黒ズボンに白シャツがイン。黒縁めがね、黒髪で、黒ズボンに白シャツがイン。黒縁めがね、黒髪で、黒ズボンに白シャツがイン。……3回くらい繰り返すと、ちょっとオブセッションぽくなって、大島弓子先生のネームみたいですね。ふふ。「3月のライオン」を未読の女子、さあ、読み始めるタイミングは今です。

料理研究家 / 福田 里香

- 架空の町「六月町」月島・佃界隈がモデル。河がいい。実にこの物語にはつくづく河が必要だ。そして、こいつを読むと思わず河に行きたくなる。人工的な。でもそれでも河はぐっと心に入り込んでくるな。と、こいつを知ってから、公園でビールが1位の俺は河のそばでビールが1位になりやがりました。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- 将棋に生きるひとたちのものがたり。ものがたりはまだ始まったばかりで、見えないところもたくさんあるのですが、すでにやさしかったりかわいかったり笑いがあったり、暗さに取り込まれそうになったり、それでも真摯に生きていたり、とネガポジのふれ幅が広くて、どうなることかはらはらします。見守り続けたいマンガ。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- 勝利のためにすべてをなげうつヒリヒリするよなプロフェッショナルの世界を描きつつ、なんでこうも暖かいのでしょうか……。あの「ハチミツとクローバー」の次の作品の舞台装置に、一見地味な棋士の世界を選んだ羽海野チカの自信と知見はやっぱりただ者ではない、と実感させてくれる既刊2巻。ハチクロをハチクロたらしめた、全編にわたって濃密だった「甘酸っぱい」青春要素が、本作では2巻に入ってライバルの二海堂くんのTV解説（名場面！）が出てきたあたりでやはり健在だったと気付かされる。東京の水辺の下町の風物のリアルな描写も物語に奥行きを与えている。どっぷり浸れます。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- 「将棋」という敷居を高く感じてしまう題材を羽海野チカ氏が描くと、こんなにおもしろくなる！と見せつけられた。多くの期待を裏切ることなくやっぱりおもしろい、と言える凄さ。少年の葛藤と成長を主に置き、個性的で素敵なキャラクターと共に繰り広げられる人間ドラマと将棋の対局は読むものをあきさせません。笑ったり泣いたり一緒になってうなってみたり。雑誌で追いかけていて今年一番掲載を楽しみにしていたマンガ作品です。僕の今年の1番です。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

二次選考

- 「はちクロ」の読後、納得がいかなかったので敢えて読んでなかったのですが、間違っていました。今回第2次選考に残ってなければ読んでなかったと思うので、本当にノミネートされていて良かったと思います。それぞれが今後、何を手に入れていくのか。最後まで必ず読み続けたいと思わせられる作品だと思います。

会社員 / 林 礼春

- 胸を「ぎゅっ」とわしずかみされるようなせつなさ、「ほっ」とするようなあたたかさがいいバランスで襲ってくる。

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- なめてました。おもしろいです。ねこ、かわいーなー、1 P、1 P、ちゃんとしてる。

ミドリギターと歌 / 後藤 まりこ

- この作品を読んで思うのは「さすが羽海野チカ」。少女マンガの前作「ハチミツとクローバー」から、女性の描き方などを青年誌向けに変えていて、(あかりさんの胸とか、香子さんのタイトスカートのお尻のラインとか、ハチクロには無かったです。個人的には嬉しいです・・・って何を書いているんだ?) それでもハチクロからの魅力、全てのキャラが活き活きと動き、そのすべてを魅力的に描く手法は更に進化しているかも知れません。2巻の後半あたりから、だんだん主人公の零君もよそ行きでない表情を見せてくれる様になりました。今後更に楽しみな作品です。

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- やはりウミノ先生は、世界のウミノ。胸キュンモラトリアムをかかせたらこの人は最強なんではないでしょうか？

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

- 1次でも推薦した作品。天才棋士というテーマは他にもあるがその孤独さがここまで描かれている作品はない。それぞれに欠けたところを持つ人達が出会い、交流しながら歩んでいく姿も心に響く。

書評家 / タニグチリウイチ

- あえてヤングアニマル。あえて将棋漫画。ハチクロファンを置き去りにしてまで切り開く新境地。登場人物が皆抱えてる闇の描き方はさすがです。

クリエイティブディレクター / NORISHIROCKS(hide2)

- 読んで将棋がやりたくなる。若さ、真摯さをこうやって描けるのは凄いことだ。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

- 間違いなく、2000年代を代表する女性漫画家の一人となるであろう作者。ここで選んでおこなくてどうする。深い作家性を持ちながらも高い娯楽性を併せ持ち、ギャグコメディとしての側面もありながら、一人の青年の成長の物語として非常に優れたストーリー。セリフと絵と全てを動員して、そこに描かれていない感情までも伝えてくれる表現力。明るくてコミカルな面が目立ちがちだが、一人の人間が抱える不安や悩み、孤独といった痛みを伴う心情を、丁寧で繊細に、芸術的完成度をもって読ませてくれる。

ひょうたん書店西田店店長 / 筒口 征洋

- スイマセン。第1話のスタートがあまりにも暗くて読んでいませんでした。間違っていました。単純に『面白い!』と思えました!夜中に読みながら久しぶりに声を出してゲラゲラ笑ってました。モモちゃん、二海堂、3匹のネコのもっちり感に一票 (笑)

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- 熱血な野球少年に、背中が哀しいオヤジ、「おお、そんな手を打つてくるとは!」と驚かされた。作品の世界が大きく広がり、持ち味の切なさも倍増し。特にオヤジ方面を攻められるとメロメロになってしまいそう。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

-
- 人間の内面の多層性に妥協なく取り組む名作だと思います。人の生活、社会というのは、単一の面ではとらえきれないものですが、そのことばかりに囚われて、その根本にある暖かな部分を忘れていないか。そんなことを考えさせてくれます。

医師 / 岸本 倫太郎

- 現在2巻まで出ていますが、またそのあとのヤングアニマル掲載分がすばらしい。「ハチクロ」では、あの、必ずリリカルなポエム終わり☆をしていた作者とは思えない。青年誌に掲載の勝負まんがにふさわしく、主人公が「負けたくない〜〜〜うおおおおおおお」みたいな咆哮終わりをかませてくれたり。まんがリテラシーが高すぎです！羽海野さんのまんが表現の「幅」にやられました。

料理研究家 / 福田 里香

- はっきり言ってまだ物語が始まってないのですが、これからの期待をこめて。羽海野さん、楽しみに続きお待ちしております！

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- はちクロ同様、作者の世界観が読んでいて気持ちのいい時間に引き込んでくれる漫画。

デザイナー / 佐藤 優

- 零君の心の葛藤が物凄く突き刺さってきてそれでいて、アカリさん達の温かさ。めっちゃ心つかまれました。他には猫ちゃん達の描写が半端ない！将棋マンガだけでも猫マンガって言っちゃっていいですかー？って位猫ちゃん達がイキイキしててかわいいんす

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

- ハチワンダイバーとはちみつとクローバーの合作ともいべきか、(両方頭に「ハチ」がつく。拍手!)この組み合わせを試みた姿勢にイチオシ点をつける。それはなぜか、恋愛と将棋はいわば水と油のような存在でありどちらも共存していく過程は皆無に等しい。しかし、近年のタブーとされる問題の組み合わせを現代マンガはなしえている事も事実。非常に難航するはずであるが、ささやかながら応援したくなる作品。

マンガを愛するダンサー・コラムニスト / 新井 文月

- きっと作者は中性的な感覚をお持ちなのだろうか。絵はとても女性的だけれど、今回のこのマンガでは戦う男(将棋士)の孤独、葛藤が中心。それがとてもリアルに出ていて、感情移入しやすい。今後は楽しみ。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- ノミネート10作品の中でぶっちぎりの1位です！登場人物皆心のどこかが欠けている中優しくあろうとすべき姿にとても好感が持てます。そしてプロ棋士の世界故将棋の勝負に対しての凄まじい執念、モモや小動物に代表されるかわいらしさ、これらの表現が一体となって昇華された作品だと思います。

信長書店四条河原町店 / 中村 誠亨

- 「私の居場所はどこにあるの？」という問いは、少女マンガの永遠のテーマだったが、実は現代人皆が抱える問題。その問いに対して、青年誌という場で、答えを見つけ出そうとしているところに心動かされる。ギャグの切れ味も健在で嬉しい。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

- 対局のシーンは読むほうも真剣勝負です。「あしたのジョーを」読んでいるような感覚。でもちゃんと笑えてほっこりできる場面もあって緊張と緩和の加減がさすがは羽海野先生だなあと感じました。

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- 羽海野チカが描くキラキラとドロドロのバランスは絶妙だ。キラキラとドロドロの狭間に立ち尽くす主人公は、そのすきまにどんな安らぎを見出すのか。作者が登場人物をとっても愛していて、その愛が伝わるから、とても苦しくて優しくてさびしい気持ちになる。見守りたい、と強く思う。将棋解説の先崎八段コラムもおちゃめでステキ。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- 数ある購読雑誌の連載作品の中で追いかけていて、掲載を楽しみにしていたマンガ作品のひとつです。氏のセンスあふれるギャグとモノローグは前作から変わらず健在で笑ったり泣いたり一緒になってうなづいたり。将棋と人々とのふれあいを通じて主人公の成長を軸に物語は進みます。この先にある主人公とそして周りを囲むキャラクターたちの幸せを願ってやまないマンガです。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- 天才ゆえ、プロフェッショナルゆえ、またその生い立ちゆえの孤独にさいなまれる高校生プロ棋士を主人公に据えているだけに、前作「ハチミツとクローバー」より全体的に重苦しいトーンになりがち。…かと思いきや、脇役、つまり主人公の日常にかかわってくる「普通の人々」の存在感に救われ、主人公に仮託して読む読み手をホッとさせるところがさすが。とは言っても脇役たちは一人としてただの「癒やしキャラ」ではないところが、かたずをのんで見守らざるを得ない陰影を物語に与えていると感じます。前作の舞台となった浜田山の商店街の店主たちの、時としてドタバタな描写にも表れていた「庶民」への温かい目線が、今作ではいっそうはっきりした形で取り入れられているところに惹かれます。主人公の桐山零が住むのは東京都中央区の新川近辺、彼がひょんなことから交流を持つことになる3姉妹が暮らす下町は隅田川を挟んだ対岸の佃とか月島あたり。姉妹はいかにも下町っ子で仲もよく、ご近所にも溶け込んで屈託ないように見えるけど、実は不慮の事故で両親を亡くしているという「影」がそこかしこに顔を出す。それは下町を下町たらしめる「身の丈」感を無視して巨大で、ファッショナブルではあるけれどもなんとも冷たい、ひとことで言えば「場」にそぐわない超高層マンション群にじわじわ浸食されて確実に薄れていく下町の下町らしさを思う時のやりきれなさにもどこか通じる、作者の「失われていく確かなものに寄せる愛情」と、その行く末に対する諦観を映しているように感じます。その意味でとても社会的（政治的？）なマンガだなあと。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- 羽海野チカは前作のハチクロがかなり自分のなかでヒットでした。「オサレ恋愛マンガ」というイメージも強いと思うのですが、一番評価したいのは人物の心理描写。アタシも拙いながら美術畑の人間で、竹本の苦しみは美術畑の人間誰もが一度は感じる苦しみ。何であんなにわかっているの！？て感じですがあんまり自分と重なりすぎて大学時代に読んで作品へのモチベーションをあげたり、号泣したり、竹本が塔を壊したのを見て、アタシも作品にチェーンソウをかけようとしたりと、とにかく思い出深い作家さんなのです。そんな羽海野さんの次のマンガは将棋！ビックリ！！ついでにヤングアニマル連載にもビックリ！！！！って感じだったのですが、読んでみるとやっぱり心理描写が上手いと感じるんですね。将棋をやったことではないのだけでもそう感じる。コマ割や表情、呼んでてこちらも苦しくなるほどの表現力がこの作家さんの私が愛するところなのです。こんな感受性強くて羽海野さんは大丈夫か！？といらん世話をしてしまうワタクシです。

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- 前作の「ハチミツとクローバー」より、断然こっちの方が好きです。なんだか不思議な懐かしさを感じました。多分、私はこういう「不器用で、闇の中で溺れているような男の子の主人公」っていうものが大好物なんだと思います。心の迷路に迷い込んで、出口が見つからず、もがいている姿はとても美しい。笑えるところは笑えるし、泣けるところは泣けるし、墮ちるところではとことん墮ちますが、やっぱり羽海野チカらしい作品。闇も在るけれど、ちゃんと光も在るって事を教えてくれるというか。この場合、光というのは川本家の人々。人は自分を受け入れてくれる存在や還る場所がある事に救われたりするものです。零も川本家の人々と触れ合っていく内に、救われていくんだろうな、救われたら良いな（願望）。全然触れなかったけど、これって将棋漫画なんですよ。でも将棋より結構メンタル面を重視して読んでいた気がします。将棋漫画って幾つかあるけど、私は将棋の事はさっぱり解らないし、あまり好んで読んでいた事がない。羽海野チカの作品だから、ちゃんと読めたというか。この作品を読んで、頭に浮かんだのは何故か「ヒカルの碁」。私は将棋と同じく囲碁の事はさっぱり解らなかったけど「ヒカルの碁」に物凄くハマって、家にある碁盤を引っ張り出して、意味も解らず棋譜並べを試みたり、今だに碁は打てないけれど、五目並べを覚えてみたり、日本棋院を見に行ってみたりしたものです。今は未だ解らないけど、この先そんな風にこの漫画に物凄くハマったら同じ様な事をするんじゃないかと思っています。そうやってこの漫画をキッカケに将棋を始める人も居るんだろうな。プロ棋士の闘志や心の葛藤が描かれているシーンで物凄くワクワクした自分が居ます。もっと手合いのシーンが増えたらもっと良いんだけどなあ。今後、私が将棋に興味を持つ程この漫画にハマるのかどうか、自分でも予測がつかないので楽しみです。

ソロシンガー / 山野井 千佳

-
- 連載で追っかけてたのですが読み返したらぐっときました。よいマンガを読んだ時は、映画を見たあのような気持ちになりますよね。単行本でまとめて読んで、そう感じました。

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

- あえて二位！ていうかね、もう誰かが言うまでもないですよ。いいに決まってるんだからもういいじゃん！（キレ気味）みんなもっとだめなやつ選ぼうよ！

文筆業 / 海猫沢 めろん

- もともと好きな作者さんだったのですが、将棋マンガなのにあまりその部分に注視せず、のんびりとしたふれあいの部分とのバランスが良いのでじーっと読んでいても疲れず、なんとなく先が気になるという素敵な作品です。普段あまりマンガを読まない人でもすーっとはまって「マンガってのもたまにはいいね」と思ってもらえるような作品だと思います☆

メガマン・ギター / 涼平

- 人との触れ合いが優しいです。キャラクターやその表情や風景や…全部が愛しくて。毎日の生活やごはんの時間を大切にしたいと思います。ごはんはおうちでみんなで食べるのがいいですね！

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

ビッグコミックオリジナル / 小学館

「深夜食堂」 安倍夜郎

選考員コメント

一次選考

- 一作ごとに味わえる、一品の料理とそれにまつわる人間ドラマ。漫画なのに「味」があるんです。ぜひお話しあれ！

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- 日本人なら誰もが味を頭にパッと思い浮かべることができそうな、ありふれた食材、ありふれた料理を実にウマそうに見せる。デビューは 2004 年だったと思うが、もう何十年も漫画家をやっているかのごとき枯れた味わいがしみじみと良い。

ライター / 芝田 隆広

- 味わいのある絵柄に、味わい深いストーリー。そして味わいたい数々の懐かしいおかず。これでもかこれでもかとしたみこられる漫画も良いのですが、こういった同じ空間、同じ時間が流れる漫画も心地よいですね！作者の人柄も十二分に出ていて、とても素晴らしい漫画だと思います！

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 究極でも至高でもありません高級食材も流行の食材も出てきません出てくるメニューもありきたりですでも、「深夜食堂」はお腹と心を満たしてくれますただし、読んでる僕らの心は満たしてくれてもお腹はいつも以上に減ってしまいます恐るべし「深夜食堂」

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- 世の中にはいろんな人がいて、色々なドラマがあります。幸せな人生とは小さな幸せの積み重ねで、その小さな幸せを感じられる場所や時間が多いほど、その人生は幸せだなんだと思います。この漫画の舞台になっている食堂は、その小さな幸せが一杯詰まったやさしい場所です。シンデレラストーリーはないけれど、毎日じわりとくる小さな幸せであふれている場所です。そんなつながりがほしくなった時はこの本を読みたくなります。リアルな人とのつながりの温かさが忘れ去られつつある現代に必須の一冊だと思います。こんなお店が近くにあってほしいなあ。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- しんみりお腹がすいていく。個人的にB級グルメが大好きなのでツボです。何てことない素朴なメニューと登場するお客さんの人生の味も見え隠れして味わい深い。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

- これを選ぶのは、単に私がこの食堂で飲みたいからだけです（笑）ああ、誰かこんなお店を開店してくれないかしら…。カフェ・アンティークと並んで、開店を熱望してます。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

二次選考

- 大阪に帰りたくなる。こんなかやったら、だんとつ、1番。たんたんと、もくもくと、そのなかでも、毎日、何かがある日常。うん。好きです。

ミドリ ギターと歌 / 後藤 まりこ

- 滋味あふれる人間模様。おいしいご飯を前にすると、人は誰もが本音で語りたくなる。こんなに心地のよいマンガはそうそうない。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

- もうね。連載はじめてからずっとこれはヤバイ！と言っておったのでノミネートうれしいです。読んでたら腹減る漫画 NO1!!

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

- 夜中にゆるゆる読むのに本当にちょうどいい。全くもって気軽に読める数少ない作品だと思います。そのくせふとした瞬間にほろっとさせられたりするとところがまたにこい。全年代のかたにおすすめできる食堂人情マンガです。わたしだったら「ねこまんま」をつくってもらおうかなあと思っています。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- 食べ物がテーマのマンガの評価は、読んだ後お腹が空くかどうかで決まる。その意味で言えば「トリコ」もすぐにお腹が空くマンガだが、こちらはお腹が空くのを確認するまでもなく自分の足が台所や店に向かってしまう点で軍配を上げる。いわゆる「人情もの」なのだろうが、適度にブラックなユーモアとベタベタしすぎていない距離感がよい。さて、実際にこの店があったら自分は何を頼むだろう……。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- 読む人を選ぶ絵柄だと思うけど。読まず嫌いと言わず嫌いは損ですよ。

クリエイティブディレクター / NORISHIROCKS(hide2)

- 作品自体は、もちろん最近の作品ですが、どこか懐かしく心温まる話の数々に、昭和の優しさを感じます！この作品は、韓国でも出版されているのですが、この手の作品は韓国では、まったくもって売れないのですが、この「深夜食堂」だけは例外で売れているのが作品のクオリティの高さを証明していると思います。漫画から離れた大人の人に薦めたい、そんな作品です！！本当、良い作品です。

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 食べ物が武器になっていないところがいいと思いました。ていねいな筆致で食べ物がどれもうまそう。食べ物性善説派（＝おいしいものをつくるひと、その価値がわかるひとには真の悪人はいない、最終的には救われる、という作風のまんが家のことをそう呼んでします）の最高峰のひとつかと。

料理研究家 / 福田 里香

- 毎回思うのだがとにかく食べたい！手の込んだ料理がでてこないのがまたいい。誰しも子供のときに食べたであろう料理が普通にでてくる。その味と懐かしさが想像できることがこの漫画の強みだろう。ちなみに前回一次選考に入れたが残らなかった作品だけに今回残ってくれてとてもうれしかった。

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

- 少し疲れた大人に進めるならダントツこれでしょう。こんな食堂が本当にあったら間違いなく通います。

啓文堂書店吉祥寺店 / 山川 美香

- 家庭の食卓やお弁当で出てくるような料理が、こんなにも懐かしく温かい気持ちで思い起こせるマンガは他にないのでは。刊行ペースがゆったりしてるので忘れたころに読むくらいになりそうですが、食堂のご主人はそれでもいつもの顔で迎えてくれるでしょう。本当はこういう場で取り上げるのが無粋なくらいだろうけど、好きなので許してください。ノミネートに上がっちゃったら選ばざるを得ないのです…

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

-
- 究極の食材、伝説の料理もいいけど、誰もが持ってる思い出の味ってのには敵わない気がします。そんな料理を出してくれる店。きっと常連にはなれないけれど、一度は行ってみたい。で、目玉焼き丼食いたい。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 第3カテゴリーは「グルメマンガ」ということにする。「深夜食堂」と「トリコ」だ。「トリコ」はダイナミックで面白いがやはりゲームの「モンスターハンター」の影響が強い。それと、狩られる相手があまりうまそうに見えないのがつらい（グルメマンガという分類がそもそも誤りかもしれないが）。「深夜食堂」は、今どきこういうスタイル（滝田ゆう？）の絵柄&話で、きちんと「おいしそうに」読ませるのが驚き。候補10作中、もっとも個性的な作品であり、生き残ってほしい世界。長く続けているとマンネリになりそうだが、マスターの左目の傷の理由がわかるまでは読んでしまいそう。

新聞記者 / 石田 汗太

- 強面の店主の、独り言のような語りがとっても心に染み入ります。普段食べている食べ物と、それにまつわる人物の1つ1つのエピソードに心が温まります。この本に載っている、素朴なお酒の肴を真似て作りおうちで晩酌しております。こんな食堂（居酒屋）あったら楽しいのにな〜。

アニメイト / 鈴木 寛子

- 現代の食堂を書いているマンガだけど、どこか懐かしさを感じる。そしてそこに集まってくるのは、やっぱりどこか懐かしさを感じる人達。それは深夜の0時からしか開いてないという設定がそう思わせるのだろうか。個人的にはコミックコーナーで1巻から平積みして、料理書関連にも置いてるくらいのお勧め漫画ではあるが、だからといって料理漫画という訳ではなくて、そこに集まってくる人と人との物語や生き様をメニューにした漫画だ。何杯でも食べれるんじゃない、何杯でも読める、人との情を感じたい方にはうってつけの漫画だと思うし、画力は秀逸とは言わないが、その分、話で読ませてるし普段漫画を読まない人にもぜひ味わってもらいたい、これぞマンガ大賞にふさわしい作品だ。

コミック担当 / 下司 卓史

- 深夜食堂という名前にちなんで、空腹を持って余すところが深夜にちびちびと読みたい作品。ポテトサラダ、カリカリベーコン、ソース焼きそば…。人間模様もいいけど、このマンガの主役はやはり料理かな。出てくる料理を無性に食べたくなる。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 究極でも至高でもありません高級食材も流行の食材も出てきません出てくるメニューもありきたりですが、「深夜食堂」はお腹と心を満たしてくれますただし、読んでる僕らの心は満たしてくれてもお腹の方はいつも以上に減ってしまいます恐るべし「深夜食堂」

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- この作品の舞台となるのは、深夜から朝まで営業している庶民的な食堂です。見た目は怖そうだけど、心優しい主人がお客さんのリクエストに応じた料理を作って出してくれます。そこでリクエストされる料理は、家庭を思わせる庶民的な料理。たこのウィナーや、バターライスなど、ありふれた料理ですが、普通のお店では出さないけれど、どれも皆、子供の頃家庭で食べたことがあるようなものばかりです。物語はその料理を食べたお客さんの人生をご主人が語る形式で進みます。身の回りにありそうでなさそうな、ちょっといい話、ちょっと幸せな話、ちょっと切ない話がたくさん詰まっています。共通しているのはどれもやさしさに溢れているということ。つかず離れずのご主人のナレーションとお客さんの距離感、リクエストした料理を食べたお客さんの笑顔、温かみのあるタッチで描かれるお店の雰囲気が心をやさしく満たしてくれます。疲れた心をやさしく癒す効力を持った漫画だと思います。あー。近くにこんな食堂あったら、毎晩通ってしまうなあ。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- 深夜に開店する自分の好きなメニューを注文できる食堂。グルメマンガが多い昨今、なんて庶民的なメニューの数々。おしつけがましくないお店の雰囲気がいい。自分もいつだったか食べたことのあるその食べ物を思い出させてくれます。なつかしくて思わずほんとに作ってみたりして…。最近、たこさんウインナをよく食べます、えへへ。でも赤いウインナって最近はあるまり売ってなくて困る…。

主婦 / 紺野 泉

-
- 優しい人になりたいなあ。と、毎日の生活の中で思いますが・・・優しい人ってどんな人なのでしょう？私にとってこの本の主人公の親父さん（そういえば名前まできたっけ）は今まで私の知っている人の中でも最も優しい人です。しかし、相手に対して何か特別なことをするわけではない。ただそれだけ。しかし、何者もこぼさない。料理もそうで、お客さんが食べたいといったものはできる範囲でつくってだす。ただそれだけ。それがとても優しいと感じるのです。人に気を配り、何かを施すだけでなく、ただそばにいる。ただ受け入れるというのも優しさであると気づかせてくれる作品。作者の安倍夜郎の事を少し調べてみると、なんと40歳過ぎてから漫画化デビューしたそうです。なんか納得。「書を捨てて町へ出よう」？「遊びをせんとや生まれけむ」？上手くいえないけれども、マンガ以外のことをたくさん知っている方だからこそ描けるマンガなのだと思います。学校以外を知らない私にとっては少しうらやましかったりします。きっと、ここ深夜食堂ではこれから先も大きな事件なんて起こらないのでしょう。それでいいんです。毎週一回深夜食堂も食べに行く感覚でマンガを読む。少しほっとする。今の私の楽しみです。

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- 「営業時間は深夜 0 時から朝の 7 時頃まで。メニューは豚汁定食にビール、酒、焼酎……それだけ。あとは勝手に注文してくれりゃあ、できるもんなら作るよ。」私の住んでます？五反田は深夜食堂っぽい感じに迎えてくれる店があります。いや、ぜんぜん違うバーなんですけどね、大人になるとそういうお店って 1 人ひとつぐらいもってるもんだなと最近思えてきて、何がなくてもちょっと行ってしまおう。昔なら絶対選ばないような漫画を俺が選ぶようになったのはおっさ、いやいや大人になって、深夜食堂を自分が持ち始めたって事なんだと感じてしまったのです。またまた今年もですが、深夜食堂は 1 次選考後に読み始めたんです。そして、はまりました。去年の皇国もそうだったし、やっぱりマンガ大賞の力は偉大です。その証拠にねこまんま、イカリング、サッポロ一番とチキンラーメンとチャルメラ、つくって喰ってしまいましたね。まだ喰ってないぞ昨日のカレー。アホな俺はきつとやるよ。うちで「深夜食堂」の会。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- しんみりお腹がすいていく何てことない素朴なメニューと登場するお客さんの人生の味も見え隠れして味わい深い作品です

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

週刊少年マガジン / 講談社

「青春少年マガジン 1978～1983」 小林まこと

選考員コメント

一次選考

■ 漫画好きなら必読の一冊。私は読みながら、泣きました。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

■ 人気作家として突っ走った作者ならではの記録青春ストーリー。序盤の調子の良い展開で笑わせて、後半で一気に泣かす。ずいぶん時間が経った今だからこそ描けた作品なんだろうと感じる。マガジン 50 周年にふさわしい一作だった。

ライター / 芝田 隆広

■ 週刊誌で連載を持った作家がどう生きてきたのか、良く判る作品です。ホント命を削って漫画って描いてるんだなあ、と。しかしマガジン50周年記念で描かれた作品なんですけど、あんまり関係ないのが著者の小林先生らしいです。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

■ ちょっと懐かしい小林さんの、自伝的作品。人気週刊連載作家の悩み、心と体が崩壊していく様がリアルで泣ける！働かってつれーなーと思いつつも、友人の大切さやいのちのはかなさなどいろんなことを教えてくれた作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ はじめはユーモラスに思える作者自画像（リアルな方）のしかめっ面、これが読後あらためて見直すと、涙をこらえた顔に見える。それにしても「作品のクオリティを尊重し」というフレーズには笑った。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

■ 「週刊少年マガジン」創刊 50 周年記念企画として集中連載された、小林まことの自伝的作品。自らの「少年マガジン」デビューからヒット作『1・2の三四郎』連載時の思い出話、同時期にデビューした友人漫画家たちとの交友などが小林まこと独特の軽妙でユーモアのあるタッチで描かれている。当時の「少年マガジン」の裏側が分かるマンガ史的な価値もさることながら、週刊連載の過酷さや今はもういない友人作家達とのエピソードなど、マンガ好きであれば昔からのマガジン読者でなくても大変興味深く心に残る話ばかり。もちろん当時の作者の連載やマガジンのことを知っていればより楽しめるが、この作品をきっかけに作中で描かれている作品や人物に興味を持った人も多くいるのではないだろうか。そういった意味ではマガジン創刊 50 周年を振り返る企画としても大成功だったと思われる。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

■ 文字通り漫画を描く事に命をかけた男たちの物語。残酷なのは、80年代当時マガジンの看板だった作品でも、現在すでに知る人の少ない状態な事。命を賭したのは同じでも、連載当時どれほど人気があっても、すべての作品が「あしたのジョー」「巨人の星」のように残るわけではないのだ。

書店員 / 小磯 洋

■ マンガ家がこんなに過酷なのか！と思いました。本の帯にかいてある「ボロボロ泣きながら描きました」との言葉には嘘が無かった。同じ時期に小林まことと共にマンガを描いていた仲の良かった友が、2人とも亡くなってしまっている。人の心を動かすと言う事は、それだけ命がけだと言う事なのであろう。大和田夏希が中盤で風呂に入るのが怖いというくだりがあったが、その位置に居続ける重みがひしひしと伝わってきた。小野新二の体が徐々に悪くなって行くが、その過程がとてつもなくたまたまなかった。これがフィクションであれば良いマンガだと思う所だが、実際の話だから、こっちはなんとも言えない気持ちになりました。若い人達には是非読んで欲しい一冊！1・2の三四郎が好きなら私は、また東三四郎が戦ってくれるのを未だに期待しています。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

二次選考

- この作品は来年のノミネートないだろうから・・・順位を繰り上げて投票します。この作品を読んで改めて漫画の創作現場は「修羅場」と化すことがよくわかりました。「必死」という言葉の「死」という文字がリアルに感じられる作品ですね。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- まさに「現代のまんが道」であり、「漫画家残酷物語」。かの超人的長寿マンガ『こち亀』の初期、星逃田というキャラがこんな言葉を言っていたのを思い出した。「マンガを読んで笑っている場合じゃねえぞ！泣けんだ！」この言葉を発したのが、30年以上の週刊連載のあいだ一度も休載せず、アシスタントにも徹夜すらさせていない秋本先生だというのがまた感慨深い。話はそれだが、本書を読んでいてそんなことを思い出した。1冊で終わるのは、もったいないマンガだ。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

- 小林さんの生きた漫画家が命を掛けて戦う激動の年代。今の読者にも届いたのではないのでしょうか？ハンカチ無しには読めない作品でした。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 壮絶の一言では語り尽くせない3人のマンガ家（うち2人は鬼籍に入っている）の半生を「唯一生き残った」小林まこと自らが語るという、とんでもない野心作。これが創刊50周年記念とはいえ「週刊少年マガジン」で毎週読めたのだから驚きだ。2人だけでなく、夢半ばで散っていったすべてのマンガ家への小林からの鎮魂歌としてマンガ史に残る作品だ。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- 作者の友への鎮魂歌。ていうかこれは壮大なる作者のマガジン編集部への復讐じゃないの？よくこれの連載を許したよね…マガジン編集部は寛大なのか？それとも気が付いていないのか？それともあの時代への反省なのか？作者の淡々とした語り口がああ頃の漫画業界の凄まじさを映し出す。涙なくしては読めないリアル漫画道。

クリエイティブディレクター / NORISHIROCKS(hide2)

- はじめはユーモラスに思える作者自画像（リアルな方）のしかめっ面、これが読後あらためて見直すと、涙をこらえた顔に見えてくる。それにしても「作品のクオリティを尊重し」というフレーズには笑った。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

- 「……楽しかった思い出など、ない !!」とは小林まこと先生の巻頭言ですが、確かに凄惨ともいべきマンガ家業と対照的に描かれる、同志がいる楽しみには憧れてしまいます。

往来堂書店 / 三木 雄太

- ここで描かれているのはあるいち時代の漫画家達の話。今の漫画家さん達もちろん、色んな思いはしているとは思けど、だけどこんなにマンガに全てを投げ出しているのかなと感じる。マンガは夢を与える仕事で、でも作り手は夢だけでは終わらない。けれど、夢をなくしては夢を与えられない……。この時代の漫画家さん達には夢があった気がする。だから読後が熱く、清々しく感じるんじゃないか。最近のマンガは器用さばかりが目立ってイマイチ入れ込めない。「うまいなー」ではなく一緒に一喜一憂できるマンガが読める日がまた来るとよいなあという願いを込めて一票！

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

- 正直、彼の絵は苦手なのだが、この物語には泣きました。マンガ家というものがいかに壮絶な職業であるかをまざまざと見せつけられました。まさに地獄のような時代があったのですね。そしてその中で培われた友情の素晴らしさに涙。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- 陳腐かもしれませんが「感動した」の一言ですね。『青春「小林まこと」』であってあんまりマガジン50周年とは関係ないかもしれないところが先生らしいです。あの頃マンガを読んでいた人達にも読んでもらいたい作品です。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

-
- サンデー・マガジン 50 周年企画は、正直ピンと来ないところが多かったのですが、この作品を生み出したのは功績として大きかったかなと思います。

ライター / 芝田 隆広

- これはグッと来ました。マガジン 50 周年企画なのに、マガジンを支えてきた漫画家ではなく、支えきれずに消えていった漫画家へのレクイエムになっているとは。著者の画力にも、あらためて感服しました。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 熱くてホロリ、の青春ものなのに、なんかのんびりしている感じがするところがいい。マンガ好きのためのマンガでありつつ、小林まこと好きも納得の「らしさ」が出ていてさすがだと思う。男たちの顔がみんないいなあ。

ライター / 門倉 紫麻

- 漫画家マンガや自伝マンガは昨今はよくあるジャンルであるが、有名な漫画家だけでなく“消えていった”実在の漫画家にも焦点を当てた本作は、マンガを読んで育った者にとってとりわけ興味深い。作者にとっての青春時代が「少年マガジン」を介して読者の青春時代とも通じる様は、「青春少年マガジン」というタイトルがまさにピッタリとくる。また、作者独特の軽妙でユーモアのあるタッチも青春時代の楽しくそして悲しい思い出をいっそう引き立てている。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

- わざと軽いノリで描かれていますが、当時の時代の熱気や、作者の喜び・悲しみといった感情が紙面の中から抑えきれずに溢れるように伝わってきます。何も言わず、とにかく読め！と薦めたい作品。傑作です。

書店員 / 小磯 洋

- だって小林まこと先生だもの！！一目でわかる絵柄、音楽を眼で感じるような独特の「間」にコマの流れ。さすが巨匠の仕事です！特に今年代表とかではなくて、いつ読んだって安心保証の一品ですね。

POP 作家 / 久保 朝美

- 漫画家って、好きなことしてお金もらって、印税生活して、とっても楽な職種だよな！なーんて思っている方、この作品をぜひ読んでもらいたい。実は漫画って、文字通り血反吐吐いて、作家が身を削って生み出されているんです。職種は違えど、頑張っている人は読んだら号泣してしまうだろう。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

- 今まで好きであったマンガの裏側と言うか、そのマンガがどのような経緯で描かれたかがわかり、もう一度読み返したくなった。基本、この手のマンガは「そーだったのか」とか思う感じで読んできたのだが、これがマンガとして大変面白かったです。また、ノンフィクションと思えないくらいドラマティックな内容に毎週マガジンが発売される水曜日が待ち遠しくなり、自分が少年の頃発売日の朝を待っていたあの頃と同じ気持ちになれました。懐かしく、面白く、少し悲しい。少年時代の気持ちでマンガを読ませてくれた事を感謝です。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

モーニング 2/ 講談社

「聖☆おにいさん」 中村光

選考員コメント

一次選考

- モーニング 2 での連載第 1 回から、インパクト大！そのまま 1 年間テンションを下げる事無く突っ走ってくれました。イエスとブッダでギャグ漫画というのは、タブーでしょ？実際読んでみると、案外安心して笑えちゃうんです。これは八百万の神がおわす国、日本だから書けたのでしょうか？中村光のギリギリまで攻めるバランス感覚、おそるべし！

フルハウス八戸ノ里店長 / 佐藤 誠

- 2008 年一番熱かったマンガであることは間違いなく、今後の展開が一番気になるマンガだと思います。というか「聖☆お兄さん」が入賞しないわけがない！！

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- この「神を冒涇」寸前の笑える作品世界は、八百万の神が存在した日本文化だからこそ生まれた？この切り口は秀逸。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- もう有名だけれど、やっぱり好きです。ブッダとイエスが下界にバカンスしに来て、二人暮らしを始める。それだけで面白いのに、その場所が立川。近くに住む私としてはローカルさがかなりツボ。偉大すぎる二人が、とても身近な性格の設定になっているのが楽しい。

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 「神をも恐れぬ」とは、このマンガのための言葉だったのかもしれませんが、中毒、危険。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

- やはり 2008 年を代表する漫画はこれではないでしょうか。発売後口コミで売れ出したんですが、その勢いが止まらないまま一年が経ったのには驚きましたよ。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

- イエスとブッダが立川でアパートをシェアして暮らしている時点でおかしいのにくわえ、誰もが知っている聖書ネタ等でくすりと笑わせる。宗教に寛容な日本ならではの漫画。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- 仏用語、キリスト周りの登場人物、設定から全てドツボでした。イライラした時、癒しの意味で観ることがとても多いです。これも仏陀とキリストの成せる技でしょうか。

BUGY CRAXONE ドラム / モンチ

- 2008 年に一番笑ったマンガといえば、間違いなくこれです。何度となく笑われました。漫画好きなら誰もが一度は手に取った作品だと思うので、これ以上は何も言いません！1 から 10 まで全部が最高です！

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- 荒川～と迷ったけど、どちらか選ぶなら「新作」ということで、こちらでしょう！今年の正月は親戚中に「聖おにいさん」と「荒川～」を広めてやりました。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 現代では空回り気味の聖人ぶりに、やられっぱなしです。イエスがちょっとダメなやつてのが好き。聖人エピソードって無限にあるだろうから、この感じで長く続いて欲しいなあ。

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

-
- いいですね～、このゆるさ。バカンスモード全開のふたりの今後がとても気になる作品。

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- はっきり言って、この作品が受賞したら誰もが納得すると思う（笑）口コミで広がって、いまや知らないコミックファンはいないのでは？

TSUTAYA 渋谷店 / 実松 由夏

- 世紀末を無事に越えたブッタとキリストのふたりの聖人が、現世に降り立ち東京・立川で休暇を楽しむ、というお話。なんじゃそりゃ的な設定ですがジワジワときいてくる笑いがくせになります。手塚治虫の「ブツダ」に感涙し、徳の高いことをすると後光が差してしまう、儉約家のブツダ。新撰組のコスプレにはしゃぎ、ブログで大人気になり”神光臨”とコメントされる、ジョニー・デップ似のイエス。時々奇跡を起こしたりしながらゆるーい日常生活を送るふたり、関係ないですが若干オネエ言葉なのが気になります。

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- どうせ、ノミネートみんな入れるだろうけど、今年だけならきつと最強！どこか、モンスターエンジンの「私は神だ」「マタだまされたな」「だまされてはおらぬ」という、かわいい神様のなギリギリねた。イエスとブツダという使って良いわけないだろ、こんな設定。のはずが、非常に高貴で小市民なすばらしいバランス感覚が好きです。でも、もう何年も引っ張るネタではきつとないのでこれは今年のための完璧超人。来年は絶対投票しません。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- 私が、おやすみプンプンに続き、今年衝撃をうけた作品の一つ。最初見た感想は、えっ！これ出版しちゃっていいの？テロとか大丈夫なの？って感じでした。いや～今までなかった。というかこの発想はなかったわ。ブツダとキリストのどるギャグマンガ出版されるのって日本だけだろうな～。平和なのほんギャグ漫画。生粋のギャグ漫画なんだけど聖書や仏教の教えやエピソードが詳しくてバックヤードがしっかりしているのも魅力だと思います。このマンガを読みだしてから、宗教関係の言葉をググる機会がふえ、雑学と教養がつかえました

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- もう面白すぎる！！！！とおしすぎる！！！！今年一番人に勧めた漫画です。隅々まで細かい笑いが散りばめられていて、手書き部分こそはずせません。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

- 1位にはなってほしくない（どちらかと言うと居酒屋の片隅でぐだぐだになった飲み会で着にしたいマンガ！）心地で一杯ですが、外すわけにはいかないこの1作。ブツダとイエスでコメディを描くなんて、一体どんな脳みそだったら可能なのか！可笑し過ぎて腹がよじれます。天晴れ！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

二次選考

- 客観的に考えると、この作品、「まんが大賞」本命！二重丸！ただ直木賞みたく「本命」だからこそ「外される」出版業界の天邪鬼気質も気になる。開票結果が楽しみです。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

- 一位はこれしか考えられない！！イエスとブッタの掛け合いが最高です。

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- 誰もが考えつきそうで誰も手を出さなかった「神様ギャグ」という分野に踏み込んだ勇気に乾杯、そして完敗。

コントユニット「アンチパッティングセンター」代表 / 増山 寿史

- 2008年に一番笑ったマンガといえば、間違いなくこれです。何度となく笑われました。漫画好きなら誰もが一度は手に取った作品だと思うので、これ以上は何も言いません！1から10まで全部が最高です！

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- ブッタとイエスの掛け合いが面白すぎ。淡々と楽しそうなのがいい。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

- 設定に完敗！ブッタとイエスが下界にバカンスに来て、立川に二人暮らしをする。その偉大すぎる人物が身近な出来事、性格で描かれていて、くすくす笑いが止まらない。

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- アパートでの質素な暮らし、身につまされるリアリティー——そんなマンガは過去にもあったが、歴史上もっとも偉大な聖者をそこに持ってきてしまった発想の勝利。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

- 設定からしてダントツ！

BUGY CRAXONE ドラム / モンチ

- シチュエーションコメディの究極形。膨大な背景をナンセンスに昇華する着想の時点ですでに勝っている。

レビュアー / 福井 健太

- もう十分評価されているので、今さら挙げる必要もないかとも思いつつ、選ばないのも違和感を感じる。個人的には「荒川アンダーザブリッジ」のほうが、噛めば噛む程味の出るスルメ的なかんじで好きなのですが、勢いという意味でいえばダントツでこちらでしょう。内容については今更語るべくもないので割愛しますが、今後この勢いをどう昇華していくのが見物かなと思っています。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

- イエスとブッタの組み合わせが秀逸なギャグマンガ。マンガは人生におけるひとときの安らぎを可能にする媒体である。娯楽として2人がおりなすショーもない場面（神二人が満員電車に乗車）などは癒しの最先端に値する。

マンガを愛するダンサー・コラムニスト / 新井 文月

- 日本人がこの作品を読んで改めて自分の宗教について考えてみるきっかけになればいいのでは…。とかなんとか思っちゃったりして。ブッタさんの生い立ち知りたさに京都の仏教書専門店でもこども向け漫画を購入したほどです。

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- ブッタとイエスが立川でアパートをシェアする時点でおかしい。聖書ネタ等細かいギャグがちりばめてあり、年齢問わずお勧め出来る。宗教に寛容な日本ならではの漫画。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

-
- サザエさんやちびまる子ちゃんのように、季節の風物詩を取り入れた日曜夕方系国民的ほのぼのの漫画なのに、アニメ化すると怒られそうところが好き。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- ネタとしては危険なところを突っ走ってますが、それをさりとかわしてしまう部分が良いですね。1位にはしませんでした。2008年を代表する作品とすればこれを挙げなくてはいけないような気がします。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

- 抽象的な言い方になりますが、優れた作品というより、好きなマンガ、でした。一こま一こまの表情や、ちょっとした言い回しが好きで、何度も読みかえています。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 前回、一次投票でも書いたので簡潔に。このテーマを選んだ中村光の発想力に脱帽！！この一年間一番衝撃を受けたまんが！！ノリだけでは描いていない知識量に裏づけされた小ネタの数々！！私が神なら、ジーザス・クライスト・スーパースターって称号を中村さんに与えたいと思います。

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- もう読んでる人は読んでいて、知っている人は知っている。だから正直外してもいいかなと思いました。が…、やっぱり入れないのは嘘かなあと。間違いなく昨年一番人に薦めた本だったし、薦めやすい作品だった。笑って、笑って、また笑う。後世、コメディマンガの新しいバイブル（…って、聖典って言った方がいいのかしら?!）になるような気がします。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- もはや、新しく言うまでもありませんが、なんか話題だからと読んでみたら独特のペースに巻き込まれてしまいました。二人の感覚や、絵の感じもあいまって不思議な、アバンギャルドの雰囲気のあるマンガです。

メガマソ・ギター / 涼平

- 2008年、一番人にすすめました！笑いたい時、仕事でちょっぴり疲れた時、余計なこと考えたくない時！ただ電車の中はダメです。現実離れた設定と日常のささいなシーンの入り交じりが絶妙！ブツダとイエス、最高にキュートでもう夢中です☆

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

- シュチュエーションと展開という意味では、他の候補作の追隨を許さない『聖☆おにいさん』。今後どのように展開していくのか!?このゆる〜い感じを残しつつ、どんどん予測不能な展開に期待したい。

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 何度となく読み返せるので読んでしまいます。ちょっと疲れたときとかに効きます。

「ばふ」編集者・ライター / 山本 文子

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「とめはねっ！ 鈴里高校書道部」 河合克敏

選考員コメント

一次選考

- 書道部の話ではさぞかし地味にゆっくり動くのかと思いきや、非常に躍動感のある展開でキャラクターもそれぞれの特徴が存分に発揮されています。書道なのに若さあふれる、という怒られるかもしれませんが、そこがひとつの意外性となって面白くしているようにも感じます。

会社員 / 林 礼春

- 去年から押しておりますが、これがスピリッツに来た時点で、革命は起こりはじめております。まさに改正開始。

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

- 昨年もノミネートされましたが、全く勢いが衰えず、それどころかますます面白くなっている！会話のやりとりの間が絶妙です。恋愛のヤキモキ感まで加わって、今一番、続きが楽しみなマンガです。

医師 / 岸本 倫太郎

- ヤンサンつぶれてビビったけど、とめはねはどこかで連載すると思ってました。ヤッター。あいかわらず面白い。書道実用書としても二十マル。

フリーデザイナー / 橘 千尋

- 書（または芸術活動全般）はスポーツとは違い、作品の造形美をどう解釈するか、歴史的な変遷をふまえた理解が必要なため、誰でも習ったことがあるはずなのに楽しみにくい。そんな難問に、理解するための視座をさりげなくかつおもしろおかしく伝えるところが、さすが。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 映画だったら「スウィングガールズ」に当てはまるかもしれません。書道のセッション。その時にしか出せないものだからなんかせつなくて青春ばくて、そして笑える。なんたって女子がりりしい。草食系男子ががんばれ！

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- 書道部マンガ。うっかり何か書きたくなくなったり、墨のちょっとカビくさいにおいを思い出したりしてしまう…。座って字を書いているだけのはずなのにすごく面白い！なかなか進展しない淡い恋も楽しい要素。お習字に対する見方が確実に変わります。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

二次選考

- 読んだ後思わず筆をとってしまうマンガです。書道に若々しさを感じてしまいます。いろんな書が出てくることで変化が生まれ、物語が起伏に富んでいるのもこのマンガの面白さだと思います。

会社員 / 林 礼春

- 流石に皆さんが選んだだけあって、どれ読んでもまじで面白かったです。ただその中において一番洗礼されていたのが今回の中では「とめはねっ！」だったと思います。読みやすさ、取っ付き易さ、題材の面白さなど全部読んだ中での総合点で No1 でした。書道という展開の難しそうなテーマだけに今後の行方にも期待しております。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 書道と言う、知っていそうで実は知らない分野を題材にして、といったあたりは「ちはやふる」と共通の面白さ。4巻まで出ていてもネタは尽きずむしろどんどんと広がりを持って書道の魅力を伝えている。

書評家 / タニグチリウイチ

- 作画、構成、キャラ、ストーリーと漫画としての全ての要素が高いレベルでバランス良く整った漫画。登場人物の個性と魅力が一人一人しっかりしており、どの登場人物にスポットをあてても楽しめる作り。習字漫画であり、青春群像学園ラブコメであり、文化系ではあるが勝負と試合のある部活漫画でもある。多様な側面を持ち、性別を問わず幅広い年齢に読んでもらえる内容。また、「習字」という題材も、誰もが一度は触れたことはあり目にする機会も多いが、実はあまりよく知らないだけに、故事や雑学の類も非常に好奇心をそそる。

ひょうたん書店西田店店主 / 筒口 征洋

- 自分のやるべきことをやり、気付くべきことに気づき、成長していく。素晴らしい青春群像劇です。ですが、もっとも面白く心をとらえて放さないのは、どーでもいいおしゃべりやらボケやらツッコミやら。登場人物の会話のテンポ、作り出す雰囲気があるながらも刺激的！そのさじ加減の妙。

医師 / 岸本 倫太郎

- 実行委員の吉田さんに1巻をもらったのがきっかけだったのですが……ハマりっぱなしでございます！！あまり学生時代に戻りたいとか考えた事が無かったのですが、とめはねっ！を読んで「あ〜っつっつ！！（悶）」ってなりました。校舎の隅っこにあった書道教室に一切興味を持たずに卒業してしまった事が悔やまれました。実際字が上手いのは社会に出て働きだすと実感するのですが結構ステータスなんですよ。この漫画を読んで今年の年賀はがきを手書きにしようとして挫折した人はきっと自分だけじゃないはずですよ！！筆ペンを持つようになったのは俺だけじゃないはずだ！

All Japan Goith/TA-SHI

- 書道をマンガにした事がすごい。

BUGY CRAXONE ドラム / モンチ

- ユニークな題材と安定した力量のコンビネーション。文化系ネタを面白く描ける人はそれだけで貴重だ。

レビュアー / 福井 健太

- 面白かった！これも珍しい書道マンガ（？）だが、学生時代ならではのむず痒いほどの（笑）キラキラした空気感を見事に真空パックできてると思う。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- 書道という題材が珍しいと思いますが、この作者の過去の作品を読んだことがあるので部活モノなら高水準の面白さになるのはわかってました。お騒がせキャラが舞台を掻き回すのがホントに上手くて面白いと思います。

信長書店四条河原町店 / 中村 誠亨

-
- 書道のイメージをいい意味で変えてくれました。ひとり、でなくみんな、で何かを成し得る楽しさが作品にあふれています。とにかくもう、こういう部活だったら今からでも入部したいです！

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- 書道部の高校生たちの日常がたんと描かれているそれだけのマンガなんですけど、かなりエンターテインメント。何て面白くて楽しいんやろ！お習字なんて離れて久しいけれど、つい何か書きたくなくなってしまいます。普段書なんて見ないけれど、このマンガに載っていると、ちゃんと字にも書き手の意志があるのだなと気付かせてくれる。人があらわれてるんだなと思います。なかなか進展しない、淡い恋模様も楽しい要素。オススメです！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- これだけ PC が普及しても、文字を手で書くという行為はまだまだ多くの人が行っている。書道というほど大したものではなくても、綺麗な字、雑な字など、手書きの文字は読み手にいろいろなことを伝えてくれる。そう、第 4 巻に出てくる良寛の「風」に、登場人物がそよ風を感じたように。司書という職業柄、本と本を結びつける癖が抜けないんだけど、「五体字類」のような書体字典を手元に置いて、パラパラめくりながら読むと何倍も楽しめる。試してみてください。そんな読み方も是非おすすめ。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 巻がすすむごとに動きが出てきて……というようなおもしろさではなくて、このもわっとしたリズムが巻を追うごとにどんどんクセになってくる！3、4巻あたりで好きだーと思いました。1コマ 1 コマきっちり描かれた絵柄もリズムにすごくあっていると思う。「やってみたい」と思わせる、マンガならではの力もとっても強い（個人的には篆刻をやりたいくなった）。

ライター / 門倉 紫麻

- ゆるーい高校生活のなかの、ゆるーい書道部の物語。ついでに、主人公もゆるーい顔してます。書道の魅力もさることながら、キャラクターがとっても個性的で面白いです。この作品はそのゆるい雰囲気も魅力なのですが、それ以上に静かで上品なギャグがすばらしいです。世にあふれる、ナンセンスな以上のどたばた、他人への攻撃、タブーぎりぎりの行為といった方法以外で笑いをとっているのが好きです。晴れた日曜日の午後にのんびり読みたい漫画だと思います。

IT 系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- 単純に読んでて涼しい漫画でした。いいなー青春。ウンチクの入れ方も良い！書道の教科書としても大変優れているんじゃないかと思えます。これが大賞とったら書道ブームがくるでしょう。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 書道マンガという、正直手にとられづらいジャンルのはずなのにまわりの評判に巻き込まれて読んでしまったら自分も案の定はまってしまった口です。先が気になります…

メガマン・ギター / 涼平

- 知らない世界の新鮮な物語でした。字を書くことがどんどん少なくなっていますが、ゆっくり文字に愛をかけて日記やお手紙を書きたくくなります。加茂ちゃん可愛い！

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

コーラス / 集英社

「ママはテンパリスト」 東村アキコ

選考員コメント

一次選考

- 笑えました！笑いました。簡単に言ってしまうえば育児エッセイマンガなのだけど、教えられてる感じは全くしない。ものすごいテンパる母親に対し、更に上に行く息子のリアクション。知らなかった事がたくさんあって、確かに衝撃はうけるけれど、それよりも笑撃のほうが強かったです。

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- これは、結婚を視野に入れた男子、女子のバイブルだ！！間違いない愛のカタチ。

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

- ごっちゃんのキャラクターに乾杯。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- 全く、役に立たないけど、リアルな育児の実態と東村先生の長男ごっちゃんの一筋縄ではいかない幼児ぶりにはまってしまいます！！

アニメイト / 鈴木 寛子

- 工作員化もやむなしの抜群の破壊力でした。

往来堂書店 / 三木 雄太

- 子育てマンガを読んで、「男って生まれたときからどうしよーもねー生き物なんだな…」という悟りをひらくとは思わなかった！男の煩惱は幼少から！男性にも（下ネタ的に）是非読んでいただきたいエッセイマンガ。2008年笑えるマンガ第1位です。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- ごっちゃん、最高！！ノンフィクションコメディマンガの最高峰。久しぶりに電車の中で吹き出して笑いしました。

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 育児エッセイ本の神的存在（笑）ごっちゃんすご過ぎ（笑）でもかわいい。

TSUTAYA 渋谷店 / 実松 由夏

二次選考

- 例えるならば、「アキコ東村のすべらない話（出産・育児編）」この人の観察眼は群を抜いています。出産、育児のエッセイって「感動のお涙頂戴シーン」が必ずあるものですが、笑い過ぎで涙が出ることはあっても、感動の涙なんて流れません。それが良い。東村アキコの手にかかると育児だって一大エンターテイメント。息子ごっちゃんのカワ憎たらしい感じに身悶えして、次のページめくるのが怖い位笑って、シンプルに楽しんじゃいましょう。ちなみに僕が知人にこの本を薦めた所、その知人は一気にこの本を5冊購入。周囲の新米ママ達に配り回ったそうです。「マンガ大賞」のコンセプトにハマり過ぎな、嘘の様な本当のエピソードをそえて、1位に推薦させていただきます。

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- ボクはテンパリストとか、ハガシハラリストですね。アキコさんは超かわいいのに、ギャグが超きれてる。やばいっす。ごっちゃんのおっぱい好きには困ったものです。

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

- ごっちゃんLOVE！天使の微笑と悪魔の所業にクラクラしました。読みながらうちの姪の幼き頃を思い出さず『ププ』！前回のマンガ大賞も『ひまわりっ』に思わず3位投票。そして今回も（笑）東村さんの作品は私にとって永遠の3位なのかもしれませんね（笑）

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- これだけ笑えて、新しい発見もあり、赤裸々な育児エッセイマンガは見たことがなかった。ものすごいテンパる母親の、更に上に行く息子のリアクション。久しぶりに大笑いしたな～苦勞もすごいわかるけど、こんな二人三脚の生活も悪くないと思えた。

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- マンガ大賞の選考方式であれば、これが1位になるのは間違いない。そう信じられるほどの破壊力がある。一度読んでみれば、抱腹絶倒すること間違いなし。

往来堂書店 / 三木 雄太

- ごっちゃん。。。会いたいです！！いやー笑った。電車の中で読んでたら面白すぎてニヤけてしまいふと前を見たら知らない人に見られてた。恥ずかしい！お手洗いで滝にうたれるごっちゃん。最高です。

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

- 現在育児中なので、とても他人事とは思えない。参考になるかは別として、共感できるし、なにより大笑いできるのがいい。子どもってしょうがないよなあ！でも可愛いよなあ！

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

- 「きせかえユカちゃん」などのコメディ作品で知られる著者の子育てを描いた実録マンガ。と言っても、けして育児 How to 漫画でも子供煩惱全開漫画でもなく、一歩引いた目線且つ常に『笑い』を軸に描かれているので、子供がいない人でも楽しく読めます。もちろん子供がいれば更に面白さ倍増です！あまりのごっちゃん珍行動に捏造疑惑が出るほどですが、全てがノンフィクションです！！

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- 【ゼロ歳からの男の業】を世界で初めて記した書物！（たぶん！）

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- 子育てという自分に縁もゆかりもない世界に「へーそうなんだー」の連発。女性は勿論、男性こそ読むべき快作！

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- 将来ごっちゃんがグレないか心配になるぐらい面白いです。東村アキコ作品の中では今までで一番間口が広い作品かもしれません。ツボに入った人はぜひ『YOUNG YOU』『ぶ〜け』掲載作まで遡って、ギャグ以外の作品も楽しんでほしいと思います。

フリーライター / 会田 洋

- 「ひまわりっ」に投票できないのが残念だなと思っていましたが、こっちで大笑いしました。こどもって不思議なきもの。

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

- 落ち込んでいた私を一瞬にして爆笑の渦に巻き込んで、浮上させた究極で最高の育児エッセイ漫画。正直始めは、タイトルや表紙を見てあまりそられなかったというのが本音。でも、謝ります。本当にごめんなさい！！物凄く面白いです。「こりゃノミネートされるわ」って感じでした。本当に笑った、笑った。辛いイメージしか無い出産も面白おかしく描かれていて。私にもいつか子供を生む日が来るのだろうけど、なんだか楽しみになってきました(笑)。本当に子供って不思議な生き物ですね。伝説的なイタズラの数々…もう笑うしか無い。もう、ごっちゃんが可愛過ぎてというか、面白過ぎ！！子供が欲しいというより、ごっちゃんが欲しいです。親子のやり取りが可愛らしくて、楽しくて。この家族、大好きだっ(笑)。ごっちゃんの成長を、漫画を通して見守ってみたいです。…そーいえば、母乳噴出なんてあるもんなんですね…(笑)。知らなかった。ピバ！ノンフィクション！

ソロシガー / 山野井 千佳

- 母になるって女性にとっていわば「錦の御旗」ですよ。子育ての大変さは産んでみないとわからないわよ、と言われると経験のない人間は何も言い返せません。子育てに参加してるつもり男性でも腹も痛めて産んだのはわたしなのよ！なんて言われた日には返す言葉なしです。母は大変なんでしょう、確かに。でもあまりにもその御旗を振りまかれると正直辟易してしまうことよくあります。「お兄ちゃんにしかられちゃうから静かにしなさい。」って俺の方見ながら言うのやめろーとか…これはちょっとちがうか。東村アキ子が素晴らしいのはまさにその御旗を振らないところです。本人も書いてますが、とにかく子育て論を語らない、ひたすらバカ話のみ。子供産んだ途端ママタレント化して毒にも薬にもならない育児本を書き散らす芸能人にはこれ読んで猛省していただきたいなんて思わないでもないですが、本当に肩の力を抜いて楽しめる最高にバカな育児マンガです。ごっちゃんのファッションセンス☆☆☆☆

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

- いきなり私事ながら、3歳男子を育児中のワーキングウーマンの妻に読ませたら腹を抱えて笑っていました。叱られるのを避けるためにみえみえのウソ(でもなんともかわいい)をついてみたり、洋服の「カッコイイ」が大人と真逆だったり、幼児というのはなんとも人間くさいもんで、それゆえにカワイイという、日々の子育ての実感を担保してくれるところがウレシイです。作者もあとがきマンガで言及していますが、育児ノウハウを声高に語らず、日々成長するコドモという生き物の観察日記に徹しているところにセンスを感じます(育児エッセイマンガはあんまり読んだことがなく、こんなことを語る資格はないのかもしれない)。同じ作者の「ひまわり」もそうだけど、達者な絵とずぬけた観察力がなければこのマンガは成立しない。あとは実の母親ならではの手放しの愛か。幼児特有の全能感というか俺様ぶり？の次から次へと繰り出されるエピソードはそれゆえにおもしろいだろうと。あとは映画の「ベイビー・トーク」だったか(古いか)みたいに、幼児なのに作者によって勝手に大人思考を(描き文字で)当てレコされるのもこれはマンガの独壇場というか。小編の連載なので単行本1冊分がまとまるのは時間がかかりそうだけど、2巻も楽しみです。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- 某漫画大賞で大賞を受賞していたのであえて3位としましたが、それがなければ1位でもよかったと思う作品です。育児マンガなのですが、とにかく笑える笑える。東村先生は演出がうまい。育児で母親が共通で体験することが多い出来事でも、東村流の視点によって「あるあるネタ」から「すべらない話」になってしまう。すごい一流漫画芸人(?)です。

書店員 / 小磯 洋

- これまた1次で知って、読みました。よりによってほんとに今月時間がなくて、買って、仕事帰りの電車で読みましたよ。死ぬかと思いました。前半部は、もう、核です。笑いこらえるのが苦しすぎて、死ぬ。学生のとき稲中を同じく小田急線で読んで噴出し、恥辱を味わいましたが今度は良い大人の、それもジミーを越えた、なんなら今年はアラフォーかともいえる良い大人が浅草線の最終近くで漫画読んで吹けるわけもない。耐え切れず泉岳寺で乗り越えたとき、五反田までの2駅分は封印して、帰って家で大爆笑しました。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

■ 子供がほしい！ていうかすいません結婚もまだです！お父さんは心配性、的タイトルですがぜんぜん関係ない！

文筆業 / 海猫沢 めろん

■ 1巻だけで選んでいいのかと迷ったのですが、純粹に読んで「面白かったっ!!」ので選びました。ごっちゃん(実在の人物ですが)には今回のマンガ大賞 2009、ベストキャラクター賞を差し上げたい。

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

マンガ大賞

Cartoon grand prize

2009

マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

週刊少年ジャンプ / 集英社

「トリコ」 島袋光年

選考員コメント

一次選考

- 久しぶりに『ジャンプ』らしい作品ですね！努力、友情、勝利。少年マンガはこうあってほしいです。でも、決して食材は美味しそうじゃないのですがね（笑）

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- 「強いモンはウマイ」というシンプルさが素晴らしい。バトルは力強く、食事シーンもうまそう。最近は、「バトルのために世界がある」という感じで、「戦いのための戦い」になってしまっている作品が多い中、この作品は「食うために戦う」という目的がハッキリしているのも良い。また苦勞して戦ったごほうびとして、「ウマイものが食える」というのは、誰にとっても分かりやすい。食材もユニークかつウマそうなものが揃っていて、夢のある作品だと思う。

ライター / 芝田 隆広

- 戦い・得るといふ単純さの繰り返しは単純になりがちだが、「グルメ」といふ快楽装置との食べ合わせによって深みのある味わいに仕上がった。フルコースを彩る食材がどんな姿をしているのかも楽しみ。

往来堂書店 / 三木 雄太

- グルメアクションマンガ（？）というものに首を傾げたが、先を読ませる力が強く、どんどんページをめくってしまう。今後が楽しみ。

ひょうたん書店 / 松林 久雄

- 未知なる美味を追求する時代において、まだ見ぬ美味を求めて主人公・トリコが猛々しい猛獣（と書いて食材と読む）たちと奮闘する格闘漫画。久しぶりに「わくわく」して続きが楽しみになった作品です。これぞ王道少年漫画！！是非とも「虹の実」を食べてみたい。。

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- オカエリ、しまぶー、やっぱりあなたはジャンプが似合うよ。久々にジャンプの新連載の中でジャンプっぽく楽しめる作品。なんかこう、ジャンプで書きたかったんだらうなーという抑圧された？こなれた？凝縮された感じのネタ作りのと熱さがとても好き好きなのです。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- 食べながら、飲みながら読むマンガってのは実に至福の時である。この作品トリコは読めば読むほど腹の空いてくるマンガだ。何かを食べながらでないと、とても腹が減って読めないって思えるぐらいの実に食いつぶりのいい描写ばかり。ひたすらに食べるマンガ、食べるために戦うマンガ。

コミック担当 / 下司 卓史

二次選考

- 一見するとよくあるジャンプの子供向け冒険アクション漫画ではあるが、大人の男が読んでも楽しい。子供の頃のワクワクする気持ちを思い出す。ファンタジーとしての、架空の料理や動物、怪物達の造りが巧い。子供にも容易に想像できるような単純さを持ちながら、インパクトと説得力がある。いい歳した大人なのに、登場する料理が本当に美味しそうに見えてくる。また、アクションの仕掛けとしての、ギミックや設定には目一杯凝り、それを漫画の中でうまく解説して見せることで、単なる子供向けアクションに重さと緊張感を出すことに成功している。いくつになっても男の子にとっては、「王道」こそ至上的のだと思える作品。

ひょうたん書店西田店長 / 筒口 征洋

- 食材探しバトル漫画という、新しい組み合わせが新しく面白い。呼んでいてとても爽快感な漫画。

デザイナー / 佐藤 優

- 「ありえねー！！」ですよ。だけど、ぎりぎり、「ありえそー！！！！」なんです。「美味しんぼ」は、ホントにある食べ物を描いたドキュメンタリーだとするなら、ホントはないモノを作り出して、脳内で味わった気にさせられるこの「トリコ」は、手品です！「虹の実」を食べる 1 巻の 194 ページからだけでも、読んでください。ホントにあるモノを食べるより、おいしい体験ができちゃう、という信じられないマジックが！マンガって、すげえ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- これほど出てくる料理が美味しそうなグルメマンガ(?)はかつてあったろうか？ しかし、全ては「少年ジャンプ」の王道に譲る。

同人誌研究者・まんが評論家 / 三崎 尚人

- 未知なる美味を追求する時代において、まだ見ぬ美味を求めて主人公・トリコが猛々しい猛獣（と書いて食材と読む）たちと奮闘する格闘漫画。久しぶりに「わくわく」して続きが楽しみになった作品です。これぞ王道少年漫画！！是非とも「虹の実」を食べてみたい。。

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- 新しいグルメ漫画として笑撃が走りました。いろんな食材をハントしながら食す展開が面白すぎます。とても美味しそうに食べているのに、どんな味が想像がつかないところがまたジャンプらしくて良いと思いました。冒険あり、笑いあり、バトルあり、そして友情ありと少年マンガの王道を取り入れつつ、今までになかったような美食マンガを書き上げていてとても楽しいコミックです。おすすめです。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 食べながら、飲みながら読むマンガってのは実に至福の時である。この作品トリコは読めば読むほど腹の空いてくるマンガだ。何かを食べながらでないと、とても腹が減って読めないって思えるぐらいの実に食いつぶりのいい描写ばかり。ひたすらに食べるマンガ、食べるために戦うマンガ。

コミック担当 / 下司 卓史

- 豪快な世界観にワクワクさせられました。「うまいものを喰いたい！」というシンプルなテーマでどこまで見せてくれるのか今後も楽しみ。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 戦う目的がとても分かりやすいのがイイ。戦闘→美食のコンボが快感。まだ物語が序盤なので、旬はこれからかなって気もしますが、今後への期待も込めて。

ライター / 芝田 隆広

- ジャンプで徐々に大ヒットしそうな王道バトル漫画。最近の流行漫画と比べると少し古臭い作風だが、その分年長の読者でも安心して読める読み易さがある。バトル漫画とファンタジー風味のグルメ漫画的要素を組み合わせ、単純に敵と戦うのではなく獲物を求めて争うという構図は、人類の原始的なテーマでありながら昨今大ヒットしているビデオゲーム「モンスターハンター」等とも共通する時代性がある。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

-
- ジャンプ第二期黄金時代を髣髴とさせるインフレバトル路線のテンションの高さは近年ではぶっちぎり！後々批判にさらされたドラゴンボールのフリーザ編以降の数値化されたバトルの見もふたもなさが大好きだったので、食材にレベルがあって、そしてそれがすごい速さでどんどんインフレしていくのに個人的にすげーぐっときてます。もっとやっちゃえ！

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

- 物語のつづきをもっと読みたいと思ったマンガ。まだ 3 巻しか出ていないけど、きっとこれからも壮大なスケールと展開がじゅうぶんに用意されているに違いない。

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

- 食べるシーンが豪快で話はグルメ漫画というよりこれぞ少年漫画！というようなバトルアクションです

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

マンガ大賞

Cartoon grand prize

2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!

マンガ大賞 2009 ノミネート作品

イブニング / 講談社

「よんでますよ、アザゼルさん。」 久保保久

選考員コメント

一次選考

- とっても汚いです。不浄なものと感情のオンパレードです。汚いものを面白がる自分もまた汚いです。でも面白いです。

社員 / 林 礼春

- 「品」というものを一切無視した素晴らしいギャグマンガ。このくだらなさはマンガでしか出来ない芸当だ。これを許した掲載誌もえらい。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- イブニングで第1話を読んで一発でファンになりました！！エロ悪魔のアザゼルさんやハエの悪魔ペーヤンなど二頭身キャラ好きにはたまらんです。悪魔のような弁護士アクタベにこき使われる悪魔のアザゼルさんを全く可哀想に思えないのも魅力です。コロコロ変わるアザゼルさんの表情もいいです。

All Japan Goith/TA-SHI

- さくまさんの言うことを聞かない悪魔どものプリチーなこと！センスはもちろん、ギャグマンガのノウハウがギッシリつまってます。

フリーライター / 会田 洋

- アザゼルさん。久々のギャグマンガでの俺ヒットです。イケニエには豚足やシャアザクが使われている。「ナメとったらホンマ キャン言わしたるからなァ」のセリフに2度目のヒット。「ゆっさゆさゆさゆさゆっさ」「マジ山マジ男っさか」「ニートである勇氣！！」あほらしい。そして。吐きそうに面白い。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- プリチーな外見からは想像できないぐらい下衆な悪魔たちが繰り広げる下衆でアホな笑いの連続コンボ（褒めています）下ネタも多いがそれが許容できればかなりハマります。読み手もアホになれる稀有な1冊。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- 淡々とした笑いが何だか新感覚です。ふきだすと言うよりはニヤリとさせられる度が高い。悪魔どものヘタレっぷりにほっとさせられます。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- これも何度も読み返した、悪魔召喚ギャグ。下品なんだけど、じつは品性があるというか……なぜか読後感がよい。「萌え」要素の全然ないギャグマンガも今どき貴重。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 2008年一番笑わせてもらったマンガ。ギャグマンガとして革命的な新機軸があるわけではないんですが、サザエさんから三島由紀夫までネタにするパロディや引用のセンスがとにかく絶妙。サラッとどギツイ下ネタも好きです。正直読んだ後すぐ内容忘れますけど。

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

二次選考

- 1話目を読んで一発でやられちゃいました。悪魔のくせに血を見て目眩をおこす二頭身キャラのアザゼルさんにやられちゃいました。内容はアザゼルさんをはじめとする色んな悪魔が、悪魔もビビらず探偵アクタベに召還され悪魔のチカラで色んな依頼を探偵助手のサクマさんと時には裏切ったりしながらも解決していくお話です。「もやしもん」の菌たちみたいに是非グッツ化してほしいです。

All Japan Goith/TA-SHI

- さて、問題の第2カテゴリーは「ギャグ」である。「聖☆おにいさん」「ママはテンパリスト」「よんですよ、アザゼルさん。」の3作。このうち「おにいさん」は本命だ。実際面白くて感心する。しかし「アザゼルさん。」を2巻まで読んだ時、「ん？」と思った。正直、最初はあまり面白く思わなかったが、どんどん良くなるのである。「おにいさん」は最初から安定した面白さで、一定のレベルをずっと維持している。一方「アザゼルさん。」は凸凹があるが、面白い瞬間はすさまじく面白い。うーんどっちだ、神か悪魔か！と悩んだ末、悪魔に転んでしまった。なぜなら、「おにいさん」の続きは何となく予想できるが、「アザゼルさん。」の今後がいまいち予想できないからだ。つまり、もっと化ける可能性がある。「ママテン」も大好きな作品だが、どうせなら東村さんには「海月姫」で取ってほしい（←勝手な願望）。

新聞記者 / 石田 汗太

- これはノミネート選考時に、個人的には好きな作品だけど、漫画全体を見た時、あまりにも自分の趣味が入りすぎるのではないかと思いついた作品なのですが、ノミネート入りするという事は、同じ様な感覚を持つてて人が多かったという事か。というわけでこれを選ばない事には行かない訳で。嫌いな人は嫌いだと思う。下ネタ厳禁な人には難しいかも知れない。だけど読んでハマる事もあるし、何より新たな出会いを求めるための架け橋がこの漫画大賞。という、大げさになるかも知れないが・・・。

コミック担当 / 下司 卓史

- センスはもちろん、ギャグマンガのノウハウがギッシリ詰まってる感じです。どうも某ランキングにはご不満の様子だったアザゼルさんですが、マンガ大賞の結果にはご満足いただけるのか、ちょっと気になります。

フリーライター / 会田 洋

- こちらも何度も読んだ作品。ブラックなこと言ってるんだけど、根っこは無邪気な感じが、どこか懐かしくもあり。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 久々に笑いました。ツボでした。候補作の中では一番勢いがあったような…傲慢で我がままで自分のことを考える悪魔たちが、腹立ちながらも可愛いらしい…大人が読んでも子供（あまりちっこいにはオススメしませんが）が読んでも爆笑できる珍しい漫画だと思いました。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 「選んでやりますよアザゼルさん！」なんか評議委員？とも言うべきいつものマンガ大賞を牽引するメンバーの皆様には大不評のアザゼルサン。面白って絶対。下品だけど。下品ですよ。下品だが何が悪い。アザゼルさんの小市民的なところ最高、だが、見かけはプリチーでもやはり悪魔。隙を見せるとスーグに悪さする。小学生が下品なものがすきなと同じぐらい、原始的な部分で面白いのだろうことはわかるのだが、漫画はやっぱり、大衆娯楽であるわけだから、全部が全部そうでなくてもいいが、誰が見てもわかりやすい面白さは中にはあっても良いと思う。王道でアザゼルさんが決して勝つことができないように、しかしながら裏道では帝王として奴が君臨しても良いのではないだろうか？栄枯衰退、時流を見極めねば、いずれにしろ斜陽していくのなら、今、この瞬間は奴が王様であってあえてうけとめよう。そんな気になります。彼はクラウドさんになれない。なぜなら同情されても悪魔であり、すぐに裏切るからである。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

- くだらなさすぎる（ほめ言葉）。

文筆業 / 海猫沢 めろん

マンガ大賞非ノミネート作品

全作品名・選考員コメント掲載

「BLACK LAGOON」 広江礼威

- 巻数的に今回が最後となるなら推すしかない。ロシアに香港にコロンビアにイタリアに米国と、世界中から吹き溜まったとことんまでワルい奴らがめぐるす油断即死の駆け引きに、拳銃からナイフからチェーンソーまで、多種多様な武器の使い手たちが繰り広げる弱者必敗のバトル。物語でもアクションでも超特級の凄さを持った漫画をリアルタイムで読める幸せを噛みしめる。

書評家 / タニグチリウイチ

「Boichi 作品集 HOTEL」 Boichi

- 題名通り作品集であって、収録作品は細かいのも入れれば全部で 9 つ。「HOTEL」はその中のひとつだが、表紙を見てもらえばわかるけど、「Boichi 作品集」なんてほんとに小さな活字で、「HOTEL」の方が何倍も目立ってる。内容も同様で、「HOTEL」が圧倒的だ。地球温暖化が劇的に進行して金星化する地球で、人間以外の DNA 保管を担ったコンピュータ「ルイ・アムストロング」は任務を完遂できるのか。ロマンチックな SF だ。40 ページくらいの短い作品だけど、これひとつを読むだけでもこの作品集を手取る価値がある。

米子高校 司書 / 野間 勤

- モーニングに掲載されたとき、あまりのおもしろさにページを切り取って保存していました。人類が滅亡してゆく地球に残された、遺伝子を保管するため建造物『HOTEL』を管理するコンピュータの物語。ドライなようでとてもウェットな人類の滅亡と、その意志をつぐコンピュータに襲いかかるサイエンス的なトラブルとその解決。そして、2700 万年後に訪れる壮大な結末！ あまりに爽快な読後感でした。ルイがけなげで、ほんとにけなげで……！ SF って初期のトキワ荘のころに一生懸命描こうとしたひとがいるけど、実は士郎正宗以降類型化されちゃって、その可能性がまだまだ掘り尽くされてない！ と、一緒に収録されている表題作以外の SF 短編も読んで、あらためて思いました。もっと読みたいです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- この作品の世界観がたまらなく好きだ「HOTEL」は映画一本見たぐらいの満足感だった

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

「DMC(デトロイト・メタル・シティ)」 若杉公德

- まだまだ衰えない DMC の勢い。最近 DMC のくせにちょっと読み手を感動させにきたのであなどれないと思った。こうやってクラウザーさんの信者が増えていくのだな…

フリーデザイナー / 橘 千尋

- 連載開始から惚れてます。クラウザーさん、万歳!!

ネビュラプロジェクト / 小森 和博

「flat」 青桐 ナツ

- 幼児の秋の耐えてる姿がめっちゃかわいい。自分の息子にはいらんけど。

福家書店福岡店 / 日高 礼子

- 小学就学前とは思えないほど手がかからない、無口で無表情のあっくと、子どもを前にしてもやはりマイペースな平介の交流を描いたほのぼのマンガ。お菓子を貰って優しくされてからというもの、平介にどんどん懐いていく…けれど今一歩踏み出せず、結局ひとり我慢してしまう忍耐の男・あっくんが可愛すぎます。なにか事件が起こるとか深刻な事情があるとか、そういったことは一切ございません。癒し成分たっぷりの良いお話です。

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

- ゆるキャラ全開の主人公と我慢強い男の子のちょっとあやしい関係が気になって仕方がない

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

- とにかく出てくる男児がかわいくて仕方がない。だいすきなひとと一緒に食べると、おやつがもっとおいしかったり手をつないで散歩すると嬉しかったりそういう「やさしいところ」がふつうにきちんと描かれているところが好いです。ほんわかしたいならこれが今年いちばん。

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- 多くの女性が表紙買いをしていくこの作品。間違いじゃないです。表紙がとってもかわいいのでそれはありますが、中身もまた買って良かったと思わせる内容です。男目線で考えると、間違いなく女性メインターゲットとして描かれているコミックですが、とても癒されますし守ってあげたいなんて考えちゃいますし、優しくなれてしまいます。こんなお兄ちゃんもいいし、こんな弟がいてもいいなあと密かに考えてしまったり。今後もっと売れる、売りたい作品です。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 荒んだ私の心を癒してくれた5歳児あっくん。超恥ずかしがり屋で、超忍耐児のあっくんとへーすけのほのぼの物語。とにかく、こんな子いねーよ！と思いつつも、ぜひわが子にしたい愛らしさ。今日もまた、読んで癒されます。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

「FLIP-FLAP」とよ田 みのる

- 男子高校生の恋の行方を追っているはずだったのに、いつの間にか圧倒的な引力で『ピンボール』というゲームの魅力、そのゲームに情熱のすべてを注ぎ込む全てのひとたちの本気にひきこまれてしまいます。主人公・深町くんが己の集中のあまり周囲の一切の音や人を感じなくなるシーン、圧巻です。そしてその次のページをめくった瞬間、鳥肌が立ちました。意味を求めなくても、何かに本気になれるって、すごいことだなと改めて感じさせられました。個性的な絵も可愛らしくて大好きです！

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

- 空前絶後の、本格ピンボールマンガ。主人公たちはピンボールのために海まで渡ります。他の人がやってないからピンボール！ではなく、ピンボールを通してしか描けない青春。本当のアツさには、他人なんか関係ねえ！ という境地のすがすがしさは、ピンボールじゃなきゃダメだったんですよ。あと、わざとヒロインの口元が超ヘンなのですが、これも、この口元じゃなきゃ、いけないんですよねえ…… 今年のベストヒロインかも。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- しょんぼりヒロインがかわいい！ 1巻できれいにまとめた力量が素晴らしい！

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

「FRONT MISSION DOG LIFE & DOG STYLE」太田垣 康男 C.H.LINE

- こちらもミリタリー&ロボットだが、戦争の禍々しさ、戦場での剥き出しの人間性の描き方は、下手なノンフィクションよりよほど生々しい。ゲームの設定を借りたマンガだけど、もとのゲームをまったく知らない私が夢中で読めました。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

「GIANT KILLING」ツジトモ 綱本将也

- もうすでに使い古された表現だが、「今一番面白いサッカーマンガ」だ。素人には理解しがたいサッカーの魅力（筆者は大の野球党です）を伝えてくれるツジトモのテンポと構成が回を増すごとにうまくなって無駄がどんどんなくなってきている。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- サッカーの面白さを体感させてくれる。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- 主人公が監督というのが新しくよかった。サポーターの心情も細かく描いていて、さながら全員が主人公のような漫画。面白い。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- サッカーのことはまったくわかりませんが、これは面白い。選手がちょっとずつ覚醒してくとこが読んで楽しい。画も躍動感があって好きです。本物の試合はぼくには少し展開が早過ぎる。このぐらいに分けてもらえるといいんだが。

9mm Parabellum Bullet vo./gt./ 菅原 卓郎

- キャラクターが個性的。選手が主人公ではなく、監督が主人公なのが新しい。展開も速く、読み応えがある。

TSUTAYA 渋谷店 / 実松 由夏

- サッカーを選手の視点ではなく、監督の視点で描いているのがとても新鮮。且つ選手が個性的、魅力的に描かれているため、自分も試合場にいるかのような臨場感が楽しめます。サッカーをもっともっと好きになれる作品。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

「GO-ON！」 秋重学

- アツイです！この人の描く青春マンガはやはり天下一品！ユルさとアツさとちょいエロさ（笑）これぞ『青春』、ですね～！千葉駅前のリアルさも駅ユーザーとしては惹かれましたね（笑）

BOOKS 昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- BECKに引けをとらない面白さ！とにかくパワーがある。連載誌がなくなってしまったのはすごく痛い

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

「Kiss×sis」 ぢたま某

- 間違いなく選考は通らないだろうが、俺は推します。こんなに続きが気になるマンガは「デスノート」以来です。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

「LIAR GAME」 甲斐谷忍

- 良質の頭脳バトルマンガは貴重な存在に違いない（『ギャンブルフィッシュ』の巻数オーバーは残念）。年内には9巻が出る——と思われる——ので今のうちに推しておきたい。

レビュアー / 福井 健太

「MOON」 曾田正人

- 主人公のすばるちゃんが、いろいろな難関にアグレッシブに挑戦していくところが、わくわくして次号掲載が待ちきれないくらいです。すばるちゃんが集中してダンスに打ち込むときに鳥肌たちます。ガラスの仮面のバレエ版！読み始めると、本当にとまらない！！

アニメイト / 鈴木 寛子

- 曾田先生がインタビューで、「昴は10人読者がいたら、下手したら3人くらいしか好きにならない、でもその3人はずっとずーっと好きでいてくれる」と答えていらした。ずっとずーっと再開を待ってましたよ！！こんなに魅力のある主人公はちょっといない（そらの少女マンガよりよっぽど服がオシャレなもの好きです）。なにより最高のライブパフォーマンスを見たときに感じる圧倒的な高揚感、のさらに頂点！であるZONE、ただその瞬間を描こう、描こう、としているストイックな姿勢にリスペクトです。

POP 作家 / 久保 朝美

「PEACE MAKER」 皆川亮二

- 舞台は西部時代。銃を片手に各地に…ではなく、そのような争いを好まない主人公。できれば、そんな事に巻き込まれないように生きたいのだが、お人好しのせいかやっぱり巻き込まれてしまう。これぞ、皆川亮二のマンガ！という気がしました。出てくる誰よりも強い主人公だが、優しくお人好し。ここになんとか惹かれてしまう。そんな主人公の下に現れるライバルの存在。これが、また良いやつで同じく巻き込まれてしまう。スピード感もあって流れも良いが、ほっと一息もつかせてくれるマンガです。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

「PLUTO」 浦沢直樹 手塚治虫

「Qping」 堀江蟹子

- 笑い崩れるほどの笑撃！！あんちゃんとボンのマニアックすぎる趣味にハマること必至！！

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- 人間が抱える心の真っ暗闇を、見事にギャグにしている希有な作品。今までのどのギャグ作品とも違ったブラックさに満ちあふれているのがよい。軍オタだとさらに楽しめるのもよし。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

「Start Me Up -Sugar & spice 8-」 オトヨシクレヲ

- 恋と音楽の情熱が絡み合いながら、互いに対等な関係を築くべく日々を重ねて今年で遂に 8 巻目。現在のティーンズラブジャンルを代表する長編シリーズだと思います。

フリーライター / 会田 洋

「アオイホノオ」 島本和彦

- 自分の好きな漫画の時代の話なので、読んでてこみ上げて来るものがある。もちろん笑いも (笑)。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

- 大御所のくせに青臭くて大好きです。当時の様子を、当時の人たち以外にも楽しめる作品なのではと思います。まわりの人に見せたら速攻で熟読に入っていました。

フリーデザイナー / 橋 千尋

- 「漫画、アニメを超える芸術など皆無！！」に思わず頷いてしまいました。いつものド熱血な島本節に1980年代初頭の実際の風景（「ナイン」が連載中！！）が相まってグイグイ引き込まれます。今後の主人公”焰燃”の苦悩っぷりとヒロイン”トン子さん”との恋愛に期待してます！

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

- 自分が何にでもなれるという幻想は消えたものの、では自分は何ができるのだろうか悩む青年時代の葛藤する心理をうまく描いている。80年代の実在のエピソードを入れることによって、当時の時代の熱気やリアリティも獲得している。

書店員 / 小磯 洋

「アベックパンチ」タイム涼介

- アベックパンチ——それはアベックで闘う究極の愛が試される格闘技。これは……ギャグマンガか！？いや……マジだ！本気だ！ポエム＋思春期＋ラヴ＋格闘技＝異次元。フィクションの限界を試すためのチャレンジ。こういうマンガこそ発掘されてほしい！

文筆業 / 海猫沢 めろん

- 詩を読んでもような世界観。ハチャメチャな主人公たち。こんな学生たちが、世界を変えるんじゃないでしょうか。便利な世の中になったけど、頭でっかちになりすぎてしまっている自分に熱い喝を入れてくれる作品です。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

「イヌジニン - 犬神人 -」室井大資

- 「コミック怪」に連載されているのですが、ストーリーは民俗ホラーアクション！？です。登場人物みんなアクの強そう（っていうか強い）な人ばかりで内容も決して明るくはないのですが、とても惹きつけられます。なんかどっぴりと漫画の世界観に浸かるような感じになりました。

All Japan Goith/TA-SHI

「イルミナシオン」ヤマシタトモコ

- なんか全部カタカナだな…普通の女の子も腐女子もノンケの男子もすんなり読める、しかしガチホモの方だけが激しく拒否反応を示す新世代BLマンガ。ヘテロセクシュアルな人間にとっての非日常、異空間であるホモセクシュアルな世界を日常として描く、というよしながふみの路線をさらに推し進めた感じ。自分にそんな要素はないんだけど、ここで描かれる悩みや切なさ（これポイントかも）はすんなり理解できる描かれ方。正直どの単行本でもよかったんですが、一番最初に読んだこれに。

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

「イロドリミドリ」羽柴麻央

- みずみずしく淡い恋愛物語。これだけならよくある物語なのですが、設定にひねりを加えてあり、物語に現代的なテイストを感じさせます。また、一步引いた視点から描かれているのもこの作品を他の恋愛物語と少し違うと思わせる一つだと思います。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- とっても甘酸っぱい恋のお話かと思ったらとっても切なく一瞬息が止まりそうなお話だった。図書館で出会った緑君と玉緒ちゃん。私の中で図書館はあまりなじみの場所ではないので遠いお話のように感じていたけど玉緒ちゃんが図書館に通う理由が今は亡きおばあちゃんのおうちの空気感と似ているという理由をみて図書館が私にとってもグッと近い場所に感じました。最後は切なくウウっとうなりましたが凄く良かったです！すごくいいマンガだった。

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

「ヴァインランドサガ」幸村誠

- 熱い男達の闘いのマンガです。闘いの中でしか生きられない戦士たちヴァイキングの物語。巻数を追う毎に面白さが倍増します。主人公はなかなか成長しませんが、思いがけない展開になったり、わくわくさせる展開に目が離せません。とにかく、あのよなよしてた王子が……。まだ読んだことのない方にはネタバレになってしまうの書けませんが、その部分を読んだときには鳥肌ものでした。おすすめ作品です。

三省堂書店海老名店 / 近西 良昌

- 去年も推薦しましたが、今年も推します。圧倒的な画力で人間の誇りと愛を語る。本当の男の強さってのをトルフィンと一緒に探したい。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

「うごかし屋」芳崎せいむ

- 2008 年の個人的一押し作品。引越し屋を舞台に「モノだけじゃなくアナタの心も動かします！」ってな人情劇がほぼ 1 話完結で繰り広げられます。芳崎作品は劇中に映画やコミックをからませる手法をとっていますが、今回は文学。引越しも、良作の映画もマンガも文学も、人生のターニングポイントになり得るんだな〜と感動。2008 年マンガ大賞作品「岳」を読んで山に行きたくなる様に、「うごかし屋」は古い文庫本を読みたくなったり、引っ越したくなる、人を動かすエネルギーのある作品でした。

フルハウス八戸ノ里店店长 / 佐藤 誠

「うちの妻ってどうでしょう？」福満しげゆき

- 「ダメな僕」を描いているはずなのに、「僕」はちっとも弱くなくて、やさしくもないのがすごくいい。なんというか、不敵な男だ！「僕の小規模な生活」もいいですが、より斬新な手法（4 コマで 1 ネタ終わり次 2 コマで 1 ネタ終わる）をひょいとやってみせていて、より不敵な感じがしてこちらに一票。のろけにはなっていないのに「結婚っていいな」「妻かわいい」という部分はちゃんと感じさせるのがすごい。

ライター / 門倉 紫麻

- なんとなく、こんな奥さんがほしい！と思ってしまう。とくに妻が腹踊りをして笑ってしまう主人公の描写などをみると、うまくはまっている夫婦仲なのだろうと納得する作品。「僕の小規模な失敗」もあわせて読むとより面白いです。

メガマン・ギター / 涼平

「美しいこと」橋本みつる

- 「誰が見ても文句が言えないような / たとえば / 凄く綺麗なものがあつたらいいのに」と願う、周囲に少しなじめない女子高生の前にあらわれたのは「それ」を知っているという転校生。過去に超能力少年としてテレビに出ていたこともあった影のある少年の策は、なんと盲学校の生徒を襲うことだった—予想外の展開に驚かされながら得る読後感、決して言葉であらわすことができない。あなたはうつくしいものをみたことがありますか？この作品に描かれています。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- 心が折れそうになるほど切ない一作。語ろうと思うと、その繊細さを思いやって手が止まります。奇蹟のような作品。

月下工房 # 書評系 / サイトウ マサトク

「エンゼルバンク」三田 紀房

「おかめ日和」入江 喜和

- こういうの好きです。日常の生活。

ミドリ ギターと歌 / 後藤 まりこ

「お茶にごす」西森 博之

- 長らく「少年サンデー」の中堅作家陣の一角を担っている、西森博之による文科系部活コメディ。今作ではお得意の不良（ヤンキー）マンガ的な要素を入れつつも、茶道部を舞台にしたことによる女子キャラの増加により、あまり男臭くなく文科系のほのぼのとした雰囲気を感じられる作品となっている。ツボにハマる人には堪らない西森氏独特のギャグセンスも健在で、特に 6 巻収録の「肝試し」編は個人的に抱腹絶倒であった。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

「おのぼり物語」カラスヤサトシ

- 上京体験を得意の自虐ギャグでつづる、と思ったらジワジワ小ネタが効いてきて、終盤はホロリ。人の世の無常、そんな哀切さを滑稽味にかえる、「俳味」を感じさせるラストに感服。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

- 誰かを傷つけるわけではなく、誰かに傷つけられるわけでもないが心に迫る苦しさがあって、それは圧倒的な孤独が描かれているから。カラスヤサトシののほほんとした絵柄とその孤独感があいまった、今までよんだことのない「上京物語」。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- 読んでいて、ぎゅっと胸を締め付けられた。「カラスヤサトシ」の1巻をケラケラ笑って読んでゴメンという感じ。多分この2冊は表と裏の関係で、読み比べるとさらに味わい深い。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

- 青春マンガの定番として、ロングセラーになるべき作品だと思う。4コマギャグ「カラスヤサトシ」からも香っていた部分（叙情的と言うと簡単すぎるけれど）がはっきりとした形を持って表に出た感じ。「あーこれだったか」と納得。2つの作品の間になんの食い違いもなく、作家性がすごく強い人だとあらためて認識。

ライター / 門倉 紫麻

「おまかせ精霊」青本もあ

- 願望と他力本願が主題の物語で、ゆるーくぬるーくだめだめになるかと思いきや、しっかりした成長譚になってきたので吃驚。全4巻というコンパクトなボリューム、美麗で完成された絵柄もよし。間違いなく最終選考には残らないだろうけれど、この作品の良さは強く多くの人に知らしめたいところ。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

「おもいでエマノン」鶴田謙二

- 原作は梶尾真治の同名小説。主人公はSFと失恋に明け暮れていた学生時代に、30億年の記憶を持ち続けるという魅力的な少女エマノンと船の中で出会った。夢のような数時間。そして、その後。単純に鶴田謙二の絵が好きで買ったのだけど、すげーロマンチック。やられた。

米子高校 司書 / 野間 勤

「おやすみプンプン」浅野いにお

- 表現手段がアヴァンギャルド、なのにリアル。子供の純粋さと残虐さが心にざっくりささる。マンガというメディアでしか表現できない世界。・・・とかなんとか難しいことを言っていますが、ヒロインの愛子ちゃんがかわいい！これにつきる！それにしても何で中学女子ってこんなに残酷なの？自分の小・中学生時代を思い出して心がズキズキするのに、それでも読んでしまう。そんな引力がこの作品にはあります。大人になった今でも、夜にひとり枕に頭を突っ込んで「あゝあゝあゝあゝ」と頭をかきむしる。誰だってそんな経験、あるでしょ？

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- シュールな主人公の描写（事実ものすごい適当な絵）と、リアルな世間の描写（事実ものすごい精密な絵）が、まず表現として面白い。もちろんそれだけでなく、その表現が臭みの在る物語を軽く明るいテンポで進めてくれる、「漫画をめくると中は別の世界」であることが実によく感じられる作品。

デザイナー / 佐藤 優

- 昨年の1次選考でも挙げましたが、今回もまた1票。連載が1年分進んで作品世界になんというか、凄みが加わってきた。この暗さ、このせっぱ詰まり加減。救いも出口もない閉塞しきった世界観なのに、滄てに一縷の希望を予感したくなるようなリアルさ。誤解を恐れずにいえば80年代の大友克洋のごとく、2000年代の象徴的作品、代表的作家になりうると思っています。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- 昔に比べて、「シュール」ということばを良く聞きます。が！美術の先生として言わせてもらおう！シュールの本来の意味はシュールレアリズムの略であると！！…偉そうなこといいながら、辞書で引いたら①現実離れしたさま②シュールレアリズムの略と二番目にきてました。ギレン的な発言をしたかっただけです。ごめんなさい。んで、シュールレアリズムとは何かというと、ただ単に、非日常、非現実的なありえ〜ん！ってものをさすのではなく、日常や現実を、これでもか！というほど写實的に表現し突き詰め、これでもか！これでもか！おとうさんもうやめて！これでもか！の末のありえ〜ん！がシュールレアリズムなのです。ほら、歯磨きをしない人は汚く感じて、10分する人はきれい好きに感じるけど、1時間半もの間歯茎から出血してるのに歯磨きしている人は完璧にありえ〜ん！でしょう。このおやすみブンブンはシュールな漫画である以上に、シュールレアリズムな漫画であると思います。登場人物の心理描写がものすごいリアル。最初漫画を読んでいるときはありえ〜ん！と思って笑うんだけど、読み続けるうちに、自分の中にある負の部分とリンクして苦しくなるのです。「えぐられる」という表現がびんと来ます。他人に対して情を抱くと、同時にそれは自分や周りを狂わせ、かきまぜる混沌とした負の感情が生まれるということを痛感させてくれる漫画です。「友情はすばらしい！愛は美しい！」とキラキラしながらいつて人間に突きつけたくなる漫画です。あと、漫画でしかできない表現をよく研究してるなど感心します。これを言っちゃうと漫画を読まない方の最初の衝撃が半減するので言いません。でも最後にこれだけは言わせてください。オ○○コから脳がとび出た！！…これほどの確な表現を私は知りません。気になる方は漫画をぜひ

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

「オレたま〜オレが地球を救うって〜」原田重光 瀬口たかひろ

- 電車ではとても読めないエロバカコメディの傑作！原作者のファンになりました。

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

「お一人様物語」谷川史子

- りぼん時代大好きだった谷川さん。久しぶりに谷川さんをまた読み出すきっかけになった作品です。りぼんが大好きだった女の子が気付けば大人になって、社会でお仕事をできるようになり、ワインも飲めるようになって、色々楽しいけど、ふとぼんやりさみしくあっちゃうときもある。そんなごくごく普通の私達の気持ちを漫画にしてくれたかんじです。女の子必見*

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

「かぶく者」デビット・宮原 たなか亜希夫

- この作品の展開には、いつも胸躍らせています！漫画本来が持つ、次はどうなるの！？それでそれで・・・と次が気になり、読ませる力量は、さすがベテラン作家さんだなどと思います。私も含めて、この作品を読んで、歌舞伎の世界がわかり、歌舞伎に興味を持った人が増えた事だろうと思います！！面白さも含めて、凄い作品だと思います！

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 歌舞伎って？梨園って？？日本の伝統芸能「歌舞伎」どこか取っつき難く興味がないことを理由に敬遠してた「歌舞伎」しかし「かぶく者」を読んで以来、見事に「かぶかれて」ます落語と同じように「演目」の内容が分かると面白さが増し、何より役者の「違い」が染み出てきます。そんな違いの分かる人になりたいと思わず思ってしまう。コミック収録の「演目筋書き早わかり」が非常に有り難い。「かぶく」快感を描いた「かぶく者」に見事に「かぶかれる」どっぷりハマります

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

「カブのイサキ」芦奈野ひとし

- この作者さんは、光と風とかすかな心情の描写が相変わらず上手です。もし、人口密度がうんと少なかったら、人間は他人に対してもっと優しくやさしくなれるのではないかとおもえます。この本を読んでいると農業をやっているときに感じる、適度な人間の物理的な距離感と、その距離が生ずる人間の心の適正な距離感を思い出します。農業をやっているときってほとんど一人。数時間に一度人とすれ違うぐらいなので、すれ違ったら必ず何かしら声を掛け合うんですね。そしてその言葉はねざらいと優しさに満ちています。この物語はそんな世界を描いています。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

「からん」木村紺

- 「神戸在住」の次作「巨娘」を読んでびっくりしたと思ったら…次々作「からん」でまたびっくり！しかも、どの作品も秀作ぞろい。これだけ引き出しの多い先生だとは…。まだ一巻しか出てないですが要チェック！

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

「キーチVS」新井秀樹

- 誰に頼まれるわけもなく（何かと）戦い続ける新井秀樹。政治や社会とマンガを絡めて語るのはくだらないことだと思うが、この作品にはそんなつまらないこだわりを捨てさせてくれる真っ当さがある。なぜ誰も読まない？そんなマンガ。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

「キス&ネバークライ」小川彌生

「キスよりも早く」田中メカ

- 温かく、愛に溢れた作品。じんわりと涙が出てしまいました。尾白先生、素敵です。学校と家でのギャップも良い。トキメキを有難う(笑)。文乃と尾白先生の絡みにいちいちドキドキします(笑)。こんな恋愛、憧れる。純愛やー。

ソロシンガー / 山野井 千佳

「きのう何食べた？」よしながふみ

- なんてことのないごく普通のメニューなのに、あまりにもおいしそうで、今スグに作りたくなってしまいます。料理すること、食べることと、マンガのストーリーが実に違和感なく組み合わせられているところが素晴らしい。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- 料理を作るマンガはいろいろあるが、献立から考えるところに共感。「長ネギ1本買ってきて夕飯のおかずでどう使い切るか？」みたいな私の料理脳をくすぐります。作る幸せ、食べる幸せがしみじみ味わえますが、シロちゃんの味付けは甘い！そこだけ気に入らない！

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

- 「BOYS LOVE」ってちょっと・・・と思って読まず嫌い そんな俺の「バカっ」と思わずバブル期にありそうなドラマのセリフを言ってしまいそうになっちゃいました。ストーリーの8割は料理の仕方であります。もちろんストーリー展開は間違えありません。何より素晴らしいのは、ストーリーの中で買い物に行った食材を使用するのが1話だけではなく、次のストーリーで違う料理の食材として利用されるのです。こんなマンガ読んだ事ありますか！！マンガやテレビを見て食材買ったけど・・・こんな切ない思いをしたあなた！「きのう何食べた？」読めばキレイに経済的に、そして何より美味しく使い切れます！！

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- よしながふみの、性差に対する切り口にはどの作品にも唸ってしまう巧みさがある。現代を生きるほとんどの男女が、独りで生活することに不自由しない。それでも誰かと一緒にしようとする理由、いてもいいよ、という理由がこの漫画にはちょっとずつ描かれている。毎日のちょっとしたおいしいもの。おいしいものを誰かと一緒に「おいしいね」と分かち合えるよろこび。孤独にもいれるけど孤独ではない生活。読むと元気になる、滋味あふれるマンガです。※お夕飯作るのがめんどくさい時、これを読んでテンションをあげるというとても便利な効果があるところも好き。(レシピがちょっと難しめなところもやる気がでている)

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- よしながファンとすれば「コレが読みたかった！」と快哉を叫びたいマンガだが、冷静に考えるとこれが普通に載っている『モーニング』はスゴイと思う。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

- ご飯が作りたくなります。ご飯が食べたくなります。毎日のご飯の大切さを改めて感じます。毎日のご飯の楽しみを思い出させてくれます。小さな幸せ大切に**な一冊。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

「ギャラクシー銀座」長尾謙一郎

- このマンガを未見の人に的確に表現する言葉を私は持っていない。「神の麻薬」そうPOPに書いて売っていた。退屈した神のためのサイケデリックミュージック。脳のチャンネルに運良く合ったみなさんおめでとう。

POP 作家 / 久保 朝美

「きんぼし」明石英之

「くおんの森」釣巻 和

- 通常の「もり」は木が三本で森なのですがこちらのもりは本が三本でもりとかきます。題名のとおり、本好きな人々の住む町とその町一番の図書館にすむ人ではないがそこにいる何者？(妖怪とも人間とも妖精とも言い表しがたい)かとの物語。巻数も連載数もまだ数少ないのですが、幻想的な世界観や架空の設定がすごく面白い。これから一番期待している漫画です。あと、造語が好き。馬鹿みたいに本が好きを意味する「書痴」という言葉。なによりこのタイトルがね！本が三本で森ですよ！あなた！でも気持ちはすごく良くわかります。古本屋や図書館の古本の匂いは森林浴をさせるように落ち着いたゆったりとした気持ちにさせてくれますもの。そんな匂いをかいだときのようなゆったりとした気持ちになる漫画です書痴のみなさんにぜひ！

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

「くらしのいずみ」谷川史子

- 少女誌や女性誌で活躍されていて、その枠から出る事がないだろうと思っていた作家さんを青年誌に持ってきた編集さんも凄いのですが、それ以上にそれに応え、たくさんの男性読者に「おもしろい」と言わせた作家さんの力量に感服しました！！読み終わった後の読感、何とも心地良かったです！

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 谷川先生のオムニバスはやっぱり最高！！今回も様々なアプローチから結婚生活を描いています。よくもまあ思いつくなと思いつつも、まあ結婚生活って人それぞれだし生活に密着しているからそれぞれ物語があるのかもしれないです。恋愛+生活=結婚ってことなのかも。問題がありつつもほのぼのしてしまうのも味です。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

- とにかく泣きました。何度読んでも泣ける。世界と人間の「善なるもの」を、強い意志をもって信じる著者。甘ったるい夢ではなく、地に足のついた希望。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- 夫婦って、ドラマなく、あたりまえにそこにある無毒で無害なものだったりとか、逆に過剰に無味乾燥だったり、どろどろした人間関係を嘘で覆い隠してる、って描かれすぎてるけど、本来、夫婦ってあったかくて、人ふたりがやってくれる中身と理由が詰まってるんだよねえ、っていうあたりまえなことを、あたりまえじゃなく教えてくれる作品です。矢野家の多恵ちゃんの手紙に泣かずしてナニに泣けと言うのか！ ちなみに私、夫婦の人に何度かプレゼントしました。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 2008はまさに谷川史子イヤーであったと断言します。だって6冊ですよ6冊！こんなに読んでいいのかしらと戸惑うほどに、頑張ってくれた1年でした。中でもこの作品は、結婚した夫婦の結婚後のカタチをそれぞれ描いているところが好きでした。ゴールのその先を描きながら、それでもお互いを思い合う。万人のための少女漫画が、ここにあります。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

「くるねこ」くるねこ大和

- 猫ってくるんだよね。猫の里親を探すためのたしになればと思って買ってます。本当はただの猫まんがオタクですが…

福家書店福岡店 / 日高 礼子

- 個性的な猫5匹に囲まれての生活をつづるエッセイコミック。個人的には、ポ子の訴えている「うええええ〜」って顔が萌え。ウェブ漫画ではあるが、コミック化で更にファンが増えたのでは？

TSUTAYA 渋谷店 / 実松 由夏

「月光条例」藤田和日郎

「コーヒーガールズ攻略バイブル」仲居ゆかり

- パチスロ雑誌で載っていた4コマです。パチンコ屋でコーヒーを販売しているコーヒーガールズを取り上げた異色作です。著者自身がコーヒーガールズだったと言うのが凄いです。年末にはついに一般誌（「増刊漫画ゴラク」）にも進出したので個人的に大注目だったりします。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

「この世界の片隅に」こうの史代

- 実は深刻な暗い話なのに、この爽やかさ、ユーモア、軽やかさはどうだろう！何度読んでも心がほっこりと温かくなる、そして戦争の非情さをしみじみ感じる物語。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

- セリフも描写も抑制され、作者自身の語り口も登場人物たちのたたずまいも、すべてがつつましかでありながら、そこに流れる想いの切なさ、交わされる感情の切実さは、深く深く心を突き刺す。どんな結末なのかを思うと心がかき乱されます。完結の下巻を待つ今が、一番しあわせな時かもしれません。

朝日新聞編集センター員 / 小原 篤

「ささめきこと」いけだたかし

- 最近ときめいてないわーと言う人にお薦めの一冊！女子の女子に対するプラトニックラブと学生生活の楽しさをまとめてお送りする今作は、懐かしさとときめきに溢れていて大変よろしいのでございます。きゅんきゅんしたい人に是非。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

「サムライカアサン」板羽皆

- ゲラゲラ笑って、オイオイとツッコんで、そしてワンワン泣いて。家族の温かさ、確かさを感じる1作！ある意味、人生の名言集的な1作でしょう。オカン、最高！

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

「サンケンロック」Boichi

- 韓国が舞台のギャングマンガなのですが、とにかく絵が上手いと思います。一度見たら忘れない画力だと思います。筋肉凄っっっっ！！！！って感じであんな肉体になりたいです。内容も暗くなくて、むしろ明るい感じ？ 主人公のケンの言葉にはワタシ心震わされっぱなしなのです。。。

All Japan Goith/TA-SHI

- まず目につくのが画力の高さ！表紙のクオリティで中身も描かれているのは凄いです。内容的には幾分ご都合主義や後付けサクサクな点も見受けられますが、そんなもの吹き飛ばす主人公のアツさ！悪く言えば一昔前なのかもしれませんが努力・友情・勝利なマンガです。舞台が韓国であることも実態を良く知らないことが功を奏してリアリティを損なわずにいる気がします。ただ画力が高いだけにお色気シーンがとてつもない破壊力を持ってしまっているのが逆に足枷になっているかも…。

信長書店四条河原町店 / 中村 誠亨

- 日本人の少年が韓国ヤクザのボスになってのしあがる。暴力もお色気もギャグも、グルメまでもが盛り込んであるけど、いちばん好きなポイントは少年マンガしてるってことなんだなー。主人公のケンはいくらにまっすぐ過ぎるかも、でもヒーローはそうでなくっちゃあ。大人になってしまったばくはつい、「アンタそりゃきれいごとでしょ」と思ってしまうけど、彼がコブシをふるう時、その気持ちごとぶっとばしてくれるのです。ばくも強い男になりたい。今からでも間に合うなら、で。

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

「シマシマ」山崎紗也夏

- これも設定もので気に入った一冊。絵が単純だが、表情が生きている。特に自分の中に読んでる時に盛り上がるとかは無いが、マンガの中での時間の流れがゆったりしていて、登場人物の心境がとても把握しやすく、気がつくとのめり込んでいました。

BUGY CRAXONE ドラム / モンチ

- キャラクターがひとりひとり魅力的。何より、この設定でドラマが起きないはずがない！すごい！

9mm Parabellum Bullet vo/gt/ 菅原 卓郎

- 一人でいる事が寂しい夜、どうしようもない夜、そんな眠れない夜に添い寝屋男子達があなたの側と一緒に寝てくれる。恋人とかそんなのではなくて、ただ側にいて一緒に横になって悩みを聞いてやさしく接する。決してカッコいい男たちばかりが登場するわけではないけれど、それが逆に現実的な感じがして作品に入り込める。この作品は何かこう今を生きる女性の悩みをそのままに書いてるんだろうなあって思えるマンガだ。

コミック担当 / 下司 卓史

- 寝れない。この一言をマンガの中の人物が上手に表現しているマンガだと思う。その時の不安等、表情がはっきりしているマンガでそれを言葉なくとも読者にうまく伝えてくれる。個々のキャラクターが嫌味でなく、とても安心して読めるマンガ。この世界観すごく好きです。今の現代社会に数多くいる女性の観点から描かれているマンガだと思う。このマンガに出てくる男の子達の優しさなども心地よいマンガだと思う。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

「ストロボエッジ」咲坂伊緒

- 超王道少女漫画！！キュン死に必至

成田本店とわだ店 / 上山 遼

- キュンと。キューーンとしちゃってください人のかなわないけどかないそうだけどかなわないけど・・・の語ってなんでいいんでしょうね

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

- 一気に読んで、読んだ後しばらく復活できませんでした……。それ位引き込まれた!! 誰がいい悪いわけじゃなくて、みんなみんな、一生懸命“好き”なんだよねえ。最初の恋はピュアすぎて痛いです。本気は痛いんですね。蓮君が自分の気持ちに気付くのか、気になって眠れません。蓮くーん!!

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

「それでも町は廻っている」石黒正数

- ドジなメイドということでお約束の萌えキャラにならないところが○。ヒロイン嵐山歩鳥は一言で言うと「残念な女子」。その残念さが発揮されるほどに面白さが増します。

会社員 / 林 礼春

- メイド喫茶がある以外はどこにでもある町の日常を描く連作だが、各話、緩い雰囲気の中に企みが凝らされていて、読者を飽きさせない。嫌味なく作者のクレバーさが伝わってくる良作。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 昨年も推したがノミネートには至らなかったのが今年も推薦。下町を舞台にした日常コメディでありながら、時にミステリーや SF 的なエッセンスを足すことにより独特の石黒ワールドを形成している。また、キャラクターを立てながらも、キャラクターの個性に頼り切らない緻密な物語の構成にも安心感がある。2008 年は他にも女子大生のモラトリアムな日々を描いた『ネムルバカ』も単行本化されており、こちらもオススメな作品。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

- 商店街で繰り広げられるドタバタけど何とも素朴で暖かいマンガ。人がこの作品に触れる時によく出てくる「一見メイドマンガだけど実は“メイド萌え”からはほど遠い」的な言い回しは確かに言い得て妙。長年のマンガ読みなら思わずニヤリ、の引用やら元ネタやらが登場人物にじっくり馴染みつつ、かつそのキャラ自身が「引用だと分かって発言しているんだから」と思っているかのような二重構造、メタコミック的な寄り道要素が楽しい。読み手のマンガ読書歴の蓄積や経験値が試されるような緊張感があるかも（大げさか）。作者の石黒正数は中編「ネムルバカ」でも独自の時代感覚を提示していて、そのある意味健全で確かな目線にほれほれしています。名セリフも多いぞ。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

- ただのバカの子高生の日常のような非日常のような毎日。基本 1 話完結で、ミステリーがあったり、SF があったり、人情話があったり、ご町内コメディという形は変わらないが、巻を追うごとに内容がぐんぐん良くなっている。1 巻ごとに作家が進化している作品。先が楽しみ。

書店員 / 小磯 洋

「チェーザレ」惣領冬実

- 久しぶりに満足できる骨太な歴史物。端正な絵も楽しみ。服飾や建築だけでなく、老若男女幅広い年齢層のキャラクターをきちんと描き分けることのできる稀有な画力だと思う。完結したら「ルネッサンス期を学ぶにはまず『チェーザレ』」ぐらいに、歴史物として一般に定着してもらいたい。また、惣領冬実がルネッサンス期を描くことが、『エデンで会おう』時期以来の読者にとっては本当にうれしい！

大日本印刷 / 佐々木 愛

「デボネア・ドライブ」朝倉世界一

- ゆるいだけの漫画かなー、と思ったら、そうやなくて、おもしろかった。続きが気になる。

ミドリギターと歌 / 後藤 まりこ

「とらドラ！」絶叫

- 断じてネタとしての投票ではない。ライトノベルのコミカライズの中では、出色の作品。オリジナルを十二分に活かしながら、マンガならではの膨らませ方、キャラクターの表情の豊かさはずば抜けている。今後の活躍が楽しみ。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

「ナチュン」都留泰作

- 1巻を読み終えたとき何を書こうとしているのかわからなくて腰を抜かしたが、第1部を終えて、いよいよどこへ行こうとしているのかわからなくて最高。

コミックナタリー編集長 / 唐木 元

「ネイチャージモン」寺門ジモン 刃森尊

- この男は「本気と書いてマジ」なヤツ。焼肉編にはマジに人生観を変えられてしまった。こんなことってあるんだなあ。2008年はこのマンガをいったい何人に布教したのか、数えるのに腕が足りない。

往来堂書店 / 三木 雄太

「ノーバディクライ」サトーユキエ

「のらみみ」原一雄

「はちみつの花」木内たつや

- 主人の義息子（ハーフ）使用人の初々しい恋愛話です。

福家書店福岡店 / 日高 礼子

「ビアティチュード (BEATITUDE)」やまだないと

- トキワ荘のBL版という、誰もが恐れ多くて考えつかなかった新たな視点で少年漫画勃興期の熱を描いたスタイリッシュで、切なく悲しい08年版『まんが道』！関連書籍(まんが道や石ノ森作品、赤塚不二夫特集など)を読み返したりトキワ荘跡地を訪れたり、松葉にいきたくなるそんな1冊。とにかく、いい。

アニメイト / 鈴木 寛子

- 昨年随一の「衝撃の問題作」。トキワ荘神話への大胆すぎる挑戦であり、関係者がこの作品に不快感をあらわす気持ちもよくわかるが、それでもマンガとしての面白さは疑い得ない。おそらく、作者が真に描きたかったことは「この先」にある。何年かかってもいいから完結させてほしい。

新聞記者 / 石田 汗太

- 個性と才能あふれた若い男達が、大いなる夢を持って、ひとつ屋根の下で生活をともにする……。トキワ荘とはボーイズラブである」とみなし（ここまでは誰でもできる）、それを躊躇することもなく、具現化したやまだないとの胆力とチャレンジスピリットに感嘆。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- あの、やまだないとが久々の連載！ かつこい男の子な表紙と裏表紙！ で、ほぼジャケ買いで買った漫画なのですが、意外！ 内容はあの有名なトキワ荘を舞台にし、主人公は石ノ森章太郎と赤塚不二夫という予想外のものでした。でもおしゃれ…。さすがやまだないとだとうなせませす。ほぼヤローのむさくるしい生活も、夢に向かってものが青春も、本まるごとおしゃれなのです。中のインクの色だって黒色じゃなくセピア色だし…。一冊の本であり、ひとつの芸術作品。このやまだないとの世界観があるからこそ、夢を追いかける普通なら泥臭い感じがするストーリーもきらきらと輝き、ただただこの物語の主人公たちがうらやましくてしょうがなくなり、憧れすら持ってしまう。そんな作品なのだと思います。作家のもつ世界観とテーマがうまくからんだよい作品。一つツッコミをいれるなら、アカツカじゃなくてクボツカ（初期の）だろ！ って叫びたくなるくらい。窪塚洋介の容姿をもった赤塚不二夫って所です

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- 「おしゃれなマンガ道」で済ましてはいけないマンガ読みなら必読の一冊。トキワ荘のことはあまりよくは知らないのですが、同じ夢を志す若者たちの青春群像劇として非常によいです。マンガに対して同じ気持ちをもちながらも上手くいくものいかないものの姿がまんべんなく描かれています。絵の密度も非常によくて、パソコンで描くところと手で描くところをバランスよく使っているところはさすがです。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

- ベスト1 巻賞。連載が続いて完結することを祈りつつ、やまだないとさんが、かの有名な「トキワ荘」をモチーフに新連載を開始したときは、いつのことに驚愕しました。すごく意外、このひと、じつはまんがの黎明期に興味があったんだ、というのがひとつ。それから、彼女の過去の作風からして、まさか、史実（や、もはや歴史でしょ？ トキワ荘は！）を基にしたまんがを描くとは思わなかったよ、というのがふたつめ。さらに、え？ 主人公は、推定／石森章太郎（のちに石ノ森章太郎と改名）なのか！ 洪いともってくるなあ、この「目線」は今までなかったなあ、という感嘆がみつめ。しかも、BL トキワ荘かよ！、これがよつめ。いつめは最後に。この1950年代当時のトキワ荘のエピソードのあれこれは、いまや神話と化したと言っても過言ではありません。「トキワ荘」が一般に有名になったきっかけは、なんとと言っても藤子不二雄 A さんが、1970年に『週間少年チャンピオン』誌上で連載を開始した自伝的長編作『まんが道』でしょう、やっぱり。『まんが道』は、NHK で2度もテレビドラマ化され、ドラマが名作だったこともあり、一般への認知度がさらに深まりました。また、『まんが道』を読んで、まんが家を志したという後進も少なくありません。そして、本作を偏愛する作家たちにより、『まんが道』の台詞や登場人物をパロットした表現は、現在では、もう本当に数えきれないくらいまんが作品の中に点在しています。「ミュージシャンズ・ミュージシャン」という言葉がありますが、藤子不二雄 A さんは、本作により、巨匠でありながら、「まんが家ズ・まんが家」という側面を併せ持つことになったと言えます。それから、これまたNHK で放映された、トキワ荘のドキュメンタリー番組も忘れられない秀作でした。映画なら、市川準監督の『トキワ荘の青春』、犬童一心監督の『黄色い涙』もトキワ荘がモチーフ。これに加えて、トキワ荘に関するまんが評論系の書籍や文献があり、藤子 A 作品以外のまんが作品も藤子 F 版トキワ荘ものと言われる『藤子不二雄物語 ハムサラダくん』、なんと今年に入ってから、ちばてつやさんも当時のことを振り返った自伝まんが『トモガキ』（週間ヤングマガジン掲載）を発表しています。わたしもトキワ荘に関する表現物すべてに目を通してはいるわけではないのですが、それぞれの作品を比べてみると、これがちょっとおもしろい。芥川龍之介の『藪の中』というか、黒澤明監督の『羅生門』というか、トキワ荘という場の持つ多面性が浮かび上がってくるのでした。どの人物の目線をとるのか、どのエピソードにスポットを当てるかで、物事の捉え方がまったく違ってきます。けれど、どれも嘘ではないし、どれも本当のこと。真実とはいったい、なんなのでしょう？ さて、さまざまにトキワ荘に関する表現物を挙げ連ねてみましたが、じつはどれも男性の作品ばかり。本格的にトキワ荘を題材にした作品を描いた初の女性が、やまだないとさんなのでした。こんなに女性まんが家人口が増えた昨今ですもの、女だって、トキワ荘関連の事象には、男性に負けず劣らず思い入れがあるはず。いつかは、誰か、

女性作家もこの題材を手取ることもあるだろう、とは思っていましたが、まさか、それがやまださんだったとは。やまださんと言えば、パリとか、エロとか、おしゃれとか、西荻とか、傑作の数々を描いて来ての、作家歴20年選手です。まさか、まさかのダークホース。やまだまんがで、トキワ荘が読めるとは。こんなときです、こんなとき。まんがを長年読み続けて来て、ほんとうによかったと実感するのは。まんがの神様(たぶん手塚治虫)に感謝するのは。やまだ版トキワ荘物語『BEATITUDE』は、「トキワ荘に集った実在のまんが家たちをモデルにしていますが、フィクションです」と明記してあるとおり、人格や設定、関係性を大胆に変えてきているのが特徴で、トキワ荘は「トキノ荘」だし、登場人物たちも全員、どこかをもじった変名になっています。主人公の推定／石森章太郎は「花森ショー太郎」、主人公の相棒である推定／赤塚不二夫は「クボヅカ フジヲ」、そしてアパートの紅一点・推定／水野英子は「水島 ユミ子」になっています。『BEATITUDE』は、ショー太郎、クボヅカ、水島クン、この3人を中心に据えた、まんがに情熱を傾ける若き表現者たちの群像劇です。物語の序章は、「無理……もうなんも出ない……描くの……苦しい もうマンガ……やめた」と、机につっぶす中年になったショー太郎の独白で始まります。そこから暗転、一気に過去に遡り、時代は昭和30年代、高度成長期のまっただ中の東京で、希望に満ちた若き日のショー太郎の青春物語が始まる、という構成の妙に一瞬で心を奪われます。雑誌掲載時の原稿に、ものすごい改稿をして単行本にしているところにも静かな意気込みを感じました。まず、彼女従来のコマ割を止め、「昔風」に非常に小さくコマを割ってきています。ショー太郎やミズシマクンが作中で描くまんがの絵柄もきっちり、それぞれの元ネタの画風を押さえています。やっぱり、やまださん、絵、うまいや。また、ここぞというときの擬音語のレタリング、たとえば、90ページの小鳥の鳴き声「チュン チュン」は、石森さん風にちゃんと「まるっこい」。窓にペンをかざすクボヅカ氏の横顔が、やまださんの絵柄を離れ、ほんの小さなコマだけ、石森まんがの典型的な主人公顔(009の島村ジョー顔ってことです)になるところとか。ショー太郎の担当編集さんの顔が、石森まんがでよく見かけるニヒル系脇役顔に造形されていて、ある意味、ファンに目配せしたような楽屋落ちギャグになっています。というようなところから、じょじょに始まって……テラさん(=トキノ荘の住人で推定／寺田ヒロオ)と飲み屋のママがセットになると、なぜか、昭和50年代の向田邦子脚本の久世ドラマ風の味わいを醸し出し。ショー太郎が田舎の姉に宛てて書く手紙は、まんま主演・ショーケン(萩原建一のことね)、脚本・倉本聰のテレビドラマ『前略 おふくろさま』風の演出となっています。でもってこれは、さらに石ノ森章太郎名義になってからのヒット作『HOTEL』のテレビドラマの演出にもかぶります。こちら、"ねえさん、事件です "という、ねえさんへの報告という形を取った高嶋弟のナレーションが挿入される演出でした。「ムーンライダーズ」の鈴木慶一そっくりの流しのギター弾きが歌う唄は、時代考証をまる無視して、SMAPの「夜空ノムコウ」に、遠藤賢司の「カレーライス」。さらに最終ページでは、慶一さんの自作曲を「ト・ド・ケ・ヨ ビアーティテュ……」と唄っていますしな。ショー太郎たちの憧れ、テヅカ先生の自画像は、なんと江口寿さんの「絵柄」になっています。それから、「水島ユミ子」は、「大島弓子」のダブルもじりです。また、推定／藤子不二雄である「藤野富士雄」は、やまだ版トキワ荘では、一人の人物ということになっていて、やまださんの分身としていろんなまんがに登場する「ナイトーさん」の姿形を取っており、作中で原稿を落として(!)います。この点については、ものすごく、周到に、細かく組み立てがなされていて、本当に脱帽。『BEATITUDE』の最大のおもしろさと深みは、一見トキワ荘の面々を描いているようでいて、じつは、やまださん本人のまんが家として過ごして来た20年間の個人体験を色濃く投影しているというところなんです。だって、やまださんも地方出身者であり、東京にまんが家になるために出てきた人間のひとりですから。彼女がやろうとしていることは、トキワ荘を描くことで、時代が移り変わろうとも変わらない若者の普遍性を描くことなのだと感じました。もう一度、繰り返しますが、やまだないとさんが、かの有名な「トキワ荘」をモチーフに新連載を開始したときは、驚愕しました。そして、いつつめの驚きは、やまださんの描くフードが、はじめてうまそうに読めたことです。なぜ、他作はまずそうなのか?については、長くなるので割愛、『まんがキッチン』を参照ください。すいかにドーナツ、カレーライス。コイケさんのラーメン。フランスパンのコロッケサンド。クボヅカ氏の作る7月31日のほとんどキャベツハンバーグ、ごぼうと油揚げごはん、たまごのみそ汁。どれも素直に「うまそう」と思えました。なぜだろう?と考えてみたら、作品に描かれている主題が、絶望ではなく、ほのかな明日への希望だからじゃないかならうかと思いついた次第です。題名の『BEATITUDE』を辞書で引くと、至福という意味でした。至福の時に口にする食べ物、まずいはずありません。あの下宿部屋の二階で喰えたすいかでさえ、幸福な味がしたはず。追記誰になりたいかと言われたら、水島ユミ子になりたいです。つか、あれはきつとわたしです。ユミクンになって、徹夜明けの部屋で爆眠しているショー太郎とクボヅカ氏を、わたしもスケッチしたいです。や、あんな光景を見せつけられたらですね、あれは女子なら、描かざるを得ません。さらに、カメモリ先輩に見とがめられて、あわあわしたい、です、むしろ。という視線を持つことが、女子がトキワ荘を描く意義のひとつかと。ないとせんせい、トキワ荘は、最強のチーム男子ですね?トキワ荘男子、萌え〜と言ってみる。だって、わたし、女子だから。

「ヒストリエ」岩明均

- 感性が支配する古代に、理性を働かせて地位を高めてゆく物語。過剰でもなく、リアルすぎることも無く、岩明均のもつテンポの良い「漫画」と思わせてくれる作品。

デザイナー / 佐藤 優

「ひみこい」ろびこ

- 2008年注目の作家と言う事で。次に来るのはろびこだ！と言い続けてます。少女系で、切なくてちょっとキュン☆ってくる作品に飢えてる人に読んで欲しいですな。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

- 平凡な学校生活の中で、息を潜めて育まれる「秘密の恋」。時としてそれは滑稽ですらあるわけだが、主人公たちの等身大の姿がなんとも、つたなく、もどかしく、せつなく、全てが初々しい。「今どこにでもある恋をどう描出するか？」は、少女まんがの永遠のテーマのひとつ。さらにどこまでそれに近づいていくのか、次なる成長にも待望したい。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

「ファイブ」くさか里樹

- もうね。小学館さんに完敗。TEENを萌え殺しにするマニュアルをたぶん作って、作家先生にくぼってるはず。

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

「ファムファタル ～運命の女～」シギサワカヤ

- 「天然？それとも計算…？」なんて推量も及ばない女性キャラクターの裏を打つシギサワカヤ自身の計算高さ。振り回されても幸せ？棘が好きなお人にはぜひ触れてみて欲しい作品。

往来堂書店 / 三木 雄太

「ファンタジウム」杉本亜未

- 杉本亜未さんのまんがが好きだ。大好きだ。 と、前から一度、文字を大にして、どこかに書いてみたかったのです。 が、お菓子研究家という、まんがとはぜんぜん関係ない職業ですし、いままでそんな機会が自分の人生に訪れようはずもありませんでした。 なので、今、ここに書きます。 杉本亜未さんのまんがが好きだ。大好きだ。 杉本さんは、寡作なかたです。 彼女の代表作といえば、知るひとぞ知る傑作まんが「ANIMAL X」。 本作は、バイオテクノロジーと原始の融合がモチーフ。 東京から始まった物語は、舞台を海外に移し、やがて世界的な陰謀に発展する、という壮大なスケールの SF 超大作です。 途中、掲載誌が変わるといって、悪条件もはねのけて、13年という歳月をかけ、世紀をまたぎ、2004年に全16巻でみごと完結、という経緯を辿っています。 すごくおもしろいまんがなんですが、主人公の恋人同士のふたりが、両方とも「男」な上に、ひとりとは「血族」と呼ばれる恐竜の血を引く（そして恐竜に変身もできる！）太古の種族で、もうひとりとはバイオの力で両性具有になっちゃいます。 で、ふたりは、やぐざと謎の研究機関、敵対する別の「血族」にもつけ狙われます。 紆余曲折の末、両性具有くんは、恐竜族くんの子供を生んでしまい（！！）、そしてふたりの運命は？！という……おしゃれなカフェとか、電車の中とか、初対面にひととかには、ちょっと粗筋を説明しにくいよね？的なストーリー展開なのでした。 で、もって、じゃあ、「ANIMAL X」はBL まんがか？と問われれば、あまりにも SF 巨編な作品だし、それは違うといわざるを得ません。 カバー絵を見る限り、主人公のふたりは、一見普通の BL まんがに登場しがちな男夫婦っぽいですが、白髪くんのほうは、女体化して子供を生んじゃってるわけでした。 まあ、これは、そういう意味でも、BL とは言い切れないですね。 カテゴリズシにくいので損をしている、という印象があります。 あらゆる意味で狭間。 それが「ANIMAL X」の特徴であり、最大の魅力なのでした。 こんなふうにと、" どんなどんでもまんがなんだ " と勘違いされそうで、かなり嫌ですね。 しかし、実際に読むと、すごくまじめなしっかりした内容で、涙なしには読めない純愛物語。 未読のかたはぜひに、と強くおすすめしたい作品なのでした。 13年かけて全16巻、この粘り腰のあるまんがが家さ

んが、渾身とも言うべき「ANIMAL X」完結後、一体次にどんなまんがを描くのだろうと、密かに注目しておりました。……まさか、これで燃え尽きちゃったりしないよね？と、勝手にハラハラしてみたり。そんな杉本さんが昨年、唐突とも言えるタイミングで、始めた連載が「ファンタジウム」だったのでした。万歳。

掲載誌は「モーニング2」（講談社）で、毎号かなり歯ごたえのあるページ数で描いていらっしゃるのもファンにはうれしいかぎり。なんと、今度のまんがは、マジシャンの世界が舞台です。主人公は、うら若きサラリーマンと中学二年生の少年。進学、就職と順風満帆に人生を歩んできたサラリーマンの北條英明にとって、場末のマジシャンとして、孤独に生涯を終えた祖父・龍五郎は、密かな憧れであり、反面教師的な存在でもありました。そんな故・龍五郎が、生前かわいがった唯一の弟子、それが天才少年マジシャン・長見良です。北條と良、このふたりが偶然出会うところから物語は始まります。じつは、良には特殊な障害がありました。彼は、読み書きすることが困難な「難読症（ディスレクシア）」だったので。天才といえど、親にもその真価を理解されず、学校に行けば、難読症も災いし、陰湿ないじめにあう良。しかし、彼の才能に深く惚れ込んだ北條は、思わず彼のマネージャー役を買って出ます。そのうえ、良を親元から、自分のマンションに引き取って、同居までしてしまうのでした。合コンもしたい盛りの、25歳の、仕事もできて（第一話参照）、高学歴の、そこそこイケメンで……な男が、天才っぽいかもしれないというくらいで、一人暮らしのマンションに男子中学生を引き取るのでしょうか？現実なら、そんな神展開100%有り得ません。普通の私なら、そこが一番ファンタジウム！と突っ込むところですが、杉本さんの話の運びは、あまりにもなめらか、かつ説得力があるので、連載で追っていると、突っ込む隙もなく、毎回感動で号泣の嵐ですから。いや、こんな設定が「起こせる」とって、まんがって本当に「ミラクル」"。そして、このふたりがコンビを組んだとき、マジック界にすばらしい奇跡が巻き起こるのでした。ファンタスティック！ストーリーも面白いのですが、杉本さんの絵がまたいい。彼女自身は「絵がダサイ！！」と後書きで自嘲していますが、全然そんなことなく、すごく色気がある絵なんです。特に瞳の描き方が独特。スミー色のはずなのに、青みがかかった美しい白目に、スミよりずっと深い漆黒の黒目が輝いているように見えるのでした。不思議。「ファンタジウム」は、現在2巻まで刊行されていますが、1巻の後書きまんがに胸が締め付けられました。最後にネームを一部抜粋して、締めくくりたいと思います。「しかし最大の不思議はこの私が漫画をつづけているということ！！漫画家はつらいことが多いので 友達は沢山やめてしまいました 私自身もうダメだと思うことが何度あったかわからない これこそミラクルですね！！私を苦しめるのも すくってくれるのも まんがです」……私は、まんがに救われてばかりです。杉本さん、また描いてくださってありがとうございます。

料理研究家 / 福田 里香

「フダンシズム — 腐男子主義 —」もりしげ

- 女装したアマネの可愛さに満票。それで理由は十分だけれど補足するならオタクともやおいとも無縁の完璧王子（パーフェクトプリンス）な少年が、姉に引張られ女装させられ即売会の売り子をさせられた先で出会った少女に恋をして、彼女に認められたいと“腐”を勉強してく様が清々しくて痛々しくて、惹かれずにはいられない。ガイド漫画で学び熟読し池袋へと通った果てにふと気がつくとななたも立派に腐男子主義者。

書評家 / タニグチリウイチ

「ブラム学園」式瓶 勉

- ハード SF「BLAME!」のスパインアウトというセルフパロディ作品。感動するぐらいに頭が悪いのに最高に面白い。データベース消費万歳！

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

「ブランコ」ウイストット・ポンニミット

- 今まで、この人の漫画、読んでなかった事を後悔。何回も泣いてしまいました。ずっこい。最初、絵が、ちょっと苦手やったけど、1巻読み終える頃には、かわいく思えてきた。ブランコ、かわいい。今年、僕の中での、一等賞の漫画です。やさしい人になりたいです。

ミドリギターと歌 / 後藤 まりこ

「へうげもの」山田芳裕

- 骨太。歴史物でありながら平然とそのセルフパロディでもあるところがすごい。山田芳裕は、普通の人なら「ネタ」とか「一発ギャグ」にしてしまうところを透徹して本物にしてしまうところがすごい。冗談が本物になる。古田左介がこれからどうやって織部焼を完成させていくのか。気になる。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

- 美術の先生で漫画研究部顧問という職業の立場から言うと、美術をするうえでデッサン(日本語だと素描。形、色、立体感、表情、雰囲気をも自分の目を通して見た素のままを描くこと)力は必須!漫画もしかり。デフォルメや単純化をされた世界なんだけど、デッサン力をつけることで動きや背景、表情など表現の幅が広がると個人的に考えてます。が、デッサン力の有無がよし悪しではないのが美術の面白いところ。ピカソや古代の古代の出土品は想像しやすいところだと思います。実物に近いほど=上手いという観念を超越するほどの存在感や圧倒的な力強さで見るものをひき込む。それもすばらしいアート。漫画もしかりこの「へうげもの」はそんな漫画です。人に勧められ読んだのだけど、登場人物のある意味現実より現実らしい表情や、インパクトのあるコマ割り。擬音の巧妙さもたまらない。織部焼で有名な古田織部が主人公なのだけど、漫画の魅力も織部焼に近い気がする。会席料理もおいしいけども、さんま焼いたのや、ぶりのあら炊いたのの美味しさよ!みたいな時代物が苦手な私にとって、美術にスポットが当たった珍しい主題&漫画の中ででてくる小道具の描写は大きなポイントです。実際に京都の美術館に行ったときに作中にでてくる具足を見たときにはテンション上がりました。

米子高校美術教員兼漫画研究部顧問 / 佐川 由加理

- 同業者や版元にファンの多い山田先生、へうげものでかなり新規のファン(特に女性)を獲得したがまだまだこんなもんじゃなくはずだ。世の中の多くの人がこの面白さに触れるよう、山田イズムに開眼するよう、もう一花咲かすお手伝いがしたい。どんなかたちでも。

POP 作家 / 久保 朝美

「べしゃり暮らし」森田まさのり

- これをやられたら感動するしかないだろ!泣くしかないだろ!あまりに王道ですが、それでも素直に感動出来る。それは丁寧に積み重ねられたエピソードのため。お笑い芸人を目指すふたりの高校生が主人公ですが、放送作家の存在を同時にきちんと描くことで、物語に厚みが出ています。ラジオのハガキ職人から作家を目指すところなんか、かなりツボ!ルーキーズブームとお笑いブームの後押しを受けるまでもないほどに名作です!

医師 / 岸本 倫太郎

- 内容は漫才だけどふとしたとき自分の仕事にあてはまる名言もあったりして森田先生は懐がでかい!と改めて確認いたします。あと描かれている芸人さんの後ろ姿がしびれるほどかっこよい。フィクションだけど漫才ファンが普段見れないシーンを見せてもらっている錯覚に陥ります。ありがとう森田せんせい!

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

「ヘタリア」日丸屋 秀和

- 国擬人化マンガ。アニメ化もされ……るところだったんだがどうなるものやら。ともかく、国を擬人化するだけで壮大な歴史もギャグになったり萌えマンガになったりするのがおかしい。国家間の戦争の歴史や、力関係にまつわる定番のネタを、いろいろな切り口で読めるのが楽しい。メタ歴史マンガ。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

「へんしんものがたり」渡辺ペコ

- ラウンダバウトも好きだけど、個人的には断然こっちが好き！大人のためのおとぎばなし集。えぐい場面もある、大人の残酷童話と言った感じでしょうか。その残酷さのなかにも、切なさ、あたたかさが感じられる、ちょっとゆがんだ『愛』がつまってる作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

- サラッとした絵で描かれる、ドロツとした内容。感情の軽さと重さを巧に使い分けた現代のお伽話。というかほんとはこわいグリム童話ノリ？自分達が知らないだけで本当はこんな世界があるのかもと思ってもいいくらい現実との密着度がありえないのに共感を呼ぶんだからホント不思議。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

「マイガール」佐原ミズ

- 佐原さんの漫画は絵のタッチも丁寧なお話の描き方も大好きで。毎日に疲れて、ちょっぴり心がやさぐれそうな時に読んで欲しいです。あたたかい気持ちになります。人ってあったかいんだなあ〜。

フジテレビアナウンサー / 松尾 翠

「まじかるストロベリー」まつもと剛志

- こんな世知辛い時代なので癒しは如何？ヤングアニマルコミックの長寿癒し系 4 コマまんがといえば「まじスト」しかありません！ イラストは少女漫画チックな可愛らしいタッチですが、内容は更に読んでいて微笑ましくなります。優しいお話が多くてほっとしますよ。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

「まつのべっ！」秋吉由美子

- 掲載誌を転々としながらも 10 年近く連載されたストーリー 4 コマ作品。ファンの間で熱望されていた単行本化が 1・2 巻合計で 500 ページ超というボリュームで 2008 年についに実現した。この作品の魅力は、何とんでも散りばめられた複線が終盤で一気に収束するという 4 コマ作品では他に類を見ない展開と構成であろう。連載当時、月に数ページしか載らない 4 コマ漫画でありながら毎号先の展開が気になってしょうがないという経験をしたのはこの作品が初めてだった。相次ぐ掲載誌の移動に長期連載のストーリー作品という途中参入の難しさのためこれまで面白くてもなかなか人に薦めづらい作品だったが、今回の単行本化を気にぜひ多くの人に読んで貰いたい。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

「ミカるん X」高遠るい

- こんなに面白い作家がいて、こんなにキチまうマンガがあるんだと、このコメントを読んでもくれた皆さんに一石を投げかけたい。

往来堂書店 / 三木 雄太

「ミス・ポピーシードのメルヘン横町」山本ルンルン

- 『マシュマロ通信』『オリオン街』など、オトナになってから読んだほうが発見が多いマンガを、ローティーン向けに描いてきた作者のオトナ向けマンガ。作者の観察力がすばらしい！子供の残酷さと寛容さ！

文筆業 / 海猫沢 めろん

「ミスミソウ」押切蓮介

- ここ数年の押切蓮介の仕事ぶりは凄い。生産量が凄だけでなく、引き出しの多さにも感心させられる。その作品群の中からこれを選んだ。今、称賛しておきたい作家さんです。

ライター / 芝田 隆広

- 連載第1話目を読んだ時の衝撃は今でも忘れられない。押切氏といえば代表作『でろでろ』をはじめホラーギャグを得意とする作家として知られているが、そんな氏がホラー専門誌の「ホラーM」で始めたのはギャグは一切無い「オバケ」といった霊的な存在も全く登場しない本作『ミスミソウ』。が、オカルト的な要素など全く描かれていなくともこの作品は極上のホラー漫画であり、そこに描かれているのは人間の“狂気”である。粗筋を書くだけでもネタバレになってしまうため多くは語らないが、メンチサイド(精神破壊)ホラーと銘打たれた本作はまさに読者の心をえぐる物語だ。

Webサイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 おろし

「ムダヅモ無き改革」大和田秀樹

- 麻雀マンガだけど麻雀はあんまり関係なくて、とにかく熱量の絶対値で笑える怪作。某元総理も某現総理(当時外相)も大活躍しすぎ! マンガの「マンガの面白さ」が極まっている一作。

月下工房#書評系 / サイトウ マサトク

「メンズ校」和泉かねよし

- 女性誌掲載の作品だが、男性心理をよくつかんだギャグの連射が素晴らしい。男性読者こそが読むべき。東村アキコもそうだが、女性作家の笑いの感覚はとみに光っている。真の意味での青春ものとしても良い作品だ。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

「もっけ」熊倉隆敏

- 同じく今年が最後。少なくとも6巻までは良作だった。

レビュアー / 福井 健太

「もやしもん」石川雅之

- 言わずと知れた超メジャータイトル。こちらも今年がラストチャンス。

レビュアー / 福井 健太

「やさぐれパンダ」山賊

- なんてたって、ミュージシャンは漫画もいけるんやぞ! ってことをわかりしめしてくれた作品。ミュージシャンなめんな!

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

「ゆうやみ特攻隊」押切蓮介

- 押切蓮介の圧倒的な仕事量とその安定したクオリティは絶対に評価されるべき。中でもギャグ・格闘アクション・ホラーの要素が混然となった本作はインパクト強し。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

「よつばと!」あずまきよひこ

- 既に様々な賞に輝いている定番だが、レギュレーション的に最後の機会なので一票。

レビュアー / 福井 健太

- この作品もまんが大賞の規定ギリギリになってしまいました。ほんの少しずつ成長していくよつばちゃんを見るのが楽しみです。 周りのキャラも随分と出てきて賑やかになりましたね。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 絵とふきだしとコマによって、「時間」を描くことができるということを、このマンガはものすごくシンプルに、だけれども緻密に、繊細に、おバかに、教えてくれた。

あゆみ books 田町店 / 佐藤 歩

- 仕事から帰ってきて、気分をリセットするときに読みます。大人も子供も、お兄さんも。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 「萌え系」とカテゴライズされそうなキャラクターのルックスに敬遠している人がまだまだたくさんいる様子で、本当にもったいない！いまさら、と思われるかもですがもうひと押ししたいです。絵、コマわり、構図、ストーリー、すべてが計算されつくしてマンガとしての完成度が完璧で、さらに作者のエモーショナルな部分もちゃんと垣間見える。新巻を読むたびに「ほんとに大好き！」と思う。で、また全巻読み返す。その繰り返しです。8巻なので、今年ぜひ！

ライター / 門倉 紫麻

「よにんぐらし」宇仁田ゆみ

- 父、母、娘、息子、4人のファミリーマンガ。野生児3人に囲まれて、右往左往するお母さん。ほのぼののしてて、優しい気分になれる。子育てをしている同年代の友人たちに贈りたい。大変だろうけど、全国のお父さんお母さん、がんばれ。子育て、がんばれ。

米子高校 司書 / 野間 勤

「ラウンダバウト」渡辺ペコ

- とても「女の子」的な物語だと思います。読めば読むほど、深くなります。

会社員 / 林 礼春

- この作品を読んだとき、日本に居ないので仕方ないとは言え、今までチェックするのを見逃してた自分に腹が立ちました・・・それぐらいインパクトがあり、面白かったです！！作品によっては、むらが若干ありますが、今後がとっても楽しみです、もっともっと読みたい作家さんです。

韓国漫画専門店・COMICCOZZLE・店長 / 野田 真人

- 中学生にしかわからない、楽しかったり悔しかったり戸惑ったりしたあれやこれやの日常があまりにも鮮やかに再現されているので、読むたびにいろいろ思い出しては胸をざわつかせておりました。まだ頭が追いつかなくて説明のつかないごちゃまぜな感情がものっすごリアル。当時の自分にこれを読ませてやりたい衝動にかられます。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- 中学生の日常を丁寧にすくい上げている作品。また、世の中の多様性をちゃんと受け止めて、複雑に考えることから逃げていない。例えば、貧乏が原因でバカにされている同級生について「びんぼうとか お父さんがいないとか そーゆーのは ツライこともあるかもしれないけど でも それって カワイソウとは ちがくて」と主人公が言うところ。とても印象に残ってる。貧乏＝可哀想という単純な枠組みに陥らず、考え続けることにとどまっている。こういう部分の積み重ねが物語に厚みを生み、いい意味で心に引っ掛かる。ついつい読み返したくなって手が伸びる。

米子高校 司書 / 野間 勤

「ラッキー」村上かつら

- ボロ泣きしました。発想も、自然に展開するストーリーも、設定をストレートに生かした表現もいいです。1巻完結ながらきちんと気持ちを昇華できる爽やかな読後感で、忙しい人にこそお勧めしたい。底辺に流れる優しさに癒されます。以前から好きな作家さんですが、読後感がすっきりしないものが多くあまり人に勧めようとは思っていませんでした。が、これは万人に勧めたいです。派手さはないですが、純粋に感動します。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

「Real Clothes」槇村さとる

- 女性と女性の関係性を描いたら右に出るものは出ない槇村さとる。単なるOLの成長物語にとどまらない幅の広さと登場人物の造形はさすがだ。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

- ここへきて俄然ターボがかかった感がある。抜群の安定感……という「無難」ぼく聞こえるけれどそうじゃなくて。チャレンジングでもある。槇村作品のなかでも、メッセージ性が強く出すぎておらずエンターテイメント性と絶妙なバランスを保っている。長いキャリアのなかで、新しい代表作をまた生み出す、というところに脱帽。

ライター / 門倉 紫麻

「リかってば！」長谷川スズ

- 今年も押します。月刊誌での連載ですが、ページ数も多くなくテンポ良く読める作品です。これでもうちょっと掲載されれば嬉しいんですが…（現在長期休載中）。大人が繰り広げる中学生日記…？みたいな恋愛コメディです。

ブックファースト新宿店チーフ / 渋谷 孝

「愛気」ISUTOSHI

- オリジナル流儀の武術を使う主人公の格闘マンガです。強さのピラミッドの頂点に主人公が位置するために彼に反感を持たなければめっちゃくちゃ気持ち良く読めるマンガです。躍動感等動きの描き方が素晴らしく格闘マンガにうってつけの作家だと思います。

信長書店四条河原町店 / 中村 誠亨

「悪魔とラブソング」桃森ミヨシ

- ほとんどの主要登場人物のコンプレックスを全て暴露する恐ろしい作品。不器用で、美しく凜と見えながらもコンプレックスいっぱいの主人公は、こんな人いたらしんどいなーと思いつつ、どうしても見守ってしまいます。普段わかっているオブラートに包むような人の表裏やコンプレックスを、可愛らしい絵柄で上げつない程に見せつけられるのは、意外と中毒性があります。もちろんキチンと救いもあり、勢いのある面白いマンガだと思います。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

「雨無村役場産業課兼観光係」岩本ナオ

- 天狗もいいけど私は雨無！田舎がないのでのどかな雰囲気は弱いのです。そして何と言ってもヒロイン「メグ」が最高…！少女マンガのヒロインの素養は全く感じ取れない脇役ビジュアルですが主人公がキュンと来ちゃうのが納得のステキ女子なんです。これからの恋はやっぱり刺激より癒し★

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

「駅から5分」くらしふさこ

- 近所で普通の生活を送っている人達の日々の間を、ゆったりきたりしている感覚。何かを言うのが野暮なほど面白すぎる。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- 先鋭かつ重奏。大胆かつ繊細。前衛かつ正統。何がすごかって、この作品が単なるまんがではなく、2008年という今の“少女まんが”として成立しているところ。くらしふさこ恐るべし。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

- 心のベスト2巻賞。『駅から5分』は、現在『コーラス』で連載中の作品です。70年代からずっと、第一線の少女まんが家として活躍し続けているくらしふさこさんの最新作。豊島区駒込の小さな街・花染（はなぞめ）町で起るさまざまな出来事が、オムニバス形式で描かれています。『駅から5分』は、中学生の初々しい初カップルにまつわる記憶喪失事件を発端に、物語が転がり出します。再会した幼馴染みの大人の男女、風船をきっかけに強烈な初恋を体験する小学生の女の子・るり、親に対する反抗から一人暮らしを始めた女子高生、「王子様」に一目惚れをしてしまう女子大生の「姫」、アニメ声優界の先輩後輩の間で起こる栄枯盛衰、ロボットオタクのメガネ男子・入谷……。主要な登場人物を数えただけでも、なんと20人を超えます。くらしふさんは、わずかに駅から歩いて5分ほどの範囲で起る人間模様を、蜘蛛の巣のように張り巡らせた伏線を使って、緻密な筆致で描き出します。思わず見過ごしてしまうような小さな出来事や心の機微を、これほど詩情豊かに細ぎ出せるなんて。これらの登場人物の独立したエピソードが、少しずつ重なり合い、次の物語に影響を及ぼしていく構成は、みごとの一言につきまします。特に2巻の声優さんの回で、鳥肌が立ちました。この冷徹ともいえるべき、俯瞰目線を持ち得るからこそ、くらしふさんはすごいんだな。この外山りおという声優が体験したことは、くらしふさんも含め、あらゆる才能で勝負する系の仕事を選択したひとが体験すること、または今後体験するであろうことでもあります。しかもこのラスト。滂沱の涙です。そして特筆すべきは、男子。とにかく登場する男子が、あいかわらず、ことごとく、かっこいい。じつは、くらしふさんは、私の大好き「チーム男子」を好んで描く系譜の作家ではありません。むしろ、真逆の作風と言えます。主人公の女子に対して、唯一無二のちょっと意地悪なクール系の王子様を配置する、という1:1の恋愛関係の的を絞った物語を主軸に描いてきたかたです。自分のことながら、チームも描かず、めがねも少ないのに、こんなに長年に渡って、くらしふまんがが好きって、一体どういうこと？と不思議なんですけど、やっぱ、かっこいいんですなあ、本命男子が！最高に。もう、別にチームでなくていいんじゃない？、男女で1:1、上等じゃないか、と自分の打ち立てた学説（＝チーム男子最萌学説）を思わず捨てそうになってしまう、数少ないまんが家さんです。しかも、『駅から5分』は、くらしふ作品には近年めずらしく、メガネ男子増量気味なところが、うれしい誤算です。先生、ありがとうございます。さっきも言及しましたが、くらしふさんの描く男子は、昔からすべからず男前なんですけど、すごくメガネ度が低いんです。一番手キャラがメガネじゃないのはわかるとしても、二番手、三番手のあて馬キャラにも、案外、メガネをかけさせていないという。ずっとかけっぱなしのメガネ男子（もちろん、サングラスキャラは除く）といえば、『いつもポケットにショパン』（1978年初出）の「上邑先輩」以来なんじゃ、あわわ。『駅から5分』では、中年の警察官メガネに、高校生のロボオタメガネ、中学生のクラス委員メガネ……なんと3世代に渡るタイプ違いのメガネ男子が堪能できます。ああ、どれも素敵。個人的な好みでいえば、ロボオタメガネくんに、軍配が上がるかな。「生徒会長」とのツーショットが、また、これ、ぎゃーってなります、ぎゃーって。くらしふさんには珍しく、チームっぽい、あるいは共犯っぽい関係性が素敵です。まさか、くらしふ絵でこんなツーショットが拝めるなんて、うれしすぎます。毎年、毎年、かっこいい男子を描く少女まんが家は星の数ほどデビューするし、かっこいい男子の定義も時代と共に移ろいます。それに「ついて行く」だけでも至難の業、それなのに、くらしふさんはいまだに「提案し、先導する」センスをお持ちなのです。かっこいい男子に対する審美眼、感度のよさは、ある意味、ジャニーさん並みの希有のセンスかと。くらしふさんは、つくづく自分で決めたセンターコートを下りないひとだと思えます。右も左も判らない少女期（くらしふさんは憧れの10代デビューを果たした少女まんがエリート）に、ふと選んだ自分の仕事の間、いわばセンターコートが、少女まんがであったとして、それから何十年もその場で戦い続けるのは、本当に困難なことです。くらしふさんの前後にデビューした作家で、いまだに少女まんがというセンターコートで作品を発表し続けているひとは、数えるほどではないでしょうか。年を経るにつれ、成年誌やレディスコミック誌、主婦コミック誌に移ったひと、物語を描くことを止め、エッセイまんがにシフトしたひと、それから筆を折ったひと、そんな変遷を重ねるのがもしかしたら、普通のことなのかもしれません。デビューから三十数年、少女まんが界の巨匠の腕は、驚異的なほど、相変わらず衰え知らずであります。さて、少女まんがは、関係性の物語と言われていますが、フードも同様です。つまるところ、フードのうまい、まずいは、食べるひとの関係性に大きく左右されます。くらしふ作品の端々

には、驚くほど鮮明に、このフードの真実が体現しています。そしてフードの登場の仕方のあまりの自然さに心を奪われます。たとえば、『駅から5分』でも、ネットの掲示板の闇に取り込まれそうになった女子高生をさりげなく現実に引き戻してくれるのは、彼女の反抗の対象であるお母さんの作った「甘い子供味のきんぴらごぼう」であったりするのです。そこで初めて読者は、はたと気がつくことになります。「甘い子供」なのは、女子高生のほうだと。うますぎる。結局、一生の記憶に残る味というのは、この「きんぴらごぼう」のようなもののことを指して言うのだと思います。くらもちさんは人間関係を描くことによって、結果、フードの真実をも解き明かしてしまう希有な作家。彼女の作品を繰り返し読みたくなる理由は、そこにもあるんです。

料理研究家 / 福田 里香

「俺はまだ本気出してないだけ」吉野春秋

- 痛々しすぎて笑えません……。自分の一番だめな部分を見せられているようで不快ですらあります。すごいですね。ダメ人間。

会社員 / 林 礼春

- ポジティブとネガティブをごっちゃまぜになった男心が気持ちいいくらい描かれている傑作。かっこ悪いって実はかっこいいって少し思われるかっこいい作品です。”大器晩成”っていい言葉ですね。

マンガ全巻ドットコム / 安藤 拓郎

「俺様ティーチャー」椿いづみ

- まっとうな少女になりたい元不良の偏った乙女妄想に噴き出すこと間違いなし！主人公の幼馴染で担任の先生の俺様かげんにハマります

成田本店とわだ店 / 上山 遼

「夏目友人帳」緑川ゆき

- 去年とあまり代わり映えしないラインナップになってしまいましたが、ほとんどの作品が条件を今年で失ってしまう為、あえて挙げてみました。アニメ第二期も始まりますます好調な夏目友人帳。やはり優・恐・楽など、人が思いうる感情を「人間」と「物の怪」という立場の違うキャラクター達を配する事によって、見事にしかも綺麗に映し出している作品だと思います。最近コミックスで泣ける作品が減ってきましたが、友人帳はジャブのように効いてきますね。今回は大賞取れると良いです。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 好きな漫画は沢山ありますが、「人に勧めたい」と選ぶなら真っ先に思いつくのがこの作品です。妖怪たちの名前を束ね、力を封じた込めた『友人帳』。その『友人帳』の持ち主であった祖母・レイコに代わり、妖怪達に名を返していくと決めた貴志の、妖怪たちとの交流を描いた素敵なお話。『友人帳』という名前が含む意味の切なさにじんわりし、ニャンコ先生の可愛さに癒されます。とても心を揺さぶられる良い作品です。

株式会社 TSUTAYA / 豊島 さやか

「海街 diary」吉田秋生

- さまざまな年代の「女性」について、正面から愛情を持ちつつ冷静に描けているのは吉田秋生しかないんじゃないかと思う。萩尾望都の持つ鬱屈や楨村さとの説教くささもなく、あくまで4人の家族の生活を丹念にマンガにすることで、逆に鮮明に女性たちの姿が浮かんで来て、その繊細な技術に脱帽した。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 美しい鎌倉の街の描写が印象的です。親戚付き合いや、近所づきあいといった、一般的な家庭が経験するであろう事柄が描かれています。物語のメインは、古い民家に4人で暮らす姉妹なのですが、その4人の性格がまったく違うので、飽きのこないストーリーになっています。大きな家で、みんなで暮らすこと特有の描写が多数あり、家と、そのまわりのコミュニティに根ざした暮らしもいいなあとおもうようになりました。

IT系企業 副主任 / 廣瀬 公将

- 前回は選びましたが、今回も選びます。だって2巻が出たんだから。いつまででも待ちます。だから早く3巻出てくれ。

オフィスオーガスタ マネージャー / 樋口 健

- 前年ではノミネートされたものの、残念ながら大賞から外れてしまった作品ですが、やっぱりどうしても読んで欲しいって思いが強いマンガ。自分の周りを見ても一見は幸せに毎日楽しく生きてるように見える人も、実はその裏で、悩みを持って生きてるのが判る人もいる。それが家庭環境であったりもするわけで、自分ではわかり得ない自分とは違う他人が生きてきた道程。人それぞれ色々な環境で育ち、自分だけが幸せでも不幸でもない生き方をしている。家族っていうものに人の人生は大きく左右されてるって事が改めてわかる作品。

コミック担当 / 下司 卓史

「海獣の子供」五十嵐大介

- 近年まれにみる壮大な物語世界に引き込まれます。モノクロなのに総天然色の世界が読み手の脳裏に展開する。海原はどこまでも青く、光はキラキラと、闇はそれ自体質量を持つがごとくトロリと濃密に。五感を刺激される読書体験は、ひとえに画力の賜物でしょう。ワクワクします。舞台となるのは日本の、どちらかというところと辺鄙と言ってもいい海辺の町。その佇まいを細やかに描写しながら、世界的スケールの海洋口マンを現出させた作者の構想力とイメージーションに拍手です。一人ひとり厚みのある人物造形もいい。今の時代の日本でマンガを読んでいて良かったと思えるマンガ表現の金字塔。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

「外天の夏」佐木飛朗斗 東直輝

- 『特攻の拓』のラストにおいては、暴走族の世界に染まらず、オタクとミュージシャンという、まったく異質なアイデンティティを持ち続けた拓と天羽の精神が最後に大きな抗争を止めた。しかしながら現実には甘くない。80年代ヤンキー漫画のほとんどは他のジャンルに遺伝子を残せずその狭い世界観のなかで衰退していった。しかし『特攻の拓』だけは音楽=気志團、や、SF=海猫沢めろん『零式』にその遺伝子を残した。それはこの作品が実は単なる「ヤンキー漫画」などではなく、同種と異種の交流と争いを描いたハイブリッドなヒロイックサーガ（三国志や大河ドラマのような）であったことを証明している。渋谷、池袋、秋葉原——世間の注目がさまざまな街にうつりかわっていったにもかかわらず、佐木飛朗斗は淡々と横浜の物語を綴り続けた（SF『靈獣記』でも舞台は横浜!）。ドメスティックなローカル性をポジティブに捉えるHIP-HOP=現在の不良文化のキーターム。だとすれば、クラシックとロックにこだわる佐木のメンタリティは異質といわざるをえない。異様なアドレナリンの分泌量を感じさせるネームと、パラノイックな音楽趣味——今回、佐木は『爆麗音』と『外天の夏』を同時進行することによって「音楽」と「不良」というものを分離してバランスをとろうとしているように思える。もはやここにはヤンキー漫画などという括りでは表現できないなにかがある。それを本当の作家性と呼ばずしてなにを作家性だというのか。DQNだとカリア充だとかヤンキーだとか不良……ではない! そんな問題じゃねえんだ! レッテルをはるまえにきっちり読んでほしい。誰かの言葉や頭でものを語るのをやめてくれ。そんなものより意味をなさぬ叫びのほうがまだマシだ。誰も信じるな。もちろん俺も信じるな。でも自分だけは信じる。とにかく彼が初期から一貫して描いているテーマは「組織統一=全体性の回復」そして「脱アイデンティティ=どこにも属さない者こそがそれを成し遂げられる!」という右翼的であり左翼的であるというアンビバレンツな夢想なのだ。しかし、佐木飛朗斗は最終的にまるで現実で復讐されるかのように、物語をコントロールできずクラッシュさせつけてきた。特攻の拓の白くボロボロのラスト……R-16の唐突な幕切れ……。満を持して開始された佐木サーガの集大成ともいべきこの『外天の夏』は時代性やマーケティングなどというものとまったく無関係。古くろうが、ダサくろうがかまわない。とにかく現時点での佐木哲学を感じていただきたい。

文筆業 / 海猫沢 めろん

「奇跡のヒト」土屋ガロン 張慶二郎

- 世の中のスピードは上がり続け全体を把握することは難しくなり、さりとして流れに乗らない＝アウトロー宣言をするようなもの・・・それってほんとに”まとも”なのか？納得できないことはやらない、潔さが読んでいて気持ちのいい作品。マンガのいい時代の空気が内包されているような気がする。作家2人の人柄のなせる業なんでしょう。

POP 作家 / 久保 朝美

「機動旅団八福神」福島 聡

- 味方と敵が交錯してきてところどころ話が見えづらけれど、それでも2周読んで理解しようと思わせてしまう作品です。単純に福神のフォルムなども好きで、戦闘シーンでの激しさと、マシンのフォルムのゆるさのアンバランスも見ていて楽しいです。

メガマン・ギター / 涼平

「極道の食卓」立原あゆみ

- これはなんというか……びっくりしたマンガ。この著者から、こういうマンガが出てくるとは思わなかった。奇をてらってるわけじゃないのに、物語がどう展開するのかぜんぜん読めない。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

「極道めし」土山しげる

- 「お酒を飲みながら、仲間とマンガの話で盛り上がる」マンガ読みとして、最高のひとときだったりします。マンガだけでなく、映画や旅行、美味しかったご飯の話・・・その場がないモノの話なのに、また追体験できた様に思える楽しさ。極道めしは刑務所で過ごす男達が「旨かったメシの話」で盛り上がるマンガ。話を聞いている他の囚人達と一緒に、口の中を唾液でいっぱいにしてながら「旨いもん話」に耳を傾けてください。想像力がすごい！さて、今日も「極道めし」の話を肴に、おいしいお酒でも飲みますか！

フルハウス八戸ノ里店店長 / 佐藤 誠

- 料理・グルメ漫画では根強いファン層をもつ土山しげるのマンガの中で、一番面白い！なんといっても、「食漫（造語）」というジャンルの中でもポイントは空気感でもなくレシピデモなく、ましてやバトル要素でもなく、【シズル感】というイメージだけをひたすらぶつけていくために刑務所に収監されている受刑者が語る食に対するエピソードという設定。最強だとおもう。

モーションピクチャー プロデューサー / 小林 智之

「勤しめ！仁岡先生」尾高純一

- 今一番新刊を待っているコミック明日使いたい日本語がつまっている。

成田本店とわだ店 / 上山 遼

「金魚屋古書店」芳崎せいむ

- 素材選びとドラマ作りには小狡さを感じるが、それなりの佳作であることは確か。やはり来年には規定外だろう。

レビュアー / 福井 健太

「金剛番長」鈴木央

- メジャー誌からはこの一作。マンガなんだからどんなメチャクチャでもいいんです。マンガとしての楽しさにあふれた作品。卑怯番長かわいいよ卑怯番長。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

- 曲がったことが大嫌い。筋を通してなんぼの男の中の男、金剛番長が主人公。番長という現代にはない存在が現代だからこそ際立ち魅力的に思えます。本誌連載で行われている君の考えた番長募集！などの企画も含めて「少年マンガ」として素晴らしい、の一言に尽きる。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

「君に届け」椎名軽穂

- 去年大賞にならなかったから今年は頑張っただけ欲しい。このままグダグダになるのかと思いきや、新キャラが登場したり、風早がアクション起こしたり、なんだか物凄く気になる展開。続きが気になる！！…という訳で今回も一票！！

ソロシンガー / 山野井 千佳

「劇画漂流」辰巳ヨシヒロ

- ただの自伝なのだが、まさに漫画界の歴史そのもの。東京のトキワ荘の流れとは別に、大阪で劇画工房が起こったという話は知っていたものの、大阪がトキワ荘の黄金期の東京と同時代にこれほどもりあがっているとは知らなかった。大学生の手塚治虫、デビューしたてのさいとう・たかを、つげ義春。淡々と描かれているのが良い。惜しむらくは最後、60年安保闘争から一気に時代が飛んで手塚治虫の7回忌というエピソードで終わってしまっている所。70年代の物語も読みたかった。

書店員 / 小磯 洋

「潔く柔く」いくえみ綾

- ストーリーで何があるというわけでもないのに、この漫画はいつも面白い。どの人もリアルにいい人でもあり嫌なやつでもあるので、読んだ後もの入れ込む人物がいなくなる（笑）。それがいい。

KELUN vo./gt./ 児嶋 亮介

「結婚しなくていいですか。」益田ミリ

- 絵柄と内容のギャップ、いや、この絵柄だからこそその魅力か。エッセイマンガっぽい形状で損をしているかも。フィクションマンガとしておもしろく、完成度が高い！厳しくてせつなくて、でも実は結構楽しい独身女の生きざまを、こんなにフラットに描ける人はたぶんほかにいないだろう。いろんな人生があるよね、って口で言うのは簡単だけど、実際は他人の人生にそんなに気持ちを傾けることはできない。でもこの作品を読むと、ほんとに「いろいろあるよね」ってすんなりと肚に落ちる。

ライター / 門倉 紫麻

「好きっていいなよ。」葉月かなえ

「坂道のアポロン」小玉ユキ

- 小玉ユキならではの美しい描写が素晴らしい。今作では BL っぽさも色濃くなって、さらにステキ度、トキメキ感が増した。

ライター / 芝田 隆広

- 水たまりに反射する夕陽や鍵盤を跳ねるピアノの音、なにもかもがきらめいて眩しい、極度の思春期好きにはたまらん作品。60年代の高校生とジャズ、この設定だけでどれほどの満足感かということです。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

- おもしろい！青春！漫画っぽい！アートブレイキー、僕も大好き。but not for me も大好き。少女マンガ版、青春でんでけでけでけみたいやねー。

ミドリギターと歌 / 後藤 まりこ

- 転校を繰り返してきて友達もいなかった西見君が新しく転校して先で千太郎とりっちゃんに出会って仲良くなっていくお話なんだけど言葉で書いたらたったそれだけの事なのだけどマンガで読んだらすげーいい！ああ言葉で旨く説明できない。。1巻の途中で西見君が『今までひとりっきりの部屋で腐るほど時間が余っていた夏休み どうしよう いろんなことが 楽しみすぎて頭がおいつかないや』っていうセリフが幸せすぎて忘れられないっす。

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

- 女性向けならこの一本。時代の空気、その時代の青春模様を美しく描き出しているし、登場人物の心の動きが細やかに描き出されているのも良い。やおい的視点で読んでも悶えるほど萌えられるので、1本で2度美味しい作品。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

- 少女漫画だけど、少女漫画っぽく無いような？絵の所為か（笑）？作風が古臭いとゆーか、なんかよく解らないけど（笑）、好き。無線部の子が地味に面白い。超脇役だけど。主人公の繊細な部分に共感しました。あとジャズ良いよねー。あと息苦しくなったら屋上に行くのも凄く解る。良いよね、屋上。なんだ、このコメント。

ソロシンガー / 山野井 千佳

「山本善次郎と申します」槇 ようこ

- 幽霊が見える主人公（ほたて）というのは良くある設定ではあるが、お父さんとのやり取りがかわいいので、気にならない。その、お父さんも謎が多いので今後が気になる。

TSUTAYA 渋谷店 / 実松 由夏

「私はシャドウ」粕谷 紀子

- メチャクチャ面白い。ハラハラドキドキ、まさにエンターティメントの極地！ とにかく掲載誌『YOU』の充実振りは凄い。この他にも、塩森恵子、榎村さとる、星崎真紀、きら、…連載陣がどれも外れなく面白い。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

「弱虫ペダル」渡辺 航

- 週刊連載は自転車のようなもの。旅が始まれば最初はフラついて読者の声援と流れる景色が作家を別次元まで駆け上がらせてくれます。

フリーライター / 会田 洋

- 2008年最後に何気に読んで一気に3巻読破しちゃいました！所要時間30分！あつという間でした。この作品も少年マンガの王道的一作ですね。たぶんこの作品に足りないのは『知名度』だけかもしれないです。全国の少年少女に読んでほしい良い作品です！

BOOKS昭和堂コミック担当 / 川崎 一利

- いま最もアツい熱血明朗自転車マンガ。時々こういうのが出るから「週刊少年チャンピオン」は目が離せない。モロかぶりの先行作として同じチャンピオン連載だった曾田正人「シャカリキ！」という傑作があるわけだが、「シャカリキ！」が一人の圧倒的天才の孤独と栄光を突き詰めた作品であるのに対し、「弱虫」の主人公・小野田坂道は勝負より「みんなで一緒に走ること」の喜びを全身で伝えようとする。この違いを評価したい。坂道以外の脇キャラの造形も魅力的だし、何より、オタク系エッチマンガの人かと思っていた作者が、これほど骨太の正統派少年マンガを描くとはうれしい驚き。少年誌にヒネりすぎの作品が多い昨今、とにかくストレートに元気が出る本作は貴重。

新聞記者 / 石田 汗太

「女の子の食卓」志村志保子

- 食べ物を絡めたショートオムニバスはいろいろありますが、この作品ほどささやかな痛みを伴い、しかしほのかな余韻が心地よい作品は無いと思います。出てくる食べ物は、読む人それぞれにも思い出がありそうな身近なメニューばかり。わたしはこの漫画を読んで、「あのスクランブルエッグ」を作るようになりました。

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

「少女ファイト」日本橋ヨヲコ

- 人にすすめたいマンガならやっぱり『少女ファイト』がいちばん！ 考え抜かれた構図で描かれるバレーボールの面白さ。抱える悩みや問題をぶちまけて、登場人物たちが「チーム」になっていこうとするその濃い過程がたまらないです。恋愛要素もぐるぐる絡んで、よめばドキドキニヤニヤしてしまいます。おすすめ！！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

- いろんな悩みをかかえ、それでも少しづつ前に進んでいく主人公たちが織り成す物語は、熱く、話数が進めば進むほど深さ、濃さが増しているような気がする。気が付けば手に汗を握っている自分がいます。スポーツマンガの中ではイチオシ。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川 元良

- 序盤、読んでいる時はそこまでぐっとは来てなかったのだが、3巻から4巻を読んでいるうちに、いつの間にか惹きこまれていました。序盤はここまでの伏線、プロローグだったのだと思えば、それも納得。登場人物が、それぞれに心の中に何かを持ちながら、でもバレーが好きだからバレーがやりたい！それが伝わってきます。シンプルな絵柄のマンガなのに、冷たさが感じれない。とても熱い熱気が感じられるマンガだと思います。

フリー・デザイナー / 平沼 寛史

- 今、一番熱いスポーツマンガ！ 正直、1、2巻の頃はキャラクターも多すぎて、いまいどんなマンガかはっきりわかってなかったんですが、4巻まで出た今！ ああ、こういうヤツがこういうこと考えてこうしてたんだ！ と、自分もチームの一員になっていくかのようなこの状態、サイコーにおもしろいです。バレーボールのチームスポーツとしての奥深さが自然にわかっちゃう丁寧さ、アツアツの決めぜりふ、どのページを見てもすごい数の人数が登場している密度など、とにかくテンション高いです。試合のシーンももちろんなんだけど、個人的には、動きが全然ない合宿の断食のシーンが一番熱く感じられるのも、あらためてすごいなあ、と思ったり。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

「笑うかのこ様」辻田りり子

- 世の中を「傍観」する…。こんな第三者目線の作品あったでしょうか？ 冷静にクラスの間人間関係を解説。うーん、勉強になります。帯のコピー「女子の8割は友人のダイエットを阻止しようとする。」も非常にキャッチーでした。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

「新・自虐の詩～ロボット小雪」業田良家

「神のみぞ知るセカイ」若木民喜

- ギャルゲーの理論も極めれば、リアル女の子に通用するんですね！僕の人生は間違ってたかった！若木先生ありがとう！

コントユニット「アンチパッティングセンター」代表 / 増山 寿史

- 「聖☆おにいさん」あたりは推す人が山ほどいるだろうから、あえて誰も推しそうにない本作に1票。「現実(リアル)なんてクソゲーだ！」が信条のオタク少年・桂木桂馬が、悪魔との契約により、現実の女子を「ギャルゲー理論」で落としていく話。信じてもらえないかもしれないが、これが切なくて感動的なのだ。現実よりゲームの方が好きな桂馬は「いやいや」リアル女子を攻略していくが、けっこうフラグがきちんと立ってしまうのは、桂馬の「2次元愛」がホンモノだからに他ならない。しかし、リアル女子が桂馬に心を開いた瞬間、憑き物が落ち、彼女は桂馬への「思い」の記憶をすべて失ってしまう……この設定に涙しない男がいるだろうか？ これは究極の「愛と誠実」についての物語なのだ。

新聞記者 / 石田 汗太

「人形芝居」高尾滋

- 9年振りに新刊発売！！待ってました。嬉しくて投票しちゃいます。やっぱり高尾滋作品は美しい。繊細な世界観。素晴らしい。ハマっちゃうんですね。設定も面白いし。もっと早いペースで新刊が出れば良いのになあ。

ソロシンガー / 山野井 千佳

「壬生義士伝」ながやす巧

- 映画、ドラマと映像化は数回なされてきている作品ですが、これこそ真の映像化作品。主人公の吉村貫一郎のまとう寒気までも描かれています。また、新選組隊士が誰だか一目でわかるように描き分けられているところも、新選組ファンとしては嬉しいところ。新選組隊士の一般的イメージを最も適格に画像化されていると思います。

医師 / 岸本 倫太郎

「数学ガール」日坂水柯 結城浩

- 数学色の強い原作がちゃんと恋愛コミックに仕上がっているのに驚いた。コミックでも数式は頻繁に出てくるが、むしろこのマンガをもっと深く読みたいがためにもう一度高校の教科書を探して数学の勉強を試みたくてしまう。

ひょうたん書店 / 松林 久雄

「星は歌う」高屋奈月

- 高屋奈月作品は前作「フルーツバスケット」からのファン。笑いもあるけど、何より「心」を描くのが上手い。心の闇。凄く共感出来る。そして感動する。泣くよ、これ。読んでると愛しさが滲んでくるとゆーか。何かがこみ上げてくるんです。言葉のひとつ、ひとつがとても好きです。表現が好き。世界観が好き！ハマるよー。そんな訳で愛の一票(笑)！！

ソロシンガー / 山野井 千佳

「青空エール」河原和音

- ブラバン少女 × 高校球児の青春マンガ。友だちとの会話、そしてがんばる男子の背中を見て自分も励まされる。夢中になれることがある青春。がんばるってカッコ悪いことじゃない。まぶしくて泣きたくなくなるくらい青春設定で照れもごまかしも一切なく、ただまっすぐに少年少女の成長を描こうとする作家の心意気に背筋が伸びます。これからどんなふうに、部活や恋愛や成長ぶりをみせてくれるのか、新しい少女マンガに期待！

恵文社バンビオ店 文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

「絶対★アイドル」須田洋 ぎん太

- 素敵な原作と美しい絵師による奇跡の傑作！これほど幸せなマッチングはなかなかないと思います。流行の女装モノですがダントツの出来です。

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

「総天然色乙女組」みなづき忍

- 元気な女の子といえばこの作品。萌え要素に満ちているけれど、萌えだけにとどまらず、キャラクターが生き生き描けているのがよい。個性は強いけどみんないい子なのも。この作品も知らない人が多いんだろうけれど、知らないのはもったいない良作。

おたく史研究 / 吉本 たいまつ

「大奥」よしながふみ

- 男女逆転大奥。時代の渦に翻弄される人間ドラマに引き込まれる。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

- 4巻を読んで、ドラマティックな展開ながら、あまりキャラクターにまわりつかずにさばさばと物語を進めるところが、突拍子もない設定を歴史物として成立させている妙味なのかもしれないと思った。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 昨年挙げた作品は避けようと思ったが、出たばかりの第4巻を読み、やはり落とせん！と思い直して再投票する。この途方もない発想を、冗談やギャグに逃げず、「本当にあった（かもしれない）歴史」として描く力業にめまいがする。よしながふみは今回も票が割れるだろうが、「きのう何食べた？」より断然こっちでしょう。

新聞記者 / 石田 汗太

- 4巻が出ましたね。安定しておもしろいです。この先どうなるのか、本当に目が離せません。そうか、この世界では、歌舞伎は女ですか！みたいなこととか、吉原は男娼妓ですか！とか、設定された世界観がやっぱりおもしろいです。

料理研究家 / 福田 里香

- SF という略語が「サイエンス・フィクション」という意味を失っていないとすれば、これは間違いなくSF。舞台が未来じゃなくて過去だけど、宇宙じゃなくて江戸だけど、どかんと据えたセンス・オブ・ワンダーがあって、ある科学的なルールのもとで関係性がそして感情が強力に動きまくっていて、つまりはこれはSFであるだけでなく、優れたSFであるということ。

コミックナタリー編集長 / 唐木 元

「大東京トイボックス」うめ

- 商売と現実の間でもがきながらそれでも己のやりたいことをあきらめない青臭さは自分の今の状況とシンクロするところが有りすぎてついつい感情移入しすぎてしまうマンガです。ゲーム業界という特殊な世界が舞台ではありますが、そこで描かれる問題や悩みはベタで普遍的なもので、仕事で悩んだことがある人なら誰しも共感できる部分が多々あります。前作「東京トイボックス」と違って主人公だけでなく、脇役の若手スタッフにもスポットが当てられており、ちょっと青春なテイストもあったりします。それに伴って主人公の悩みもどうやって若手を育成するか、みたいなところにシフトするんですが、それによってさらに自分はやりたいうようにやれなくなっていく…というジレンマも抱えることに。わかる、わかるよ！正直今の自分の気分に時期的にあまりにもびったりハマってしまって冷静な評価ではないかもしれません。でも「仕事に熱くなって何が悪い」という強烈なメッセージの力はビッグヒットマンガ「働きマン」にも全く引けはとらないモノが有ると思います。

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

「町でうわさの天狗の子」岩本ナオ

- 主人公は、クラスのさわやかな男子に想いをよせたり、仲の良い友人と助けあったり、新しい仲間とぶつかりあいながらも友情を深めたり、父親の都合で将来の進路に悩んだりする、どこにでもいそうな普通の女の子。ただ父親が天狗なだけ…。突拍子もない設定なのに「これって意外と誰でも経験することかも」と思わせてしまうバランス感覚。天狗が住む世界と主人公が住む世界を同一地平上に描いてしまう力量は素直に凄いと思います。

医師 / 岸本 倫太郎

- 2008年、読んでよかったベスト。絵で嫌がられそう（特に少女マンガを読まない人に）だが、会話が本当に上手で、脇役すべてにいたるまでかわいらしいと思ってしまうほど。「雨無村役場産業課兼観光係」とも迷ったが、群像劇として巧みな「天狗」に軍配を上げた。

大日本印刷 / 佐々木 愛

- 人間も物の怪も、自然に共生している空気が物語にあふれているところが好きです。そして田舎の高校生の恋愛で、こんなんだよと田舎出身の身としては懐かしくなる漫画です。

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- 東北と思われる田舎町の役場（！）を舞台になんともキラキラしたストーリーが展開する「雨無村役場産業課兼観光係」（既刊1巻）もあって、どっちにしようか迷ったのですが、マンガ大賞の性格を考えて見た目が取っつきやすい本作を推します（村役場よりは高校を舞台にした方がやはり…）。ただし設定は飛び抜けて突飛。なんせ主人公は女子高生なのに天狗の子ですから。「ホームセンターをこよなく愛する」イケメン彼氏とか系の小技の利いたキャラクター設定もいちいち面白い。とぼけた味わいはくせになります。イラストっぽく感じる時もあるのに、実に達者で線画（ペン画）の快感を感じさせてくれる描線も快感です。

日本経済新聞記者 / 天野 賢一

「天顕祭」白井弓子

- この世界観、このクオリティ、このボリュームを、誰に頼まれたのでもなく同人誌で見事に描き切ったことを評価したい。07年度文化庁メディア芸術祭奨励賞受賞おめでとう。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

「天体戦士サンレッド」くぼたまこと

- アニメから入るコミックスの買い方もあるのです。 しかも八巻目が出てしまい、この作品もまんが大賞の規定ギリギリということで、あげてしまいました。 最近はコミックス原作のアニメ化が春夏秋冬、各シーズンで最低でも 10 作品以上なっていますが、この手のギャグものはめっきり無かった気がします。初めてヤングガンガンで読んだ時は、正直な所絵がちよこっと雑で読みにくいなぁ (ごめんなさい!) とか思っていたのですが、読み直して大声を出して笑ってしまった自分がいました。ネタ的な所もあるので、ある意味マニア受けコミックスなのかもしれませんが、嵌ってみては如何でしょうか。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

- 1巻から力を入れていたのに、アニメ化してから爆発的に売れた。書店員としてはちょっと残念。しかし、こういうタイプのギャグマンガも内容と面白さをしっかり伝えれば読者はついてくる、と再認識させてもらった。

ひょうたん書店 / 松林 久雄

- 主人公が悪役というのも面白いけれど、ヒーローたちの日常の様子が「役者の日常ってこんな感じかな。」とか思わせてしまうところが面白い作品です。あと、いちいち怪人のデティールが細かくて面白いです。

メガマン・ギター / 涼平

「電波の城」細野不二彦

- 読み始めたときは「テレビ局関係の話か」とくらいに思ったけれど、ところどころ謎につつまれた主人公と「ここはこういくかな」と思う部分をうまく外されて行く感覚が面白くて、次が気になってしまいました。

メガマン・ギター / 涼平

「賭博霸王伝 零」福本伸行

- 内容は「顔がキレイになったカイジ」以外の何者でもありませんが、ひと勝負に何年もかかる本家に比べて圧倒的にテンポがよく、ギャンブルのアイデアも趣向が凝らしてあって楽しめます。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

「同級生」中村明日美子

- 風と木の詩 (竹宮 恵子先生著) 以来、胸がキュンとしたとってもいい BL のお話しでした。中村先生の描く、キャラクターの目力にくらくらします。すいこまれる!!

アニメイト / 鈴木 寛子

「謎の彼女 X」植芝理一

- ボーイミーツガールの新しい形がここに。心の疎通をはかるアイテムは、なんと彼女の『よだれ』。さすが植芝先生。ちょっとへんてこな恋の形を描かせたら、裏切りません。言動・行動が謎だらけな女の子に振り回されながらも恋の甘さが伝わってくる不思議コミックで、掲載雑誌の作品の中で一番最初に読んでしまうくらい毎月楽しみです。

伊吉書院類家店 / 中村 深雪

「日常」あらゐけいいち

- 読めば読むほど自分のギャグのレベルが下がっているように感じる。でも笑っちゃう。なにかの作品の帯に「不覚にも笑ってしまった」とのコメントがあったが、この作品にこそ相応しい。

ひょうたん書店 / 松林 久雄

「年刊中年チャンプ」中年

- 男はみんなバカでガキでエロいもの！昨年の「キャノン先生」（超傑作）に引き続きめろん先生 2008 ベストエロマンガ（not 実用という意味）！雑誌掲載時から追いかけていた（えっへん！）ものの、単行本が出るとは思わなかった！中年先生がんばった！なんといってもネームの頭の悪さが最高！人をいやな気分させないストレンジネスとユーモアあふれるエンターテイメントエロマンガ！

文筆業 / 海猫沢 めろん

「白竜 LEGEND」天王寺大 渡辺みちお

- こんなにカッコいいキャラがいたなんて勉強不足でした。やはりゴラクはすごいです。

COMIC ZIN コミックバイヤー / 塚本 浩司

「秘密ー トップシークレッター」清水玲子

- 表紙だけの印象で買って帰り夜寝る前に読んだのですが。。。。怖かった！！！！怖すぎた！！読んだ事を後悔するくらい怖かったのだけど最後まで読んでしまった。あんなグロくない女性っぽい絵でさらさらとグロい内容は半端なくこわいっす！一巻を買って二巻を買うまでに心の準備が必要で三ヶ月もかかってしまったし怖いなら読まなきゃいいのに結局気になりすぎて買ってしまいました。このマンガはお昼に読みます！

フリー・カメラマン / 平沼 久奈

「百合星人ナオコサン」kashmir

- 針の先のストライクゾーンにビーボールを300キロで投げ続けるこれぞオタク漫画の鑑です！そう！なぜおれはわすれていたんだ！これでよかったんだ！これが古き良きオタク趣味！涙！

文筆業 / 海猫沢 めろん

「百舌谷さん逆上する」篠房六郎

- あたまのいいひとが好きだ。あんまり良すぎて、単純な善悪を飛び越えて人の裏側が描けちゃう上に、さらにそこで遊べちゃうクレバーな変態が大好きだ。今まではダントツで富樫先生だったんだけど、この作品読んで篠房先生もかなりのものだと思った。まったくもって、代えの利かないおもしろさ！

POP 作家 / 久保 朝美

「貧乏神が！」助野嘉昭

- 少年誌にも女の子が主人公の漫画が増えて面白いなあと思いました。主人公の超ラッキーガール イチ子と貧乏神の紅葉の掛け合い、足の引っ張り合いが毎回楽しいです。最近新しい漫画雑誌が増えてきて作品群も面白そうなのばかりでなんか凄いすね。

All Japan Goith/TA-SHI

「不思議な少年」山下和美

- これは長いことやっていますが、やっぱり最高におもしろいことに間違いないっす。もっとみんなにも読んでもらいたいからおします。

アレンジャー・元少年カミカゼ / 和教

「片恋の日記少女」中村明日美子

- ふざけてるように見せかけて、おおまじめな感情で突っ走る登場人物たちの躍動感。読後の爽快さは絶大。「恋」にかたちはないんだと改めて気づかされた作品です。もっと中村先生の少女マンガ読みたい。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

「放課後ウインド・オーケストラ」宇佐悠一郎

- 出だしは良くある廃部寸前、廃部決定の部活を復活させていく青春ものですが、すっかり忘れていた青臭さがとっても良いです。吹奏楽部っていう文化部の花形でありながら、今までコミックスのテーマにされにくかった（無いわけではないです）ものを取り上げているのも作品の趣旨と相俟って全体の面白さを引き上げていると思います。

まんが王バイイングマネージャー / 日吉 雄

「放浪息子」志村貴子

「僕の小規模な生活」福満しげゆき

- 「ここまで描いて大丈夫なの？」とひやひやしながら読んでます。裏をかえせば、そこまでの信頼関係が作者と編集さんの間にあるからかしらなんて、勝手に深読みしています。あとおくさまの様子にとってもいやされます。

アバンティブックセンター京都店コミック担当 / 中村 真依子

- マンガ家の日常を描いた作品。妻がイスに座っていて、その後ろで主人公が正座してる構図。これがなぜか無性に好き。妻が「よかたい、よかよか」なんていっていると、もう満足度が 20%増。あと、ネガティブかつ過剰なまでの空想も良し。描いたマンガの内容を妻に抗議されても、それさえもネタにしてしまう。これぞ、私小説ならぬ私マンガの真骨頂。さらに踏み込んでくれることに期待。

米子高校 司書 / 野間 勤

- 2008年ひそかに色んな作品が生まれていた「マンガ家マンガ」の中でも一番の問題作。マンガを製作する上での担当編集とのやりとりや、悶々悩むさまをダダ漏れに描く、というコンセプトは今までもそれぞれ名作「まんが道」や、桜玉吉の一連の作品でも描かれてきたテーマではありますが、ここまで意識的に裏側を見せている作品は初めてではないでしょうか。しかもマンガになった時点で帯びるフィクション性を逆手に取って、リアルなやりとりを描きながらも、いやでもこれはマンガですから、みたいな逃げ道、あるいは言い訳をしながら描いてる感じもまさに福満しげゆき。いろいろ計算してるけど、結果的に第三者からみると完璧な天然、…と思わせてやっぱりそれすらも計算なのか、ってとこまで考えさせられる複雑な作家性。祝2巻。

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

「堀田」山本直樹

- すごい！爆発してる！かっこよさにびっくりした。夢の中。

ミドリ ギターと歌 / 後藤 まりこ

「万福兎」下吉田本郷

- 世の中には「フクシ」と名前がつく2人のスゴいやつがいる1人は天才打者落合博満の息子、幼少時代から類い稀なる個性を発揮していた「落合福嗣」そして、もう1人はこの「万福兎」の主人公「福志」である。決して前者の個性に劣ることはない。憎めない・・・いや、愛すべきキャラクター「福志」ほっこりした気分になりたい人はとりあえず読んでみなさいよっ

HMV リバーウォーク北九州 チームリーダー / 阿部 大介

- ぶさいくな福志がかわいく見えてしまう不思議なマンガまったく関係ないがふくしと聞くと中日の落合監督の息子福嗣くんを思い出してしまう・・・かわいくないのだが

あゆみ BOOKS 仙台青葉通り店 / 土屋 修一

「夢見る古都」星野リリィ

- 妖怪の少女と人間の青年がペアとなって帝都におこる事件に挑む「おとめ妖怪ざくら」も楽しいけれど、耽美的なタッチが強いかかされている物語としてはこちらに軍配。夢と現を行き来する狭間で、ワガママで純情な少女が魔法を見たり、夢を彷徨ったり男に出会ったり騙されたりしながらどう変化していくのかを見守りつつ、入れ子のような構造の物語がどこに帰結するのかを想像したい。

書評家 / タニグチリウイチ

- 酷薄にして邪気にして可憐。ファンタスティックにしてエロティックにしてグロテスク。おもちゃ箱をひっくり返したような星野リリィの才気と魅力に溢れる佳品。第1巻は、少々大風呂敷気味とも言える雄大なので、是非ともこのテンションのままじっくりと最後まで描ききってほしい。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

「妄想戦記 ロボット残党兵」横尾公敏

- ミリタリーで人造人間で SF という「男の子」の大好物。絵も設定もどこか懐かしく、でもパロディくさくはなっていない。著者の豪速球かつ直球な情熱がひしひし伝わってくる。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

- ケレン味特盛り、個性爆発！正直絶対大賞なんて取れるわけないと思って投票してませんが、激アツで特濃の全てが振り切れてるマンガです。タイトルは「ロボット」ですが、実際はサイボーグです。第二次世界大戦、膠着した戦局を打開する為に、日本は機械化人間「日の丸人」を実戦に投入した！うわありえねー！ヴィジュアルはジョージ秋山のオロカメンを彷彿とさせるなんか間抜けな感じですが、そこで描かれる機械化人間達の苦悩と悲哀は完全にマジ。今後は世界各国が次々と独自の機械化人間を開発して…というスケールのでかい展開。いろんなことが振り切れすぎてよくわかんなくなりそうにはなりますが、このエンターテインメント性は本物！売れてくれ！

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ 店長 / 大山 敏樹

「夜、海へ還るバス」森下裕美

- 「結婚前に自分がレスかどうか確かめたい女性」をめぐる、大阪を舞台にしたドラマ、なんだけど。おわーーーー、と言いたくなるぐらい、登場人物がいやと言うほどリアル。わかりやすく「キャラを立てる」ってわかりにくい部分を切り捨てる、ってことで、マンガ以外にもいろんな物語が生身の人間からナニカを切り捨てて「キャラを立てる」と思うんだけど、ナンにも切り捨てずにゼーンぶ丁寧に物語に入れ込んで、最後の最後まで、登場人物のイメージが揺れ動き続けるという、すごい文学作品。頼りないだけだったはずの婚約者も最後に決めるどこ自然に決めるんだよなー。なのに！このマンガが平積みになってるところも見たことなく、棚差しを一度見ただけなのが、ほんとにもったいないです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

「臨死！！江古田ちゃん」瀧波ユカリ

- 女子のあばかれたくない部分があまりにも、あまりにも赤裸々に描かれている作品です。だから本当は男性に読んでほしくないかもしれないくらい。でも面白いからなあ・・・嘘がひとつもないマンガです

aluto バイオリニスト / 佐藤 帆乃佳

「鈴木先生」武富健治

- すでに相応の評価はされているが、巻が進んでも衰えぬばかりかいや増すテンションには敬服。今これを読まずして何を読む、という作品。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 6巻にやられました。総まとめ的なかんじになってますが、討論好きにはたまらない展開です。

トリニティモバイル WEB デザイナー / 河本 知香

「恋の心に黒い羽」ヤマシタトモコ

- ありとあらゆる感情が内在するのが人間だということを、まざまざと目の前につきつけられました。どうにもならないことが多すぎるけど、そんなに不幸ってわけでもない登場人物たちの前向きさにすごくぐっとくる。BLの枠を超えて、むしろ男子にも「読んだほうがいい」と胸を張って言える作品。

オリオン書房ルミネ店 / 池本 美和

「恋の話がしたい」ヤマシタトモコ

- 思っきりBLですが、絵もサラッとしてるし男女問わず読んでほしい一冊。自然に流れる日々の会話のテンポや主人公の心理描写のリアルさが思わず自分の心拍数を上げる甘酸っぱさ！主人公、いい年の男ですけどね（笑）恋を成就させたものが味わう、幸せと、戸惑いのラッシュがまたリアルでムフフ…。よしなが先生に続く予感がする作家さんです。

三省堂書店新浦安店 / 大塚 綾乃

「恋愛ラボ」宮原るり

- バカなヤツほどかわいい！を地で行くガールズコメディの傑作！

COMIC ZIN コミックバイヤー / COMIC ZIN コミックバイヤー

「論理少女」つじ要

- なんでもかんでも脳トレの文字をつければ売れる現代ですが、美少女と論理パズルというありそうでなかった組み合わせにいつのまにかハマってしまいます。

コントユニット「アンチパッティングセンター」代表 / 増山 寿史

「惑星のさみだれ」水上悟志

- 水上先生の作品は全部好きです!! 登場人物みんな好きですが、何故かトカゲや犬やカジキマグロの方が凄く格好いいこと言うのがなんかいいです。

All Japan Goith/TA-SHI

- 絵柄や緊急時以外の展開の非常にのほほんとした萌えマンガの雰囲気からの戦闘等の緊急時の『ガンツ』もかくやという絶望感はかなり読む者に衝撃を与えたいと思います。正直3巻くらいまでは個人的には薄い気がします。それがそれ以降の物語の展開や伏線の張り方は凄いいと思います。

信長書店四條河原町店 / 中村 誠亨

- ライトノベル的なモチーフをマンガに逆輸入して、見事な群像劇を紡ぎあげている。クールな青臭さが魅力的。

書評系ブログ「yama-gat site」管理人 / yama-gat

- 水上悟志先生は日常と非日常の融合が非常に上手い。非日常の中でも登場人物がしっかり普通の日常を生きている感じが伝わってくる。

ひょうたん書店 / 松林 久雄

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2009 マンガ読みが選ぶ 2008 年の一推 !!